
COBALT-SERIES
ライエノーツ
エクサール騎士団3
叛罪の空域
若木未生
集英社

あきらはレアでなく、実はディシスであった——衝撃の事実を告げられ、晶月界に消えたイオ。残されたライア、ガディス、ユーマの3人の騎士団は、ただひとりの巫女・あきらを守るため布陣を立て直さねばならない。一方、「地球上最大の異能力者」クリストファーは、まるでゲームを楽しむようにライエノーツと礼神官アスヴァルの闘いに介入を図る。クリストファーの仕組んだ恐るべき罠とは？

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

エクサール騎士団（ライエノーツ）3

――叛罪の空域――

若木未生

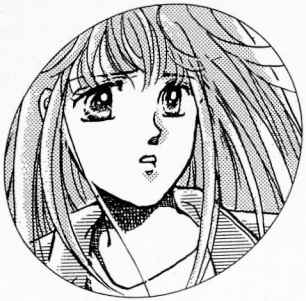
集英社

目次

エクサール騎士団（ライエナーツ）3——叛罪の空域——

序……8
第一章　闇を纏（まと）うもの……16
第二章　謀略者たち……40
第三章　硝子箱……84
第四章　終焉（しゅうえん）への誘（いざな）い……129
第五章　叛罪の空域……164
終章……218
用語解説……225
あとがき……227

登場人物紹介



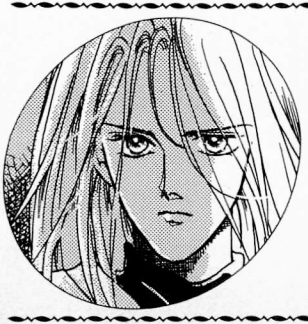
来生あきら

来生家の長女。14歳。異次元の世界〈琅月界〉からやってきた巫女（エクサール）であるが、本人はその頃の記憶を失っている。ふたりのエクサールのうち、レアだと思われていたが、実は双子の姉ディシスだと告げられ…。



来生　衛

来生家の長男。19歳。またの名をライア。エクサールの守護を使命とするライエスのひとりで、光を操る。優等生ぶっているがかなりのエゴイスト。アスヴァルはもとより、イオやユーマにも、あきら＝レアと欺いていた…。



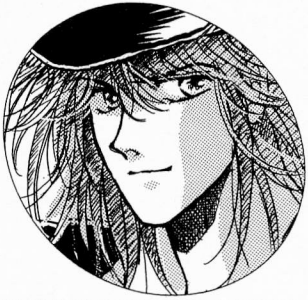
来生　閃

来生家の次男。17歳。またの名をイオ。風を操る守護者である。無口で無表情なため、一見孤高の哲学者ふうだが、実は不器用で口下手なだけだったりする。あきらがディシスであったと知り、晶月界で自らを水晶壁に封印する。



来生 貢（みつぐ）

来生家の三男。16歳。またの名をユーマ。水を使う守護者。中性的なルックスで、巧妙に母性本能をくすぐるタイプ。イオと同じくレアの守護者であるが、あきらを守るために、彼女のもとにとどまる。



ガディス

またの名をソニー・W・エクセル。炎を使う守護者。ヴァーミリオンの瞳を持つ直情的な異端者。〈琅月界〉が圧壊した際、ライアたちとは別の場所に転移していた。クリストファーに因縁を感じ、連絡をとりあっているが…。



クリストファー

大富豪ローディン家の子息。わずか12歳だが、人知を越える強大な精神エネルギーを操る、地球上最大の異能力者。世話役エドウィンの勧めにのり、世界征服を企む。ライエノーツとアスヴァルの闘いに介入する理由は…。

イラスト／羽音こうき

エクサール騎士団（ライエノーツ）3
――叛罪の空域――

序

「なあんだ、結局、そういうことになっちゃったんだ」

期待していなかったベースボールの試合の結果を聞いたときのように、くせのないプラチナブロンドの髪を揺らして、その少年は小さくため息をついただけだった。

「ウィンドマスターの性格からいってそうなって間違いじゃないんだろうけど、それでライトマスターの仕掛けどおりの結果しか出ないってのがやだよね」

この十二歳の、まだ充分に幼さを残す少年が呟くのはニンテンドーのコンピューターゲームの内容についてのコメントではなく、彼の暮らすUSAマサチューセッツ州から大陸と太平洋と日付変更線をはさんだ彼方――ちっぽけな島国に端を発する、世界的規模の事件についての感想である。

国際的規模、ではないのだ。国境や国家は、ここではまったく意味をなさない。あくまで根源的に、世界の存立に関する問題だ。もっとも、それを正しく理解する人間など全人類のうち

でもごくひとにぎりであることを、少年の傍らに控えるエドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンはよく知っている。

そして理解するのみならず、そこに『介入』し、『操作』までしてのけるのは、この少年以外にはありえまい――。

地球上最大の異能力者、クリストファー・ローディン・ジュニア以外には。

「それからどうなるかなんてぼくにもわからないよ。あのね、ウォークマンがどうするのかはぼくのほうが知りたいんだよ？『どういうつもり』なのかと『どうする』かはぜんぜん違うんだもの。そこまではぼくだって面倒みられないよ」

左耳にあてた受話器のほうに首をかしげるようにして、クリストファーはそんな言い方をする。言葉の内容がどうであれ、いつも淡々とした空気が底に流れているのが、この少年の特徴だ。

しかし十四時間分のれっきとした時差をわきまえない通話相手に対して、エドウィン・アーサーは先刻から、やや不機嫌な気分を禁じえない。あの野蛮人が国際電話をコレクトコール扱いでかけてくるのまでは承認できないこともない。ないが、向こうでいくら太陽が輝いていようと、この地においては、クリストファーはとうにベッドに入っていなければならない時間なのだ。これはゆゆしき問題である。

「ねえウォークマン、ぼくにどうして電話してきたのかな？　展開をおもしろくしてくれるん

だったらぼくはいいんだよ。でもぼくウォークマンのことは好きだけど、あのエクサールの彼女とかライトマスターなんかと仲良くする気はないよ。だってあの人たち、ぼくの計画には協力してくれそうにないし。ぼくもわざわざ協力してもらいたくないし」

さらりとクリストファーが言うのを横で聞き、少年が案外本気で『ソニー・W・エクセル』、すなわち〈炎使〉ガディスの動き方にひっかかりを覚えていることをエドウィン・アーサーは感じとる。

クギをさすだけでなく、そこに彼なりの恨み言までしっかり含ませているようなのだ。クリストファーはまだまだファイアマスター・ガディスに価値を高くおいているということだ。

エクサール・レアと思われていた来生あきらなる少女が、実は〈炎使〉ガディスの本来の主君エクサール・ディシスであったというなら、ガディスのとる行動の原理は以前ほど単純なものではなくなるはずだった。クリストファーの目的のために、あの男がどれほど有益にはたらくかは、微妙なところにさしかかっている。エドウィン・アーサーにはそのように思われる。

いずれにしても、すべてにおいて最終的な決定権をもつのはあくまでもクリストファーなのだが……。

＊　＊　＊

やっぱり拗ねていやがる。

ソニー・W・エクセルこと炎使ガディスも、トーキョーS区南町のはずれ、半壊したきり補修もされていない電話ボックスのなかで、苦いため息をついていた。

「とにかくここはひとつ黙って俺に預けてみる気にならねえか、坊主……。もともとが礼神官アスヴァルと俺たちの問題だ。おまえの世界征服ごっこからは、ちょっとばかり路線がズレてるぜ。こっちのケリがついたら俺もおまえらにつきあってやったっていいのさ。そいつはそいつで面白そうだからな。……そういうことさ」

ガキのご機嫌をとろうとするソニー・W・エクセルというのも、見るに耐えたものではなかろう。錆色の赤毛のなかに片手の指をつっこみ、ぐしゃぐしゃとガディスは自分の髪をかきまわす。まったく、いまいましい。

文句を言うならアスヴァルとライアに言えという気分だ。——どう考えても自分は悪くないのだ。

クリストファー・ローディン・ジュニアには約三年間、衣食住プラス社会的立場を保証されたぶんの義理がある。ガディスが義理の二文字を出したとたんに、「ソニー・W・エクセルの義理か」と、あの〈光使〉ライアは絶妙に腹のたつ確認の仕方をしたものだったが。

……そうだ、炎使ガディスが〈還らざるもの〉の名をもつ以上、義理やしがらみに縛られる姿などライアの目にはただ滑稽なだけだ。それくらいわかりきっている。

つまりガディスが不似合いな『義理』を口にするというだけで、遠い海の向こうのスポンサーをガディス自身それなりに気に入ってしまっていることが、ライアには証明されたも同じなのだ。

他の連中がどうとるかはともかく。あの鼻持ちならない、一対の片割れには。

「アスヴァルはもう弱体化したと思っていい、あとは奴から司杖を取り戻すだけだ。時間はかからねえはずだ。そうしたら後は誰にもおまえの邪魔はさせてやらねえ。だからおとなしく、いい子にして待ってろ……頼んだぜ」

ああ俺としたことが俺としたことが……と内心で歯軋りしつつ胃壁が甘ったるくなるほど穏健な科白をガディスは吐いてみせ、そのまま勢いにまぎらせてさっさと受話器をフックにおろした。こんな救いがたい口説き文句を口にする羽目になったのも、何もかもまとめてライアのせいなのだと大幅に責任転嫁することにする。

少年への言葉に、偽りの気分は混ざっていなかった。長居など不要だ。アスヴァルの始末さえつけば、この国とは即座におサラバだ……。

「知ってんのさ……。どっちみち、ここが俺の居場所じゃねえってことくらいはな」

アスヴァルのガースがひきおこした騒乱によってめちゃくちゃにされた町並みを醒めた瞳で眺めやり、ポケットから煙草をひきずりだしながら、ガディスは低くひとりごちる。

海の向こうを、帰る先と思うことも自分には所詮、できないのに。

今、炎使ガディスをこの地にひきつける力の源は、たったひとつだ。
ひとつきり――ただ、マイラ・エクサール・ディシスという名の鎖だけが。

＊　＊　＊

彼の舌にあわせた程度に熱いホットミルクをエドウィン・アーサーが運ぶまでの間、クリストファーはまだぼんやりと思案しつづけているようだった。
広い書斎の一角に作られた防弾仕様の大きな窓に、お気に入りの安楽椅子を向きあわせ、真夜中の暗い空を見るともなしに見上げている。ときおり、この少年が本当に視力をはたらかせているのか判然としなくなることがエドウィン・アーサーにもある。彼に視えるものがあまりに多大であるゆえに、だ。
その双眸は、色を薄められた翠玉。
何も知らぬ者が彼を見れば、創造主による奇跡のごとく愛らしい造形と不思議なほどの存在感を、ハリウッドの銀幕の内にこそふさわしいとでも、口をきわめて褒めたたえるだろう。あるいは神の申し子とでも。
もっとも、エドウィン・アーサーはもはや神など信じていない。
「いかがですか、クリス様？　いよいよ答えはハッキリした感じなのでしょうか」

「うん。あのねえエドウィン、ぼくウォークマンのこと贔屓したいのはやまやまなんだけど、それにしてはウォークマンの思い入れがライトマスターのほうに傾いてるかなあって……あの人、いつもことごとく素直じゃないから。べつに、そういうところもぼくは嫌いじゃないけどね。かえってわかりやすいし」

穢れも邪気もない、天の使いのようにかわいらしい面持ちでクリストファーはふりかえり、エドウィン・アーサーが支えるトレイから湯気のあがるマグを受け取った。

「それにぼく、こんなところでカヤの外になってるのはいやかも」

「なるほど。でしたらやはり次のプランにゴーサインで、よろしいわけですね？」

「しかないよね。じゃないとソウタが気の毒だし。エドウィンもそっちのほうが楽しいみたいだし」

「もちろん古今東西、陰謀は派手なほうが、燃えるハートもドキドキなうえに目先は螺旋状態と決まっておりますからね」

エドウィン・アーサーはにこやかにそう答えると、さっさとトレイを片付け、間をおかずバーバリーのコートに腕をのばしている。

黒髪黒瞳のエドウィン・アーサーの容姿は国籍不明としかいいようのない、さまざまな民族の要素が極上にブレンドされたものだったが、その風貌は特に英国風のかたくるしい着こなしに向いている。ゆえに彼はどんなときでもかちりとした上質なスーツを欠かさない。コートの

選択もまたしかりだ。
「ぼくも起きて待っていていいかなあ、エドウィン？」
「いえ、とんでもない！　百里の道は一夜の睡眠からとも申しますからね」
「そうなの？」
「ということもあるかもしれません」
「ふうん。ならエドウィンが面白いところをとっといてくれればいいけど……」
少しがっかりした表情で、だがおとなしくクリストファーは甘いホットミルクをすすると、寝室に入るため椅子から立ちあがった。
「じゃあね、エドウィン、また明日ね。おやすみなさい」
「クリストファー様？」
外出する身支度をととのえたエドウィン・アーサーは、ふとその少年の背中に呼びかける。
「どうかしたの？」
再びクリストファーがふりかえり、ごく変わりのない調子で尋ねかえした。
「……いえ」
エドウィン・アーサーはあらためて唇に微笑を浮かべ、美しい発音の英国英語で夜の挨拶を告げた。
「おやすみなさいませ」

第一章　闇を纏うもの

I

微かな風が伝えた、あの哀しみだけが胸の奥から離れない……。

ふたつの金褐色の瞳が、なつかしげにあきらを見つめかえした。

〈風使〉イオの、深く静かな絶望を秘めたまなざしが。

――いや違う、あれは来生閃だ。来生家の次男で、言葉数が少なくて不器用で、人とふれあうのが不得意な……それでいてすべてに優しい……

自分の、大切な二番目の兄で……

『仕方ないんだよ、ぼくらはレアの守護者で！　ぼくはあきらの守護者になれても、イオには……イオには無理だからっ!!』

貢は泣いていたかもしれない。

あきらに言い聞かせながら、まるで彼自身の胸に杭をうちこんでいるようだった。風使イオ

にずっと寄り添ってきた〈水使〉ユーマとして？　あきらの知らない――思いだせない過去の分の想いも含めて？

いつも明るい、芯の強い末の兄が、あんな風にためらいもなく涙を流すのなんて見たことがなかった。なにもかも、現実のことから遠く離れていた。

目がさめて、全部が夢だったら。

どんなに……

『イオはもう帰らない。二度と……』

嘘。嘘つき。

本当はそんなこと、あなたは信じたがってなんかいないくせに……ライア……！

「あっ……」

あきらの小さな叫び声に、枕元に控えていた貢がすばやく顔をあげた。

「……あ……だめだ……」

こざっぱりとしたアースカラーのシーツの内側で、あきらは落ちかかった髪の毛ごと自分の額をつよく掌でおさえ、かすれた声で呟いている。貢は眉をひそめながら、彼女の眠るベッドの上にかがみこむ。

「どうしたの、あきら？　大丈夫？」

「何かわかったと思ったのに……また消えちゃった、くやしい……」

半ば夢うつつの口調であきらはそんな独白をこぼすと、顔の上半分におしつけた両手をゆっくりとゆるめ、その指の間から貢の影をすかし見た。

天井にとりつけられた照明器具のかたちや枕のすぐ横にのぞく机のつくりは、あきらの部屋のものとは微妙に違う。見覚えはある。よくなじんだ、おちつく空気だ。

「……みっちゃんの部屋……？　だね」

「ぼくの部屋が、うちのなかじゃ今のとこ一番まともだからね」

頷いてみせる貢の表情からは、だがどこか硬さがぬけない。彼らしい軽やかな喋り方が聞けない。それだけであきらは淋しくなる。

心臓のあたりには膨れあがった気持ちのかたまりが居座っていて、頑として動かないのに、そのひとかけらさえも言葉にならない。

それよりも……今はひどく、眠くて。

「ねえ……どうしたんだろ、みっちゃん……あきら話したいことがたくさんあるはずなのに、頭、ぼーっとしてうまく考えられない」

くやしい。

いろんなことが。

奇跡をおこしてすべてをたやすく変えてしまえない自分が。

知りたいことの、何ひとつわかりはしない。彼を慰める言葉も、自分の心をあらわす言葉も、何ひとつ紡ぎだせない。

「あきら、今はそれでいいから」

声音をやわらかく抑えて、間近から貢がそう言い聞かせた。

「今は全部大丈夫だから、あきらは眠っててていいんだ。そうして休んでてくれるのがぼくらみんなのためだから、心配しないで眠っててていいんだ」

「うん……みっちゃんのベッド借りちゃってごめんね」

「ばかだな、他の男どものベッドにあきら寝かせられるわけないじゃないか。あきらが別のとこで寝るったって断固として阻止するからね、ぼくが」

「みっちゃんそゆとこ要領いいもんね」

「こんなぼくでもお兄様の足元には及びもつかないけどね。まったく……」

いつもどおりの愚痴をこぼしかけて、貢は結局、途中で声を呑みこんでしまう。

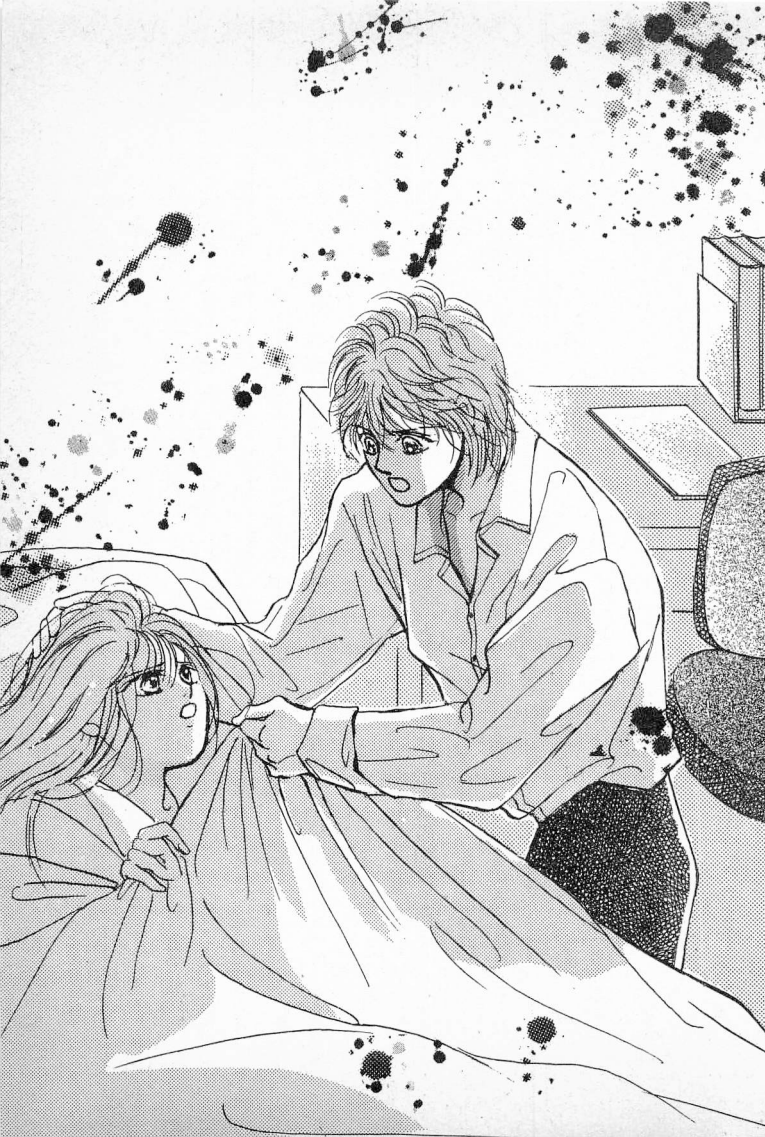
あきらから視線をはずすようにして。

「……なんて言ってる場合じゃないや。あきらはおとなしく寝るんだよ、いいね?」

「みっちゃん待って!」

がばと跳ねおきて貢の片腕をつかんだとたん、背すじの痛みと貧血とであきらはめまいをおこしそうになった。ぼうっとするのはただの眠気のせいだけではなかったのだ。

「無茶やめなさいってば、このばかあきらっ!!　ぼくの言いつけのどこ聞いてっ……!!」
「ごめん！　ごめんみっちゃん、ふたつだけ訊くから！　それだけ教えて、お願いだから！」
さすがに顔色を変えて怒鳴りつけた貢に、すがりつくようにして無理やり声をはりあげる。勢いにおされて貢は唇をつぐみ、不本意なようすでため息をつきながら、あきらの肩をそろそろとベッドの上へと押し戻した。
「どうしてお姫様はお姫様で、こう脅迫が得意なんだろう……。わかったよ、ぼくで済むなら訊いていいよ。ひとつめの質問は？」
「えーちゃんは？　近くにいるよね、ちゃんとあきらに説明できる場所にいるよね!?　勝手にひとりでいなくなってたら許さないよ」
あきらの口から真っ先に出たその名に、貢は一瞬、返答までに間をあける。
「……いるよ。あきらと同じ家のなかに。もちろん親父様もだし、ついでにいったら、炎使ガディスもきちんとね。ガディスはぼくにとっては厭味な奴だけど、実力は充分にあるから頼れないことはないはずだ。ご丁寧にあきらの司杖まで運んできてくれたし」
「……ガディス？」
姿を見た記憶ならある。
晶月界を離れる前——あきらが気を失ってしまう前に。
兄たちと一緒に立つ、そのたたずまいだけで通じるものがあった。四人が揃ってこそ最も自



然な……長いことずっと欠けていた、大きな空白を埋めるパズルの一ピース。

炎使、ガディス……

「いないのは、イオだけだ」

厳しさを含んだ貢の短い一言に、あきらは何も言えず瞳を見開く。

彼は許していないのだ。風使イオが、自ら水使ユーマに依頼したとおり。

その不在を、正当なこととして認めてはしまわないのだ。

もともと優しげで中性的な、線の細い貢の面持ちが、そんな苦しい感情で凍てつくのを見るのは……つらすぎる。

「みっちゃん……」

押しこまれたベッドのなかから、あきらはそっと左腕をのばして貢の袖口を指先でつかまえた。

それでも訊かなければならないから。

ふたつめの質問。

「……あきらディシスだったの？」

「あきらっ……！」

「ごめんね、みっちゃん、ごめん、だけどっ……！　あきらがディシスだったの？　あきらはレアじゃないの？　違うの？」

遮ろうとする貢に何度も謝りながら、途中で言葉を終わらせることだけはせずに、あきらはそう問いかけた。

貢はただ、答えられないというように首を何度も横に振っただけだった。

「どうだっていいんだ、ぼくは……！　ライアやアスヴァルが何を言ったって、ぼくには関係ない、全部どうだっていいことなんだ」

「けど、それがせんちゃんには……」

「あきら!!　あきら、もうやめようよ、そんなこと考える必要なんかないんだ！　どっちみちぼくたちはもうこんな遠い世界まで来ちゃってるんじゃないかっ!!　ぼくはっ……ぼくが、今、大切に思うのは……」

激しかけた貢の声は、長くつづきはせずにとぎれた。

のばされたあきらの左の掌を、両手でゆっくりとつつみこんでベッドの上に戻してやり、彼はうってかわって静かに――とても静かに、呟く。

「ぼくはあきらのことが好きだから、それでいいんだ。本当にそれだけでいいんだ」

「……あきらもみっちゃんのことは大好きだよ」

その言葉のどこにも偽りはないけれど、ここで語られねばならないものとは違った気がする。あきらはもどかしく口をとざしたが、貢はわかってるよと小さく答えて、そのままあきらの枕元から離れた。

「じゃあ質問の時間はおしまい。しばらくおとなしく休んでおいで。それがあきらの義務だよ、いいね？」

貢が部屋を出ていった後になって、あきらは彼が包みこんだ自分の左手に……中指に冷たく輝く、銀色の指輪を見出した。

ディレイ・ザード。

風使イオが最後に手放した、たいせつな使鍵の象徴。

「ザード……」

使鍵の声を聴くことは、あきらにはできない。ザードの認めた主人がここにいないかぎり。はっきりとした強い悲しみと行き場のない憤りが、そのときようやく、身体の内側から湧きだしてきた。指輪のはまった左の握り拳を胸元にきつく抱きしめて、あきらは貢のベッドのぬくもりのなかで目を閉じる。爆発してしまわないように——このまま、大声で泣きだしてしまわないように。

II

因縁の晶月界からこちらがわに戻ってきて、丸一日ばかり、エクサール・ディシスこと来生あきらはベッドのなかから出てこない。礼神官アスヴァルの非道な暴力が彼女の身を苛んだこ

とは、原因のひとつとして充分に考えられるのだが、むしろ、つきつけられた現実そのものにあきらの認識が対処しきれていないのではないかと……つまりは精神的なショックが大きかろうというのが、喫茶店『海』の店主にして医療の心得をもつ来生芳秋氏の見解だった。

ソニー・W・エクセルとしては、その解釈に異を唱える気はおこらない。そもそも、なにごとにもマイペースを崩さないマスターの性格は、ソニー・W・エクセルの趣味にぴたりと合っていて気分がいいのだ。

ただの漂着者にすぎない守護師団の面々に四年間も無条件で家庭を提供してきたこの人物が、かつて実の家族を不慮のことでなくしたらしいという事情の断片だけは耳に入れた。背負うべきものを一度失うだけ全部失ってしまうと、人はそれくらい茫洋とした境地にたどりつくものかと思える。使鍵の加護をうけ守護者の称号を得てしまった以上は、一定以上の年齢をこえて老いることが自分には不可能なのだが、もしその制限さえなければこんな中年親父になりたかったものだと炎使ガディスはまじめに考える。

「もともとあの子は、元気といえばいつも元気なんだが、自分の役目に敏感な子でもあるからね」

「お役目ね……」

開店休業状態の『海』のカウンターに行儀悪くひじをつき、マスター手ずからサービスされたアメリカン・コーヒーをずるずるとガディスはすすっている。

確かに、来生あきらがエクサールとしてとことん自覚に欠ける女だというガディスの第一印象は、ここにきて百四十度ほどまで反転してはいた。気を失いながらも無事に晶月界から自分たちをこの界まで連れ帰ってきたあたりが、わかりやすい証拠だ。だが……

「不合格かね」

「あん？」

「コーヒーだよ。ずいぶん渋い顔で飲んでいるから」

「おお、んにゃ、お味は相変わらずグレイトだぜ。俺の知ってるなかで二番目にな」

指摘されてはじめてガディスは顔をしかめ、拳でかるく自分の頬を小突いていつもの表情をとりもどそうとする。カウンターの内側からそれを眺めて、マスターはふと首をかしげた。

「それにしても本場アメリカでアメリカンをガディスに飲ませてくれた人がいたとは、意外だね。こういう薄味のコーヒーをアメリカンスタイルと呼ぶのは、お国の外のことだと思っていたが」

「……」

ちっ、とガディスは軽く舌打ちする。

「いやな親父だな、妙なことにばかり気がつきやがる。別にどうってこたねえ……日本人もどきのワールドワイドな野郎がたまたま知り合いにいやがっただけの話さ」

「なるほど、日本語が流暢なのもそれで……というわけではないんだったかな」

遠い昔をふりかえる目つきでマスターは彼専用のコーヒーカップを傾けた。カウンターに体重を預けたまま、ガディスはドアのガラスをとおして店の外へと視線をそらした。あらゆる種類の言語に対応できてしまうのは、別に本人の努力のたまものでも良き友人の助けによるものでもなく、自分たちの特殊な才能のひとつである。

……異世界人の。

先刻から外には、警官やそれに類する制服を着た連中ばかりがうろついている。混乱の余韻さめやらぬ街をお掃除したり修繕したりで大忙しなのだろう。

ひとつの街をまるまる巨大昆虫やらSFX的植物群のえじきにした、すべての元凶が、このちっぽけな喫茶店の二階で眠っているとは誰も思うまい。それがライアや水使の理屈だ。しかし。

思いつく馬鹿はいなかろうが……見抜く怪物はいる。この世界がそういう決まりになっていることをガディスは知っている。

彼らにとっては、エクサールなど結局、炯月界を掻きまわす悪質な異物にすぎないということだ。

当然だ。もし琅月界で逆のことがおきていたら、自分の属する界をこうまで乱す原因に対してガディスも似たようなことを感じたはずだ。ライエノーツの一員として。

「やっぱり渋い顔だな。冷めるよ」

「……悪かったな、そりゃ」

マスターに再び声をかけられ、むくれた気分でガディスはカップをとりあげた。

「なにも、閃がいなくなった責任を、おまえさんが気に病むことはないと思うが」

「っ――おい!! 親父!! 俺がいつんなことで責任なんぞ感じたってんだ、えええっ!?」

どがんとカウンターを平手でぶち叩き――それでも折角のアメリカンは無事に守ったが――ガディスは荒々しい怒鳴り声をあげた。

「あんたの息子にゃ悪ィが、俺は金輪際、あの手の軟弱野郎にはご対面したくもねーんだよ!! ライアと違って俺は利用できるもんだろうが何だろうが、要らねえとなったら要らねえのさ。今さら気に病むものなんかどこにもありゃしねえ」

「そうかな。おまえさんと閃は、よく似ているような気がするがね」

のんびりとした調子を崩さず、来生芳秋はそんな言葉を口にしてガディスを理解不能の彼岸に追いこんだ。

「……おい、頼むぜ、おっさん……どこをどうすりゃ俺の麗しい性格が……」

「誰の疎ましい性格だって?」

予告もなく、ガディスの背後、信じがたいほどに間近な位置からぽつりと落ち着いた声が発されたのがその時だった。今度こそガディスは貴重なアメリカンを二口分ばかりカウンターに流出させる羽目になってしまった。

「……どういうつもりだってんだ、このくそトラブルメーカー野郎」
「これは失敬。ディの背中があまりに隙だらけだったので、よもや俺の目の錯覚ではないかと」
ふりむいて獣のごとく唸るガディスのことを見下し、優等生ぶった眼鏡のむこうがわから来生家の長男はきまじめな答えを返してくる。
「ご希望なら、この黄金の指で来生凱殿の首筋のあたりに刺激を与えてさしあげてもよかったんだが。少しは目覚ましになるはずだ。日頃から鍛えてあるものでね」
「衛、あきら向けの待遇をガディスにも応用するのは、少し早いんじゃないのかい。まだこっちの国に来て慣れていないんだから」
「てめえらふたりともどっかネジがぶちぬけてやがるぜ……」
臆面のかけらもない来生衛とそれに順応しきっている謎の親父に、ガディスは初めから対抗しようとすら考えず、苦々しい科白を吐き出した。
黒髪に、黒い瞳をさらに覆う贋の眼鏡という、光使ライアが『来生衛』としてこちらの世界にとけこむための小細工に、ガディスはいまだに馴染んだ心地がしていない。
もともと光と闇が紙一重に存在するものである以上、黒の色をまとうことはライアにとって容易いことだ。それくらいガディスはとてもよく知っている。

「似合いすぎてんのさ」

コーヒーカップのふちに歯をあてたまま、短くガディスが呟く。

「何が？」

カウンターの表面に片方の掌をつき、奥から新しい灰皿をとりながら衛が問い返した。空気を察したのかそれともただの思いつきからか、来生芳秋は愛娘の様子を見てくると言いのこして店内からひきあげていく。

「何って、てめえの……」

そういえばこんな髪の色でこんな顔をした女がいたなとガディスはふと思い出し、だがそれはわざと頭の隅にとどめるだけで終わらせた。自分がまだニューヨークの真ん中をうろついていた頃に、拾って食わせてくれた女たちの内のひとり……今ではこの世にいない女の話だ。ライアに気取られていい類の感傷ではない。

「……化けるのはかまわねえが光の使いが影の色に染まりすぎんじゃねえってことさ。てめえの場合、シャレにならねえ」

ジーンズのポケットから煙草の箱をひっぱりだしたのと同じタイミングで、ガディスの前に灰皿がおかれる。

「今更？」

隣席よりやや高い位置から彼特有のヴァーミリオンの瞳を静かに見つめたのは、まぎれもな

く昔と変わりのない光使ライアの視線だ。
「馬鹿が」
ガディスは本気で何度目かの舌打ちをすると、残り少ない煙草の一本に店のマッチで火をつけた。
「おい、俺の横にいる間くらい余計な飾りをはずしやがれって言ってんのが聞こえなかったのかよ、てめえの耳には？」
「なるほど……。基本的に俺は、そういう遠回しなリクエストにはおこたえしない主義なんだが」
かすかに観念した笑みを口元に垣間見せながら、衛は赤毛の炎使と肩を並べて狭いカウンター席の椅子に身をおさめると、自分の眼鏡を指先でひきぬいた。
ざわっと彼の周囲を気の波が一瞬だけとりまいたと思うと、黄金の髪に琥珀の瞳をもつ、来生衛のもうひとつの姿があらわれる。
光使ライアの、本来の姿が。
「どこに行ってやがった」
「誰が、いつ？」
「俺がおまえにおまえ以外の奴の行き先を訊いてどうするってんだ、寝惚けてんじゃねーのかライア？　こんな時にライエノーツの首席が大事なエクサールを放り出してお散歩とは、ちょ

っと解せないぜ」

礼神官アスヴァルの出方がまだ見えない、現在に。

しかも、肝心のエクサールが床に伏せったきり回復の気配もない状況だというのに。

「頼むから、良心の呵責に耐えかねて悩んでましたなんぞとだけはぬかすなよ。この俺が笑い死にしちまうからな」

「いくら冷徹な俺でも、ディにここで笑い死なれたら困る。あきらを護るための戦力が足りなくなる」

顔色も変えずに言い返すライアに、ああああそうかいと白けてガディスは煙を吐き出した。

「あきらのことは貢に任せておくのがいちばんいい。適材適所さ。あきらの精神的な問題は、結局はあきらにしか解決できない。彼女のまわりに防御の網は敷いてある。アスヴァルがどう動こうと、もう無様に攫われることだけはしないつもりだ。それでまだ何か、困った問題があるとでも？」

「まあ、俺が来る前よりは、格段におまえらしく可愛げのねえ手の打ち方になってきたとは思うぜ。表向きはな」

ガディスは含みのある答え方をする。ライアは琥珀の双眸でちらりとそれに一瞥を与えたが、口にしたのは別のことだった。

「おまえこそ誰のところに電話をかけにいく必要があったのか訊きたいな、ガディス。わざわ

ざここを出て外の公衆電話まで……大事なエクサールを放り出しても？」
「……尾けやがったな」
「カマをかけただけだ。俺もそれほど暇ではないよ」
本当かどうか知れたものではない。
手の内を明かしきっていないのは、お互い様だ。ガディスは顔をしかめ、つい煙草のはしを犬歯で噛み潰してしまう。
ふたり肩を並べあうこの距離は——貴く美しい央界神殿に、すでに失われた愛する故郷に在るときと——何も変わりはしないのだが。
変形した煙草をガディスは灰皿のなかに葬った。心の中身をさらけだしあえばそれで全部がとりもどせるかといえば、そんな夢のように綺麗なことは決してありえないのだ。
「ライア……」
厳しいまなざしをカウンターの木目に落とし、低く殺した声で問いかける。
「どうして俺のことを待たなかった。今じゃねえ……四年前にだ」
「……」
ごくわずかに、卓上に組み合わされたライアの指先が震えた。
硬い無言を保ったまま。
「風使も水使も騙してまで巻きこむことはなかったのさ。それであいつらが絶望して死ぬなら

死ぬで、連中の自由にしてやるのが情けってものさ。てめえは知らねえんだ、本当に自分のエクサールをなくした守護者がどれほど惨めかってやつを」

……そして主君ディシスに託された使命のために、死ぬに死にきれない四年間を、どれほどの数の悪夢とともに炎使ガディスがすごしてきたのかなど。

その一言をライアに向けて口にしようとは、使鍵ローザを戴く者の誇りにかけてガディスは考えないが。

「俺がおまえらより面倒なところに落ちちまったのは、確かに運がなかった。ライエノーツに招集をかけるおまえの声が俺まで届くには、ずいぶん時間がかかった。それでも……ディシスとおまえが待ってるんだったら、俺は世界の果てからでもかけつけていた。司杖って便利なおまけつきでな。おまえに必要な手駒はそれで充分だったはずだ」

「……ディ、それは結果論だ」

「そのとおり、てめえが甘さを出さなけりゃ最初からそんな万全の結果になってたって話をしてんのさ」

短いライアの反論に、ガディスは容赦のない指摘をたたきつける。

「俺がおまえの居所に気づいたときには、おまえはとっくに『レアを護るライエスどものお兄様』になっていやがった。……どうして、最後まで俺を待とうとはしなかった」

「……」

それが一種の恨み言であることはガディスも自覚している。
現実のなにもかもが机上の理屈どおりにすすみはしないのだから。
だがその言葉がまちがいなくライアの胸の中核を射抜いているのは、彼の沈黙がはっきりと証明する。
「……そうだ、この炯月界においておまえのことを正しく想定できなかった、俺の誤算だ」
静かに、抑えられた調子でライアが口をひらいた。
「すまなかった」
「――――」
険しい表情を消すことなくガディスはひそかに己の両眼を細めた。あらわしきれない苛立ちを含めて。
違う。
それが欲しいのではないのだ自分は――
「ガディス」
背の高い椅子から荒々しいしぐさで立ち上がる炎使の名を、牽制するようにライアが呼ぶ。
ぎらりとガディスの面に殺気が走った。
「別に、そんなに凄んで止めなくたって俺はここから消えやしねえんだよ、ライア。俺はディシスの物だ……てめえがどんなに甘ったれた卑怯者でも最初からこっちには関係ねえ」

そして彼に対するライアの返事もまた、決して穏健な意図を有したものではなかった。

「わかっている。それでいい」

「……」

罵倒も舌打ちすらももはや無意味とばかりに、冷ややかに傍らのテーブルから黒い帽子をとりあげると、ガディスは無言で店を出ていく。

それを見送った光使ライアは、やがてふわりと容姿を来生衛に切り換えた。度の入らない眼鏡で、ふたたび双眸を外界から遮る。炎使ガディスがどう思おうと、今ではこの姿も本当の自分のものにほかならない。黒の色をまとう裏切者の。

「一度離婚した夫婦が再会すると、ちょうどこんな感じかな……ルナク」

光の使鍵にそんなことを語りかけてみる。

四年もの時が経過してしまえば、それぞれを別の方角へひきつける枷が生じていてあたりまえなのだろう。

たとえ心の底に結ばれあう真理が、朽ちはてていなくても。

いずれにせよ、今、明らかにせねばならない問題は、新世界において炎使ガディスをとらえた因縁があきらにとって害であるか否かだ……それだけだ。

ディレイ・ルナクからは、さすがにどんな返答もありはしなかった。永くこの厄介な光使につきあってきている強靱な使鍵にも、どうにも答えようがないらしい。来生衛はわずかに苦笑

する。それは自嘲の笑みに似ていたかもしれないが。
「すまないな、ルナク……ただの、つまらない泣き言だ」

III

……それは彼にとってひどく奇妙な、決して望ましくはない状況だった。
炎使ガディスの炎矢によって灼きついた右の腕を庇いながら、少年は灯の消えた教会の裏、人目に触れぬ小路の片隅に身をひそめている。
十二歳程度まで時を逆行した外見に、琅月界における高位神官としての莫大な知識と才覚を内包する、アンバランスな人格……
葉月奏太――真の名を、礼神官アスヴァル、である。
深夜の眠りに静まったこのおとなしい街は、だが、彼自身のめざした目的地ではなかった。表通りに並ぶ建造物の壁面に記されている言語は、来生あきらと守護師団が帰りつく国のものとは異なる。
それらがいわゆる英語文であることは彼にもわかるが、それだけの材料で炯月界全体でのこの土地の位置を特定するのは難しい。
「挨拶もなしとは、無礼だな」

不意に、アスヴァルは夜闇にむけて口をひらく。
あえて子供らしい態度で己の本質をいつわろうともせず。怜悧な礼神官そのものの言辞によって。
「そこにいるのなら出てきたまえ。私に用があるのでなければ、なぜ私の足を封じるような真似をする？」
そう……転移を封じる力がはたらいていることに、すでにアスヴァルは気づいている。
彼が晶月界から空間を転移してこちらがわへと帰還するところに『介入』し、『着地点』を大幅に変えたなにものかの力と、それは同一のものだ。
いかなる意図によってか、誰かがアスヴァルをこの国の方角へ強制的にひきよせ、そしてここから離脱することを妨げたのだ。
「失礼。ご気分を害されたのでしたら、お詫びいたしますよ」
慇懃な声が、暗がりの奥――アスヴァルの視線の先から、ゆっくりと返された。
靴音がそこから数歩、右腕を上着の布でおさえた少年の影へ近づく。
姿をあらわしたのは、黒髪黒瞳を有するひとりの青年――。
「ハヅキ・ソウタ……もしくは礼神官アスヴァル殿。私の主君にあたる方は、あなたの野望に共感と興味を抱かれ、この地上からのライエノーツの抹消については援助を惜しまぬ心づもりでいらっしゃる」

合衆国北東部（ニュー・イングランド）の凍（い）てつく夜風をコートの襟（えり）に受けながら、エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンは不敵な表情とともにそう申し出た。

「いかがですか。あなたにとって悪い話ではないはずだ。まあ、まずはその深傷（ふかで）を手当てさせねばなりませんが」

「何者だ？　……貴殿の主（あるじ）とは」

硬い警戒心を隠さず、アスヴァルは低く問いかける。エドウィン・アーサーは臆することなく、さらりと、彼に答えを返してみせた。

「この世界の王、と、思っていただきたい」

第二章　謀略者たち

I

クリストファー・ローディン・ジュニアの屋敷でメイドをつとめる十七歳の少女、ルウ・シルヴィアンの一日で最初の仕事といえば、自分の部屋から使用人のためのダイニングにむかうまでの経路を、何か危険なものが――それは盗聴機であったり爆発物であったり化学薬品であったり細菌兵器であったりと、バリエーションに満ちた剣呑さなのだが――しかけられてはいないかと目を配ってまわることだった。

別にそれらが毎朝かならず見つかるというわけでもないのだが、この屋敷で何があってもおかしくないことは、ここで働くすべての者が知っている。それなりにセキュリティのシステムが導入されているとはいえ、システムに携わる人間そのものについて万全の信用がおけるとはかぎらない。自分の生命は自分で守らねばならないのだ。そして、そんな気のぬけない日常に誰もがある程度は順応しているところが、この屋敷の奇妙なところだといえた。

ルウがここへ雇われてきたのは一年半ほど前のことである。

おそろしく賃金が高かったので、失業した父のかわりに一家を食べさせられると思ったのが最大の理由だ。だが、それに加えてルウにはひとつひそかな心算があった。

自分にどれほど強い運がついているのかをたしかめる舞台として、クリストファー・ローディン・ジュニアの屋敷は絶好の場であったのだ。

「あら」

今朝はさっそく、様子が何か違っている。自室を出たとたんにルウはそう気づいた。

クリストファーとだいたい同年代なのだろうか？　見知らぬひとりの少年が、たった今、上質な絨毯をしきつめた階段をこちらにむかって降りてくるところだった。

一見、まだあどけなさが残るような子供らしい姿で——けれど、瞳が暗く感じられるのはそのダークな色彩のせいなのか。

暗色の瞳。

……紫？

まさかと首を横に振るよりも、また魔物が来たのねと簡単に納得するほうを彼女は選んだ。妖しい魔法使いならひとりくらい増えても、ここではたいして変わらない。

「あ……」

少年の後方に、この屋敷第二の実力者の姿を認めて、ルウはしゃきりと背中をのばした。

「おはようございます。ミスタ・クレイトン」

「ああ、ミズ・シルヴィアン、いいところでお会いしました」

大学院の学生といった感じの、まじめで柔らかい物腰が板についている——とはあくまでルウの観察だが——エドウィン・アーサーは、メイドたちに対しても紳士的な態度をくずさない。それがかえって底をうかがわせず不気味だという声も同僚のなかにはあるが、ルウ自身はこの人物の尊大になりきらないところを気に入っていた。

ロマンティストのように思える。

学究の徒はえてして、夢見がちで現実ばなれしているというけれど……。

「はい、わたくしに何か御用でしたでしょうか」

小柄なルウは伸びをするくらい背中をまっすぐにして、丁寧に問いかけた。そうしておかないと、エドウィン・アーサーの視界に入らないのではないかなどと考えてしまうので。

「ミズ・シルヴィアンに、こちらのお客様のお世話を一任してよろしいかと」

エドウィン・アーサーは、手前に立つ少年のことを掌でさし示して、ルウの意向をたしかめるように目をあげた。

何か、難しい性質の客人なのだろうとルウは理解する。ルウ・シルヴィアンの運の強さはエドウィン・アーサーにも知られているからである。厄介な仕事となると、こうしてルウのところにまわされてくるのだ。

「ええ！　もちろんでございます。わたくしでよろしければ。あら……お怪我を？」

否やもなく応じてから、ルウは少年の右腕を覆った白い包帯に目をとめて顔をしかめた。
「それでつい今しがたまで、ドクターにお会いしていたのですよ。ファイアマスターの悪戯がずいぶんと過ぎたようで」
「まあ……！　あのお方には、だから常日頃から消火器をお持ち歩きになられたほうがいいと申しあげましたのに！」
大まじめに憤るルウのことを、そこでふと少年が意表をつかれたように見やった。それまで無表情に沈黙していた少年が急に反応を示したのに、ルウのほうも驚いた。
「……炎使ガディスがここにいたということか」
ゆっくりとエドウィン・アーサーを見返り、少年が低く呟く。
「そういうことです。もっとも、ここでは違う呼び名で通っておりましたが」
エドウィン・アーサーはとりたてて大したことでもないように答えると、階段の先へと彼を視線でうながした。
「あとは彼女に何でもお尋ねください。あなたが充分な休息をとられた後に、クリストファー様をご紹介いたしますよ。
ミズ・シルヴィアン、客室へご案内願います。そうそう……こちらはミスタ・葉月・奏太、東の国からのお客人です。申し訳ない、肝心なことが遅れてしまいました」
「ハヅキ・ソウタさま……」

正確には、いったい何歳ぐらいの人物なのだろう？　印象がうまくつかめず、ルウは少しだけとまどった。

「お世話をいいつかりましたルウ・シルヴィアンでございます。よろしくお願い申しあげます」

挨拶をした彼女のことを一瞥し、葉月奏太なる少年は謎めいた様子で口をとざしただけだった。

大銀行家クリストファー・ローディンの娘ヴィクトリアと、国際的な実業家であるアーノルド・バーンとの間にうまれた一人息子、クリストファー・ローディン・ジュニアが世界征服を思い立ったのは、単なるひまつぶしと言ってしまえば言えないこともない。

そのあまりに強大な異能力ゆえにボストンの別宅にひとり隔離され、学校にも行かず齢の近い友人をつくるわけでもなく、ただ自由放漫な日々をおくる以外になければ、どんな少年であろうといずれ自分の境遇に飽き疲れてしまうだろう。

ときおり父アーノルドから持ちこまれる企業戦争間でのトラブルに便利な力の一端を貸してやる程度の『娯楽』なら彼にもあるのだが、だからこそクリストファー・ローディン・ジュニアの存在をありがたがらない人間も増加することとなり、そちらの陣営から送りこまれる危険なプレゼントのたぐいはクリストファーを数百回殺せるほどの数には達している。そこそこにスリリングな環境ならクリストファーを退屈させずにすむが、それさえも日常になってし

まうとただの迷惑である。

いっそのことアーノルドに敵対する陣営すべてを根絶やしにしてしまえば楽なのだが、一度にそんなことをしても世界経済が転覆するだけだ。エドウィン・アーサーにとって、そのあたりは頭の痛い問題ではあった。クリストファーを真の意味で全地球のトップに据えてしまうまでは、それに関して根本的な解決はつかぬように思われる。

エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンが正式に与えられている役割は、クリストファーの『保護』――という名目の『制御』――、要するにこの少年がむやみに力を暴発させたり地球の各地を混乱におとしいれたりせぬように、彼の状態を穏やかに保っておくことにある。

……究極的な、世界の平和のために。

それ自体、ひどく愚かな試みであるとしかエドウィン・アーサーには感じられない。

地球最大の能力者を、いったい誰が制御できるというものか……。

「小鳥の健康はたいへん良好」

自室にそなえつけたパーソナル・コンピュータのキーボードを操り、報告先とつながる通信ネットに暗号化した電子メールを送りこんでおいてから、エドウィン・アーサーは新しい一日を開始する。

報告の内容はさして重要ではない。少年の力によって世界のどこかに害がなされたか否か――上層部にとってはそれが問題なのだ。

そしていざ現実にクリストファーの力が大々的に行使されたとすれば、報告するまでもなくあきらかな結果が彼らには知れるわけである。

むしろ、私の生存を伝えるための通信と考えたほうが適切か……とエドウィン・アーサーは胸の内で呟き、ひそかに肩をすくめた。上層部もまさか、エドウィン・アーサーをここへ派遣する時点で、このような獅子身中の虫をかかえこむことになるとは予測しなかったろう。〈覗の属〉——と呼びならわされる、かの異能力者集団の中枢部においては。

『エドウィン?』

するりと意識に触れてくる囁き声が、エドウィン・アーサーの気分を素早くひきつけた。

『お目覚めになりましたか、クリス様?』

『うん、あのね、起きたいのはやまやまなんだけどぼくのベッドの真上にひとつセンサーが通ってるの見つけちゃった……ぼくがベッドから動くと反応するらしいんだけど。どうしようかエドウィン? ぼくが勝手にはずしちゃっていいのかな。でも適当にやると爆発するかも』

『なんですって!? とんでもない、今から私が参りますからクリス様はもうしばらくベッドでぼんやりぬくぬくしていてください。よろしいですね!?』

エドウィン・アーサーはパソコンの前の椅子からはねあがり、勢いよく自室を出る。クリストファーの寝室にまで堂々とくだらない仕掛けをのこすとは……屋敷の使用人のなかに、敵方の刺客がまぎれているパターンか。

『まったくゆるしがたい連中です……失礼な輩どもです。どうせ我々にかなうわけがないのですから、少しは懲りろというのですよ』

『あのねえエドウィン、あんまり朝からきりきり怒るとハンサムな顔が台なしだよ』

『大丈夫です。私、これしきのことで減る顔はもちあわせておりませんので。だいたい私の魅力ごとき、クリス様のさわやかな目覚めにくらべればどうということはございません』

『でもぼく、エドウィンが眉間にシワ寄せたっきりかたまっちゃったらいやだよ？　それだけは気をつけてね、やっぱり』

エドウィン・アーサーのほうが、むしろ当人のクリストファーになだめられている。

この十二歳半の少年と二十五歳のお目付役とのやりとりは、なぜかいつも、最後にはそんな逆転したバランスにおちついてしまうことになっているのだった……。

「いやだわルウ、どうしたのよ、その花？」

ほぼ同時刻、ルウ・シルヴィアンが両手にひとつずつ花瓶をかかえて屋敷の通路を歩いているのとすれちがい、まなじりを険しくして呼びとめたのはメイド仲間のジャスティーンだった。

「それって、ついさっきあたしが客室に運んだばっかりのものじゃなくって？」

「あっ、ジャスティーンさん、おはようございます……。ごめんなさい、これ、お客様がお部

屋には花を置かないでくれって」

香りのいい白百合の花のあいだから顔をのぞかせて、ルウは機嫌の悪い先輩におずおずと事情を説明した。ルウより六つ歳上のジャスティーン・コールは何かと彼女のやることに口を出してくることが多いのだが、それはルウがエドウィン・アーサーに贔屓されているという思いこみからくる嫉妬らしい。

別に、勘繰られるほど重用されてなどいないのに……。大人の女性の発想はルウには今ひとつわからない。

「お花がだめなの？　体質かしら」

「さあ……。お嫌いなのかどうかもおっしゃらなかったから。でも」

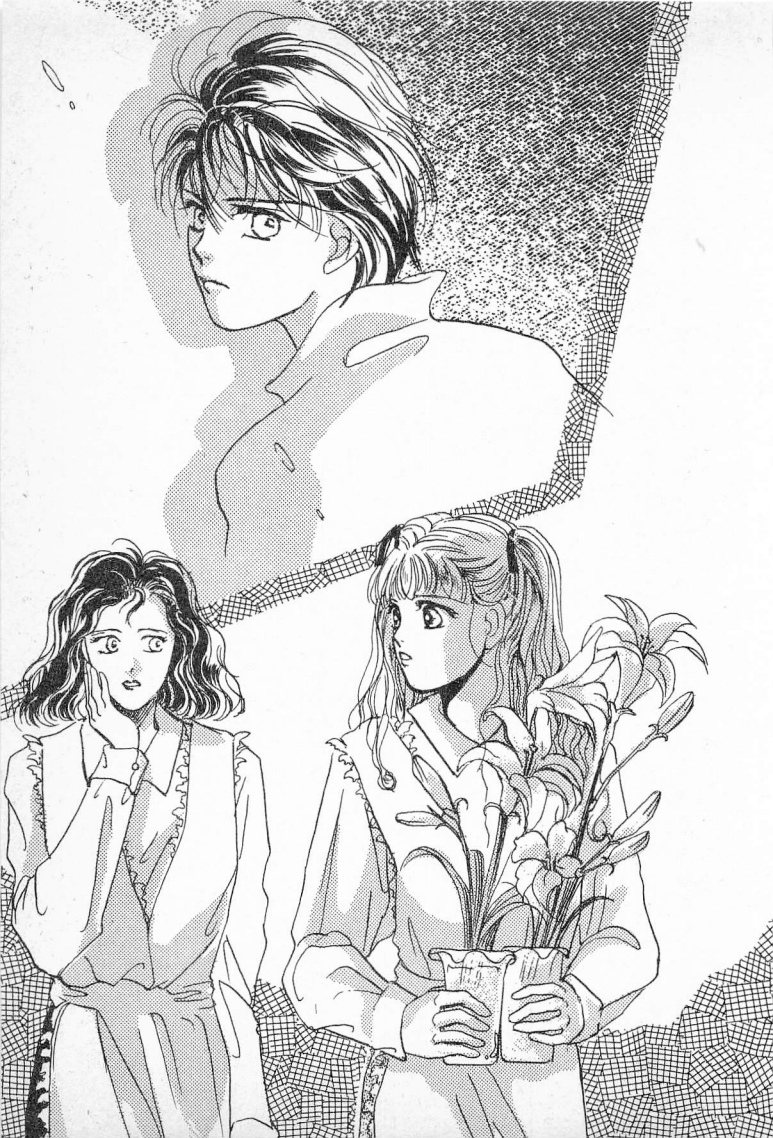
少し首をひねらせてから、ルウはひっそりと気がかりを口にした。

「あのお客様……影が儚いような気がしません？　ジャスティーンさん」

「そんなことあたしたちが考えたって、何の毒にも薬にもなりはしないわよ」

相手にせずジャスティーンはルウから花瓶をとりあげると、さっさと別の場所へ活けにいってしまう。

彼女のほうがそれについては確かに正しい。通路にとりのこされたルウは、そっとため息をついた。ともかく、今回の客人は、何か切実に瞑く哀しいものをここへ運びこんできたように思えてならないのだ。



クリストファー・ローディン・ジュニアは葉月奏太を迎えいれることに、いったいどんな愉(たの)しみを期待しているのだろう……？

「あ、なんだ……」

エドウィン・アーサーがクリストファーの寝室に参上したとき、ちょうど少年は羽根布団のなかで天使のような瞳をみひらいて、そんな風にひとりごちているところだった。

「すーごく簡単なプランがひとつあるんだよね……ライトマスターがあんな動き方したってことはこういうのもありなんだよね。どうしようかな、手間がかからなすぎるかな……」

「何ですって？」

「奏太に訊いてみようかな。ねえエドウィン、ここ任せといていい？　ぼくちょっとあの子と話してくるね」

「いえ――クリス様、それは結構ですがせめてパジャマを」

まともな服装に着替えてからのほうが、というエドウィン・アーサーの声を最後までは聴かずに、クリストファーは一瞬のうちにベッドから姿をかき消していた。

対象を失ってしまった呼びかけを、やむをえず喉(のど)の内にのみこんで、エドウィン・アーサーは複雑な顔つきのまま仕事にとりかかった。室内にしかけられた無駄なセンサーとそれに連動する危険物――どうやら熱線の発生装置のようだが――を、手を触れずに解体して外に放りだ

す作業に、である。

II

称えらるべし――

冴えた闇に、白く澄みきる優麗な花々の嵐。夜香月華の凛々たる群生のなかで、咲き濡れるすべての花弁よりもなおたおやかに佇まう、ひとりの乙女。

清らかな華の姿を、自身の名として授かる……救世の巫女。

「我々の在る界を〈月斎の地〉とあらわすことそのものが、もはや傲岸なのかもしれないと……」

さらりと揺れる衣ずれの音とともに、憂いを含んだ面をうつむかせて、美しい乙女はそんな呟きを静寂にうかべるのだ。

「そのようには思われないのですか。礼神官アスヴァル様」

「だが現実にあらゆる界を制する力は、ここにしかない。それを認めたからとて我々の驕りにはならぬはずだ。むしろ界を御する手綱から手をはなす自由があると見るほうが、さらに不遜ではないのか。君が自らを強く律するのに異を唱えはしないが、琅月界こそが選ばれた地であることに私は疑いを抱きはしない」

理路にのっとり、常のごとく礼神官アスヴァルは冷ややかにそう切って返す。
出会いの頃から、なにごとについても互いの意志がすんなり嚙みあうことはない二人だった。
内省的なエクサール・ディシスの戸惑いを、現実的な論で厳しくはねつけるのが、神殿内における礼神官アスヴァルの役割であると誰もに信じられていた。当の、本人同士にさえも。
だが……
「少なくとも私には、この界より優れて美しい世界など、他のどれほど因果力に満ちた界であろうと考えられない」
つきはなす調子のまま続けられたアスヴァルの言葉に、数秒後、ディシスは大きく目をみはることになったのだ。
「私が愛するのは琅月界だけだ。……ディシス、君の美しさがこの界に在るかぎり」
「……」
何も趣向を凝らしもせず、意気込みもせず、ただ事実として述べられた一言に……
彼女はひどく取り乱したようすで白い頬をおさえ、いつもの彼女らしくもなく揺れる感情をあらわにして訴えた。
「わたし……わたし、あなたにはずっと、厭われていたのだとばかり……」
「厭うていた？　私が君を？　何故？　私は君がエクサールとして正しい道を辿るにあたり礼

神官ならではの役目をまっとうしているだけだ、誰も君を苛めてなどいない。私の心はいつもひとつの真実にとどまっている。私は君を愛している、ディシス」

そんな言葉さえも整然とした調子で告げてしまう平静さが、アスヴァル自身にも曲げられない彼の性なのかもしれなかった。

もっとも……その愛が見返りを望める種類のものでないと、初めから承知していたがゆえ、でもあったはずだ。

「心乱させてしまったのなら、謝る。君を惑わせるために言ったつもりはない。琅月界に価値を置く私の個人的な拠りどころが、どこにあるかと君が問うならば——そういうことだ」

本来、一神官がエクサールの乙女を愛し求めることなどあってはならないのだから。

それは深い禁忌。

たとえ時が狂おうと天地が失われようと、決してゆるされるはずもなく……。

「君にとっては不快な話をしてしまったらしい。忘れてくれてかまわない。私がこの胸の禁忌を、生命あるかぎり黙して抱いてゆけばすむことだ。私はそれでいい」

茫然と立ち尽くすエクサール・ディシスの姿を、透徹したまなざしで眺めやり、アスヴァルはそれだけを言いおいて彼女に背中を向ける。応答など期待するべくもないと、彼は己の立場を正しく理解していたのである。

「!!」

その一瞬に、思いもよらぬどこかで何かが破裂したようだった。

ふりむいたアスヴァルは、夜影に映える真っ白な花の広がりのなかに、ディシスが勢いよく沈みこむのを見た。白銀の装衣の上に彼女がまとわせた、浄めの青紫色に染めぬかれた蒼斎衣を——巫女の象徴を——力任せにディシスがみずから剝ぎとり、花々の海の下へ両腕でおさえこむのを。

足元に埋めた膝が土に穢れるのもいとわず。

「どうして……！」

信じがたい激しさをもって、地上に座りこんだ姿のまま、薄布に包まれただけの肩を震わせて彼女はアスヴァルに問いを投げかけた。

「あなたひとりのことで片付けてしまうのですか……狡いではありませんか！　どうして私の心の内を聴いてくださらないのですか、アスヴァル」

そこにいったい何が起きたのか、初めアスヴァルには推測することさえできなかった。

そして彼女の訴えの真意にやっとたどりついた時、礼神官アスヴァルに可能であったのは、ただ言葉を失うこと以外にありはしなかったのだ……。

『アスヴァル!?』

目覚めると同時に——いや、半覚醒であったのだろうか？　——そんな悲鳴を発したメサイ

エ・エクサール・レア。来生あきらという第二の名をもつあの少女が、なぜアスヴァルの危機に、敵対者の立場に不似合いな反応を示さねばならなかったのか。

——そうだ、それはありえない。

とりもどさねばならぬのは……高邁なる故郷と、そして彼の聖地に封じられたマイラ・エクサール・ディシス。

何が野心であり何が現であったものか……

「違う、君がディシスのはずがない……」

何を憎しみ、何を貶めて……

エクサール・レア。その存在をどれほど厭わしく、どれほど非道に求めたものか。

すべてはエクサール・ディシスのため。

「ありえない、私がディシスを害することなど」

——ありえないのだ。

妄信だけが己を救うすべてであることを礼神官アスヴァルは既に知っていた。四年の間、朽ちてゆく我が身をひきずり、狂気を得ずしてどう生きつづけてゆけたというのだ。

「これ以上、私を狂わせるのか……光使ライア」

裏切者。同質の闇を負うもののくせに。

誰よりも深くディシスを裏切ったのはあのライエノーツの首席ということになる。もしも、

本当に彼女がディシス本人だというのなら……。

「ありえない。それはありえない。私は君のところへ還る。還るんだ、ディシス」

「ふうん。なんだ……やっぱり、頭の中ぐるぐる廻っちゃってる感じなんだ。可哀想、だね」

はっと葉月奏太が現実における意識へたちかえったとき、その眼前には白金の髪をゆらしたひとりの少年が、小さく首をかしげながらそう呟いていた。

着ているものはシルクのパジャマだけという、今の状況をさらに奇妙に思わせる恰好で。

彼と向かい合う椅子の背もたれの上に、重力を感じさせない風情で器用に座り。

「奏太っていちいち真面目だから苦労するんじゃない？　昔からそういう性格だったのかな。神官なんかやってたらもっとストレスたまりそうだよね。集団とか組織とかでは貧乏クジひくタイプみたいだし」

「――誰だ？」

警戒を怠った自らに憤りつつ、葉月奏太は厳しい問いを放つ。与えられた部屋の安楽椅子にかけたまま、短い眠りに陥ってしまっていたようだった。

「あ、お医者さんの薬が効いてるから眠くなっちゃうのは仕方ないよ。けっこう凄い怪我してるんだし。だめだなあ……ウォークマンを敵にまわしたりするからだよ。ぼくも少しずつなら治してあげられるけど、時間かかるよ、きっと」

少年は奏太の疑念とは別の話題について、真顔でそんな説明をする。だが……このパジャマ姿の少年の本質に、礼神官アスヴァルには強く感じられる違和感があった。

……まさか、こんな子供が？

「クリストファー・ローディン・ジュニアとは……貴君か」

「でもぼく奏太とは違って、生まれてからは本当に十二年と半分だよ？」

アスヴァルの内心を読んだとしか思えぬタイミングで、クリストファーはそう念をおしてみせる。人差し指を一本たてて、ひどくかわいらしいしぐさで。

ますます強まる違和感に、奏太は一瞬不快げに眉をしかめる。しかしいずれ、それは苦みを含んだ微笑に変わった。

この少年からうける悪寒に似た印象の正体が、決して忌まわしさではないことに気づいたのだ。

もっと根源的な……

野生の動物が、燃えさかる火焔に遭遇したときにおぼえる、原始からの恐怖感のような。

これは畏れか。

威圧されたというのか。狂鬼と化したはずの己が？

「なるほど……君を王と呼ぶのは、もっともな話だ」

複雑な笑みを浮かべることしか奏太にはできない。たとえ一時であろうと、精神的敗北を認

めざるをえないとは……。

「うん、エドウィンはぼくにそういう風になってほしいみたいだね。仕方ないよね。他にぼくみたいな人っていないし」

クリストファーは簡単に頷く。

それを誇りとも重圧とも、さして疑問を抱くべきことであるとも感じていないのは明らかだ。礼神官アスヴァルはあらためて問いかける。

「その君が、私に『共感と興味』を抱いているというのは、君が王であるためか？　それとも王となるためか？」

「どっちかといえば後者かな？　でも本当言うとぼくが世界征服するのに奏太が必要だなんてぜんぜん思わないよ。そういう意味では、前者のほうかも。エクサールとかライエノーツの人達って、こっちの世界にとってはすごく邪魔だから、黙って放っとくのはやだよね。で、ぼくはライエノーツの首席のお兄さんよりは奏太のほうが好きだし、少しは手伝ってあげようかって」

「すなわち我々の問題を、君の管理下におきたいと？」

冷ややかな色を強め、アスヴァルはさらに切りこんだ。

「逆じゃない？　こっちの世界にそっちの問題がもちこまれちゃってるんだもの。他人の家の庭で身内同士のケンカしてたら無神経って言うよね、普通」

どこにも遠慮のない答え方をして、クリストファーはふわりと宙を眺めた。
「まあ、ぼくはおもしろくなればいいかなと思うんだけど。世界の掌握のほうはゆっくりでいいんだ。早く終わっちゃったらつまらないから。だいたいそういうイベントって、どうやって実行するか計画してる間が楽しいじゃない。だから少しくらい奏太につきあって寄り道するのはぼくも愉しいよね」
「……愉しみがすべてか」
アスヴァルは皮肉に呟く。怒りを感じはしなかった。
理解するには、あまりにも精神のありかたが違いすぎる。
相手の言い分すべてを信じようとする意志なども、さらさらない。どこで手の裏を返されるか知れたものではない……。
「それでね」
ひどくいたずらっぽい笑顔で、アスヴァルのほうへ身をのりだし、クリストファーが囁いた。
「奏太は今の身体じゃあんまりムリがききそうにないし、ぼくはウォークマンとケンカしたくないしおとなしくしてたいんだけど、実はひとつ、すごく手間が少なくて効果的なアイデアがあるんだよね。それだとぼくたちは見てるだけですむから楽なんだけど。責任とらないでいいし。どんな話か聞きたい？」

「……」

まさか、とかすかに唇を動かしてからアスヴァルは短く沈黙した。

クリストファーが語るような『自らの手を汚さない』計画としては、アスヴァルの内にも用意されている材料がある。だが、それは実現にいたるまでに多くの障害があることもわかっているはずの……

まさかその手段を実行に移し得ると？

「私も愚昧ではないと自負しているつもりだ。君に確かな策と、そのための力があるというのなら……」

友好的な態度からは遠ざかったまま、だが正面からクリストファーのことを見つめかえし、アスヴァルは無表情に彼をうながした。

「聞かせていただこう」

III

……もう、三日めの晩になる。

「ガディス!!　台所で煙草を喫るのだけはやめろって何回言わせりゃ気がすむんだよ、いったい!?」

がつんと土鍋の底をコンロの金具にぶちあててしまいながら、来生貢は背後の食卓にいすわる炎使を大声でどなりつけている。
「おい……割れるぜ、鍋の底が」
「うるさいな、ぼくだってそれくらい今のはちょっとまずかったなと思ってるよ!!」
いらいらと貢はしゃもじをとりあげて、土鍋のなかの特製おじやを乱暴にかきまわした。
「そんなに煙を吐きだしたければ外に出て存分にやってくれっていうんだ、こっちの料理の味が落ちるじゃないかっ!!　それであきらの気分が悪くなったらどうしてくれるんだ、デリケートなんだからあの子はっ!!」
「んなデリケートな子に、ヒステリーおこした野郎の料理なんざ食わせても不味いだけじゃねーのか」
ちらりと厭味に笑いつつ、ガディスは吸いかけの煙草を灰皿に放りだす。狙いすましたように一筋の水流がそこへとびこんできた。しゅんと音を立てて煙草の火は消えうせる。
「ちっ……」
ガディスが舌打ちする。
「てめえなァ……少しは使鍵の尊厳ってやつを考えなおしてやったほうがいいぜ」
「おまえみたいな放火の名人にミンスの心配なんかしてもらっても嬉しくないよ！　いいんだよ、わかってるよ、どーせぼくが勝手にヒステリーおこしてるだけだってことはね！」

たしかに、荒れた精神状態でつくったものをあきらに食べさせるのはとても不本意である。小皿にとった一口分で味付けをたしかめて、貢は厳しく眉をひそめた。……おそろしく平均点を下回っている。

「やめた。頭冷やさないとろくな味にならない」

ガスを止めて鍋の蓋をまた力ずくでたたきおろし、エプロンをかなぐりはずして貢は食卓の自分の席に座りこんだ。沈みこんだ、というほうが正しいかもしれない。ひろげた夕刊ごしに、ガディスが無言でそちらを見遣った。

「……滑稽だろ。こんな情緒不安定で守護師団の一員だってんだから自分でもおかしいよ」

「何か勘違いしちゃいねーか？　百五十九代目の守護師団に情緒が安定してる奴がいたなんてな、俺は初耳だ」

唇をかみしめる貢に、新聞紙の反対側からガディスはそっけない口ぶりでそう答える。

「まさかそれがぼくらの選考基準だったとでも言うつもりじゃないだろうね」

「さあな……なんたって異例づくしの百五十九代目だからな、精老がヤケになってもおかしくはないぜ」

「冗談にしちゃ不謹慎だ」

「とりあえず、てめえはよく踏ん張ってるほうさ」

ガディスが言う。無愛想な顔つきのままキャメルのパッケージから新しい煙草をひっぱりだ

したが、今度は火をつけずにくわえただけだった。最後の一本だったので、うっかり水浸しにされるわけにはいかなかったのである。

「褒められてるのかどうか知らないけど、ありがとうと言っとくよ」

一度折れた脚をつないだせいでバランスの悪いテーブルに、憂鬱げに頬杖をつきつつ、ぼそりと貢が呟いた。

「ああ、あと、ぼくはみんなのために晩御飯つくる気力ないけど、そこの土鍋のおじやなら食べていいよ。ちょっとひどい味でよければ」

「てめえもいいかげん病人食ばっかし作り続けんのはやめろ。健康な俺まで辛気臭くなる」

「ガディスが辛気臭くなってるのは別の理由でじゃないのか？　ぼくのせいにされたって困る」

お互いの気がかりが決して方向違いのものでないことは、貢にもわかっているのだ。そのすべてが一致するわけでないのは当然としても。

問題は……二階の、眠り姫にある。

貢の言葉にとりあえず何か反論しようとしていたガディスが、ふと背中をそりかえらせて部屋の外のようすに耳をすませた。

「……野郎、またうろうろしてやがる」

苛立たしいガディスの呟きが誰に向けられているのかは、訊かなくても明白である。あえて

口をとざす貢の眼前で、炎使の首にかかる銀の鎖が微妙に輝いたようだった。
間をおくことなく、ダイニングキッチンの扉が外からふわりと開く。
「ガディス、横着してディレイ・ローザで人を呼ぶのは控えてくれ。狭い家のなかで騒がれるとルナクが驚く」
顔を見せたとたんに衛はそう苦言を呈するが、もとよりガディスは聞く耳をもたない。
「つまり何か？　俺が大声はりあげて眠り姫を叩き起こしてもてめえにはありがたいってやつかい」
「残念ながら姫君の目をさますのは昔から騎士の愛と決まってるのさ。おまえの物騒な怒鳴り声じゃ効きめはなさそうだ」
「ぼくも愛だけならお釣りがくるぐらい満ちたりてるよ、一応ね」
ガディスと衛のやりとりに、醒めた調子で貢が横から口をはさんだ。
「でも今のあきらに必要なのはそんなものじゃないみたいだ。いったいどうすればいいと考えてるんだよ、お兄様？」
「あきらに必要なのはあきら自身の意志だ。俺たちがお膳立てするべきものじゃない。我々がなすべきことはひとつ、彼女を護ることだけだ」
貢を見返って、衛はこのうえもない正論を語ってみせる。
このうえもなく正論で——建前だ。

「ぼくが言いたいのはっ……！　物理的にあきらを護ってさえいればそれで本当にライエノーツの仕事になってるのかってことだよ！　ライアのやりかたは、守護者としては立派かもしれないけどあきらの心の内側のことを考えていない！　おまえのせいであの子がどんなに深く傷ついたかなんて……もうどうでもいいってわけか!?　ぼくにはライアが自分の責任から逃れているようにしか見えない……！　現に、あれから一度もあきらに顔をあわせようともしてないじゃないかっ！」

「なら俺があきらの前にひざまずいて許しを乞えばそれで済むのか？　そんなことで気が晴れるのは俺たちだけだ」

冷ややかに、眼鏡の内側から衛の視線が貢を一断する。

「あきらの心を手っ取り早く救う方法なら俺にもわかるさ。イオをつれもどしてやることだ。単純な話だ」

「……！」

握りかためた貢の拳が激しく震えた。

「……それが……!!　それができないことくらいっ……!!」

「だから後はあきらが自分で整理をつけるしかない。他に俺から言うことはない」

一方的に結論を言い渡して、衛はその話をそれで終わらせた。

血の気のひいた拳をテーブルの表面に押しあてたきり、貢は反駁する声さえなくして肩をこ

わばらせている。

身体を占めるのは、怒り、ではない。もっと手前の……情けなさに近いものだ。言葉の意味が通じあわない無力感のようなものだ。

がさりと新聞を手元に放りだして、ゆっくりとガディスが椅子から腰をあげた。

衛の瞳のうちをのぞきこむように顔を近づけ、ヴァーミリオンのまなざしに翳りの色を混ぜながら、一言、告げる。

「よくねえぜ、ライア」

光使ライアからの返答はなかった。ガディスはそれを長くは待たず、さっさとテーブルをまわりこんで貢の背中に手をかけ、強引に立ち上がらせた。

「てめえもいつまでも台所でくすぶってる場合じゃないぜ、今夜の防衛線の担当はおまえだろーがよ。少しはミンスにまともな仕事をさせてやれってのさ」

「……わかってる」

無表情に呟き、衛と目をあわせぬようにして、足早に貢は外に出てゆく。

アスヴァルの出方が見えてこない以上、敵を察知し排除するための網は、なるべく広範囲に張っておいたほうがいい。その仕事を受け持つことそのものについては水使ユーマに異存はない。

右手の指で火のついていない煙草をくるりと回転させてから、ガディスも貢につづいてダイ

ニングキッチンの外に足を向けた。
「どこに行く？」
「こいつが最後の一本だ、ちと補充に出てくる」
すれちがう間際にライアが問いかける。顔を伏せて問題の煙草に火をつけてから、斜に構えた目つきでガディスは彼を眺めやった。
「おい、どうした？　俺がいなけりゃ心細いとでもぬかす気か」
「あきらが心配だ。いつでも戻ってこられる場所にいてくれ」
ごく端然とした指示だけが返った。
ではライエノーツをまとめる張本人がひとりでうろつき歩いているのはどういうことか。それでも心配はないというつもりか。よほど本気で追及してやろうかとガディスは考えたが、それを始めたらとても煙草一本ではもちそうになかった。

「怖かったら手伝ってやってもいいんだぜ」
からかい半分にガディスが言う。
「ぼくだって、そこまでひどいことになっちゃいないよ」
夜道に歩みだしながら、憮然として貢が言い返した。ライアに対する憤りと、水使ユーマとしての役目は別だ。

「本当は、ライアを責められた話でもないことくらい知ってるさ。ただ……残酷なのは確かだ。いろんなことが」

人目がないのをたしかめてから喫茶店『海』の前の街路樹に近づく。並木のなかの一か所――大きなけやきの木がそびえたつ、その根元の土壌に指を触れさせ、優しげな面持ちの水使は鋭い声音で命を発した。

「ディレイ・ミンス！」

数瞬の時差をおいて、ゆるゆると指先の土のうえにかすかな水たまりが浮きだしてくる。地中を通っていた水流が、ミンスの誘導にこたえて土の表面に顔をのぞかせたのだ。

「ミンスよ、界を超え〈水使〉ユーマが命ずる。空の浄化、点の刻印、多角の陣、煙霧をもって索防の網となす！　われらが主上メサイエ・エクサール・レアの名を誓約の……」

畜生しまった、と貢は前髪を片手でおさえ、自分の前言をあらためる。乱暴に。

「名前なんてどうだっていいんだ、ミンス、あきらのためだ！　わかったらちゃんと仕事してくれよ、頼むからっ！」

操る者の声をしっかり反映したような荒っぽい勢いで、水流はひらりと宙にまいあがったと思うと再び地中へ姿を消した。

街全体をディレイ・ミンスの監視下におさめるには、その範囲をかこむいくつかの『点』に今と同じ要領で『楔』を打っておく必要がある。のんびりしてはいられない。

「何にしても、これくらいの役目があったほうが気分は救われるみたいだね」
それが守護者（ライエス）の性分というものなのか……。複雑に、貢は肩をすくめた。
「まあ、実際てめえはよくやってるほうさ」
先刻と似たような内容の科白（せりふ）を、やはり無愛想なまま、煙と一緒にガディスは吐き出す。
「現金だな。ぼくが協力してると思って」
「別にてめえがディシスに肩入れしてるなんて思っちゃいないぜ。ディシスのことは俺が考えてりゃいいのさ」
「独占主義ってやつかい？」
「主義じゃねえな。事実だ」
面白くもなさそうにきりかえすと、ガディスはくわえ煙草（たばこ）でその場に背を向けた。貢は硬い表情で彼の後ろ姿を見やり、そしてガディスと逆の方角へ身軽に走りだそうとしたが——直後、ふと思いつめたように踵（きびす）を返した。
「ガディス！」
「あ？」
仏頂面（ぶっちょうづら）がふりかえる。
「……ひとつだけ訊（き）かせてくれ。おまえにはわかるのか、今のライアが？」
「……」

一対をなすパートナーだからといって……。

口をつぐんだまま、ガディスは真剣な水使ユーマの問いを受けとめた。

……四年も経ってしまっているのだ。

「四年間も奴につきあってやってたのはてめえらのほうだろう。俺に訊くのは筋違いじゃねーのか」

「だけど今ここにおまえが残ってるってことは……」

「俺にわかるのは俺がディスを護らなきゃならねえってことだけだ。誰と一緒にいようが、そんなもんなりゆきだ」

最後までユーマの言葉を聞かず、ぶっきらぼうな答えを返して、ガディスは今度こそ喫茶店『海』の前から離れた。

嘘をついたつもりはどこにもない。炎使ガディスにとって、なりゆきという一語はつねに重要な意味を含んでいるのだった。

急に静かになった家のなかで、来生衛は周囲の気配にしばし鋭敏な感覚をさしむけた。

家長である来生芳秋氏は店のほうで設備の修復に忙しい。そろそろ彼にはコーヒー探訪と慰安を兼ねた国内旅行あたりをおすすめしたほうがいいかもしれない。礼神官アスヴァルがここへ狙いをさだめてくるのは、間違いのないことなのだから……。

「あるいは俺たちが、この地を離れるか……」

それはなるべく避けたい展開だ。あきらの心の平穏のためには。

彼女にとっての故郷は、紛れもなくここなのだ。

ゆっくりと足を運び、衛は階段を上る。貢は有無を言わせず自分の部屋にあきらを押しこんでおいて、彼自身は台所で寝ているのだから困ったものだ。それをいうならガディスのほうも、家のなかのどこであろうと眠れると豪語して、現実にそうしているのだが。

「あきら？」

扉をノックしかけた腕を途中でとどめ、抑えた声で呼びかける。

応答はない。予測したとおりだ。衛は音をたてずに扉のノブを動かした。ひらかれた隙間のむこうで、姫君はベッドカバーの下に頭までもぐりこんで、深い眠りの底に沈んでいるようだった。

彼女がベッドから出てこられないのは、その外側にある現実に、彼女の本質の部分がなじもうとしないからだ。納得のできない事実を、身体の芯にむりやり叩きこまねばならないからだ。原因の一端は、光使ライアが担っている。たしかに、逃れるべくもなく。

心のうけた影響がそのまま、こうして表に出てしまう。あきらはいつもそうだ……昔から。

「でもこれだけではまだ終わりそうにないんだ、あきら」

枕元に佇み、衛はかすかに呟く。

ふりかかるあらゆる運命のなかで、彼女にとっては何が最も酷なことなのか……

そのすべてから、彼女をまもりぬけていたなら。

滅びの重さと自らの無力とが、求める幸福を彼女から遠ざける。せめてアスヴァルが生かされてさえいなければ……！

にょきっとベッドカバーの内側から腕が一本のびて衛の上着のはしをつかまえたのが、そのときだった。

「つかまえた」

舌がまわりきらない口調で、布団の奥から乱れた髪の毛ごと頭をもちあげて、あきらがそう宣言した。

IV

「えーちゃんなかなかつかまらないから寝すぎないように気をつけてたんだけど、一応」

顔にかぶさってくる髪を片手で梳きあげながら、ぼそぼそとあきらが呟く。衛の上着をつかんだ腕はそのままで。

しっかり捕獲された自分の服を眺め、衛は苦笑するように表情をやわらげた。

「ああ……悪かった。ずっと忙しくしていたから、ここまで来られなくて」

「嘘。えーちゃん来てたよね。自分の近くに誰がいるかくらいあきらにだってわかる。よりによってこっちが起きられないときばっかり狙ってたんだよね。別にえーちゃんの顔見たってケンカ売ろうとなんか思わないのに」

「どうかな」

身体の前で両腕を組みあわせ、穏やかにあきらを見下ろす姿勢で衛が言う。

「あきらの夢かもしれない」

「まだそんなこと言うんだ？」

「少なくとも俺は、愛しい妹が熟睡しているありさまを心楽しく密かに観賞していたのが気取られていたとしたら、ショックでしばらくたちなおれないな」

「えーちゃんそれ語るに落ちてるとゆーんじゃ……」

「あきらと話す機会をつくらなかったのは、本当だ。すまなかった」

軽口から一転して、まじめに詫びる言葉が衛からは告げられる。あきらは唇をとざし、ただまっすぐに彼のことを見つめただけだった。

――罪人を殺す、ふたつの瞳。

以前にそう表現したのは衛自身だ。

責め咎めるのではなく。弾劾するのではなく。射抜き、つらぬく……それだけの。

「アスヴァルは？」

「わからない。今はまだ」
「みんなどうしてるの」
「アスヴァルの居場所も出方もわからない以上、こちらは待ちに徹するしかない。護りの網を敷いているよ。今も貢がそのために走りまわってる」
「あきらはどうしたらいい？」
その三つめのあきらの質問に、少しの間をおいて、衛が静かに答えた。
「早く元気になるんだ」
「……。あきらもそうしたい気持ち充分あるんだけど、なんか身体中おかしくなっちゃってる。今だって変なレンズかけてるみたいに物が遠いし。どうしてなのかな、いやだな……」
「焦ってくれなんて言ってないよ、あきら。調子の悪さを気に病んでも堂々巡りになるだけだ」
さらりとあきらの耳元の髪に広い掌が触れて、離れる。ほんの一瞬のことだった。
「あきらを苦しめるものは全部、俺がとりのぞいてやりたい」
独白のように衛は呟き、そして目を逸らす。
あきらの歪みがちな視界のなかでは、彼の表情すべてを克明に切りとることはできなかったが。
フォーカスの狂ったカメラを通してものを見ているみたいで……。

それでも。

「……その最大の災いは俺かもしれないな」

一歩、ベッドの傍らから後方へと退き、それきり背を向ける衛のことが——あきらには正しく察知できた。見るよりも強烈に。心の奥に迫るように。

罪人？　誰が？

「えーちゃ……」

「心配しないで、あきらはおやすみ。奴が何を仕掛けてきても、今は俺たちにもガースがある」

「——」

そうじゃない。そんな心配じゃない。

そうではなくて……！

「！」

ふりかえった衛が両眼を瞠った。制止されるより早くベッドをぬけだしたあきらは裸足で彼に追いつき、次の呼吸で、思いきり右の腕をふりあげていた。鋭い平手打ちの音が衛の頬で鳴った。

避けるそぶりも見せず、衛は黙してそれを受けとめただけだった。

「あきらのこと見損なうにも程があるよ、守護者ライア!!　自分の名前に恥ずかしいようなこ

とを言ってる!! 誰が最大の災いかなんてあきらが決めることだ、あなたが本当にやらなきゃならないものとは違うっ!!」

「……」

一気に怒鳴りつけたあきらの姿を見つめかえし、唇をとざしたまま衛は自分の眼鏡を指でひきぬいた。ここではそれが邪魔なものであるように。

「……そうだ、あきら、俺は自分の進むべき本道をもう外れている」

「どうして?」

「あきらには話せない」

「……狡い……!!」

愕然と立ち尽くして、あきらは声を震わせた。

「そんなのひどすぎる!! アスヴァルと戦ってるのはあなたひとりじゃないのに!! そうやって大事なことは全部自分だけで……!!」

「あきらには必要のないものだ。知ることだけが解決にはならない。人の穢れも澱もすべて呑みこめばいいと思うのは早計だ。俺はあきらをそんなものに近づけるわけにいかない」

「勝手にっ……」

「君がエクサールだからだ」

厳しい科白を衛はあきらの反応にかまわず言いきり、もう一度くりかえした。

「あきらがエクサールだからだ。俺たちの」
聖なる巫女。救世の、けがれなき乙女。
ゆるせはしない。その存在が闇に近づくことなど決して……
「いやだ!!　あきらはそんなのは絶対にいやだっ!!　きれいなことしか聞かせてもらえないで祭りあげられているのなんて、あきらじゃなくたって誰だってできるっ!!」
握りしめた両の拳を、あきらは衛の胸元にたたきつけた。何回も。
「どんなに俺を責めても無駄だよ。言えばあきらが苦しむとわかっていることを、俺が口にするわけにはいかない」
ぶつかってくるあきらの腕を、両方の手首をつかまえてやわらかく制止し、譲らない態度で衛がそう答えた。あきらは喉元に声をつまらせてしまった。
「じゃあ……それなら、あきら何を聞いても苦しまないようにするから」
「……馬鹿だね」
かすかに衛が笑った。
「そんな想いも、あきらにはしてほしくない」
「だったらどうすればいいの!?　あきら本当は今でも充分苦しいよ、えーちゃんにつらい顔させてるからっ!!　どうにもしてくんないの!?　えーちゃんのせいだよっ!!」
「……」

今度のあきらの訴えには、あきらの腕を支えたまま、衛のほうが返す言葉につまる番だった。

「あきら、俺のことは……」

「せんちゃんいなくなって悲しいのもあきらだけじゃないよ。えーちゃんだって傷ついてるの同じだよ。そんなのよくわかってるよ！　それでも、風使イオを裏切ることになってまで、そこまでしてライアがあきらの正体レアじゃないって言わなきゃならなかった理由があるはずだよ、ライアはそれを自分だけで隠してるっ！」

「あきら……！　俺はあきらが思うほど優しくない、打算ひとつであれくらい簡単にできる人間だ。あきらの考えは理想的すぎる」

「違う!!　違う、違うっ!!　あきらの考え方はえーちゃんに教えてもらったものばっかりだよ!!」

断ちきるようにあきらが叫ぶ。

エクサール・ディシスがどんな人間かなんて知らない。

ここに在る来生あきらは別のところでつくられたものだ。

来生家の生活の、四年間のなかで。

「えーちゃんがそれを違うって言ったら、あきらはもう何を信じていいかわからない……」

急に膝がぐらついた。バランスを失くして座りこみそうになったあきらの身体を、衛の腕が



素早く抱きとめた。

「いくら言っても無茶をするんだな、この子は……」

かすれかけた衛の呟きが耳元で聞こえた。ふわりと感覚が宙に浮きあがる。彼の両腕に抱えあげられて、気がつくとあきらは再びベッドの上につれもどされていた。

自分の背中がシーツに沈みこむ感触にはっとして視線を仰向かせると、衛の姿はすぐ間近にあった。反射的にその影のどこかをつかまえようとしてあきらは身を起こしたが、衛の手に肩をとどめられるほうが早かった。

「悪かった、あきら……俺の言葉が過ぎた」

「……謝ってほしいんじゃない」

「わかってる。こんなものは俺のための気休めだ」

「だから……！」

「今のうちに、あきらにひとつだけ訊きたいことがある。嘘をつかなくていい。正直に言ってくれ」

あきらの訴えを中途でさえぎるかたちで、衛が不意にそんな風にきりだした。あきらはさらに言葉をつづけかけて、結局、彼のまなざしにおされるように口をつぐむしかなかった。

「何？」

尋ねかえすあきらの頬に、衛はそっと右の掌をさしのべる。

ひそやかに、壊れやすい硝子細工に指を添えるように。
そして——問いかける。
「礼神官アスヴァルを、あきらは今でも愛しているのか……。そのことを」
「……」
大きく、あきらは自分の瞳をみひらいた。それしかできなかった。耳を疑う気分だった。
「……どうして？」
身体の震えが衛の指へ伝わってしまう。いやだ。いやだ。そんな質問は聞きたくない。
こんな動揺も衝撃も要らない。
「あの人は……間違ったことをやろうとしてるから……あきらはそれを止めなくちゃ……」
琅月界の復活、なんて。
すでに滅んでしまっている世界の。
エクサールの力をもってしても、容易く叶えられることなどありえない。滅びが連動してゆくだけだ。この炯月界を犠牲にして。
……見果てることのない野望。救われるはずのない魂。
「えーちゃんは勘違いしてる……あきらはあきらなんだから、アスヴァルもあきらにとっては知らない人だよ。愛してるとか、そんなのはわからない。あきらにわかることじゃない」
わからないから怖いのだ。本当は。

自分の奥底に封じられた何かが。
いつ爆発して噴き出るかも知れない、来生あきらとは違う感情が。
「……わかった。無理に答えさせて悪かった」
深く問いつめようとはせずに、衛はあきらから身を遠ざけて、そう呟いた。
「もう少し休んだほうがいい。……また、来るから」
「まだえーちゃんに何も聞いてない……」
抗議しながらも、病的に強い眠りの引力のなかへ急激にひきこまれていくのを、あきら自身、どうすることもできなかった。意識全部が真っ暗なところへおちこんでいってしまう……
あなたの望みはどこにあるの、ライア?
いったい何のために……

何のために?
彼女がその身を眠りにゆだねるのを見届けてから、光使ライアはひとり自問する。
回答は、すでに動かしがたく定まっている。
どれほどの茨の道でも。
「昔から言っていることだよ、あきら」
くりかえし告げてきたはずだ……真実なら。

懺悔はするまい。琥珀の瞳に鋭利な意志を映して、彼は扉にむかい次の一歩を踏み出した。
「俺は欲張りなうえに、エゴイストだからね」

第三章　硝子箱

I

かすかな夜霧が、ゆっくりと街を覆いはじめた。

水使ユーマの用意した防御の網だ。がちゃがちゃと煙草の自動販売機にコインを放りこみつつ、炎使ガディスは白濁する大気の流れを横目で眺めやった。水使がまじめに働いてくださるのは結構なことだが、あまり湿っぽくなると今度はディレイ・ローザのほうのご機嫌がよろしくなくなる。

「ちっ……」

上着についた金具を鳴らしてポケットの小銭をさぐり、ガディスはいまいましく舌打ちをした。出てくるのは10Gやら25Gばかりで、肝心の十円玉が足りないときた。ユーマから財布ごとふんだくってくるべきだったらしい。

ともかく手持ちの煙草は完璧に底をついている。気はすすまないが、自販機を無理やりこじあけてゲットするしかなさそうだ。別に、犯罪に手を染めるのは今さら問題でもない。誇りた

かい使鍵（ローザ）をそんなつまらない仕事に使うのが不本意なのである。

黒い帽子をぐいとおさえつけて、ためいきまじりにガディスがライターをとりだそうとした——そのときのことだった。

「君の分はこれで足りるのかな、ミスタ・ウォークマン？」

折り目のない千円札が一枚、予想外の至近距離から差しだされた。帽子の影の下でガディスはぎらりと鋭い視線を動かした。

厭味（いやみ）なほど立派な発音の英国英語（クイーンズイングリッシュ）……

舗道を照らす水銀灯の薄い白光（びゃっこう）が、その声の主を浮きあがらせガディスに真実を告げていた。すぐ傍（かたわ）らに立つ国籍不明の青年の姿を。近寄る気配さえ感づかせなかったのなら、たいしたものだ。唇のはしを不愉快にゆがめ、どう考えても好意的ではない科白（せりふ）をガディスは吐き出した。

「よお……。こんなところであんたの顔を見るとは思いもよらなかったぜ、リーバイス君」

呼び名をわざと間違えるのは単なるいやがらせである。ジーンズのメーカーブランドにひっかけた、くだらない駄洒落（だじゃれ）だ。

「そうかな。君自身が今やっていることを鑑（かんが）みれば、このくらいの展開は予期していただかないと困るはずだ、ケンウッド君」

平然と、エドウィン・アーサーは同じパターンの皮肉できりかえしてみせた。ガディスの言

いぐさには慣れているのだ。

「つきあいのいい野郎だ」

彼の指の間から千円札を手荒にひきぬき、ガディスはそれで遠慮なく自分のためのキャメルを購入してしまうと、ついでに三つ先のボタンを押し、柄の違う箱を自販機の下の取り出し口からひっぱりだした。ひょいとエドウィン・アーサーに放り投げてやる。

「ラッキーストライクでも持って本国に帰りやがれ。てめえはあの坊主と一緒に昼寝してんのが似合ってるぜ」

「その評価は一種、私にとっては褒め言葉なんだが」

笑みも見せずにエドウィン・アーサーはラッキーストライクを掌のなかで一回転させてから、コートの内ポケットに指先ですべりこませる。案外、本気で言っているのかもしれなかった。ガディスは力なく両の腕を広げ、つきあえねえなと呟いた。

「とりあえず、煙草代には礼を言っといてやる。じゃあな」

知らん顔でさっさと行きかけるガディスの背に向けて、エドウィン・アーサーは悠然とした一言を投げる。

「しかし、私もそうそう簡単にトンボ返りはできない。クリストファー様をここでお迎えしなければならないのでね」

「――――」

間をおくことなく、ガディスの足が急に止められた。
……冗談ではない。
「約束が違うぜ」
「それはそのまま君に返したい言葉だ、ファイアマスター・ガディス」
ガディスが放った険しい声に、エドウィン・アーサーが動じるようすはまったくなかった。そういう奴だ。帽子の鍔を深めにひきおろし、相手に見えぬかたちでガディスは強く眉をしかめた。クリストファーがそこまでまじめに乗り出してくるということなのか……
「俺がいつてめえとの約束を破ったってんだ、俺はいつだって俺の好きにすると言っといたはずだぜ」
「その君の自由が誰から与えられたものなのか、まさか君も知らなかったと言うほど愚かではないだろう」
「恩義のスジなら通してやってるさ。あの小僧のゲームから降りるとは言ってねえんだ。ただ、このアスヴァルとの一件は俺に預けろってだけのことだ。てめえらに干渉されていい話じゃねえ」
「気がついていないようだな」
冷ややかに炎使ガディスを眺め、エドウィン・アーサーはさらりと言う。
「君自身すらもゲームの駒なんだよ」

「……。それがてめえの大事な哲学か」
「私は現実を君に知らしめているだけだ」
「吐き気がしやがるぜ」
本心からガディスはそう言い捨てた。
クリストファー・ローディン・ジュニアの代弁者となるには、この男が漂わせる野心の色は強すぎる。
「遊戯(ゲーム)なら遊戯としておもしろがるのが坊主の信条じゃなかったのか。目の色をかえて俺に文句つけに来るようじゃ、あんたもまだまだってことさ。クリストファーが俺と喧嘩(けんか)したがるとは思えないしな。なにしろ俺はソニー・W・エクセルだぜ」
「自信家であることがすなわち美徳とは言えないと……」
エドウィン・アーサーの面持ちに、かすかに不愉快な気分がよぎったようだった。
「君を見ていると学ばされるものだ」
意外なところでツボにはまったらしいなとガディスはひそかに考える。
なるほど、目の色を変えたかどうかはともかく……こちらに文句をつけたい動機がエドウィン・アーサー個人にはあるというわけだ。クリストファーならわざわざそんな遠回しな手順はとるまい。まったく厄介(やっかい)な奴が話に絡(から)んできやがる……。
そうだ、クリストファーはソニー・W・エクセルと喧嘩はしたがらないはずなのだ。

「小僧をけしかけやがって……」
ガディスは舌打ちした。クリストファーをこんな僻地まで連れ出すようなプランを裏で組んだのは誰なのか、もはや明白だ。
「てめえが相手じゃ埒があかねえ。坊主と直接、俺を話させてみろってんだ。ソニー・ウォークマンって名前の本命馬に投資する愉しみくらい俺が教えてやる」
「残念ながら、今のところそれは不可能だ」
エドウィン・アーサーは肩をすくめてみせた。
「あの方のいる場所は、ここからは遠すぎる」
「……あん？」
言い訳にしては随分と見えすいたことを口にする。ガディスは片方の眼を細めた。
「どういうつもりだ、そいつは？」

真っ暗な天空――
薄紫にすきとおる地平がひたすらに、世界の果てまでのびてゆく。
かぎりない沈黙のなかを。
凍結した時のなかを。
ひたすらに。

がっ、と頭上で雷鳴が轟いたのがわかった。
眠りの乙女は不意にその双眸をみひらく……。
これはどういうこと?
禁域を侵す異界のものの足取り。
濃褐色の髪をゆらめかせ頭をもたげ、彼女は界の断層をつらぬく眼差しに力を宿す。
——誰が……

水晶の門が震える。空を鳴らす。何度も、何度も。
時空を統べるエクサールのためにゆるされた、界峡の聖地。
一枚板のようになめらかに広がる透明な大地の上に、闇天にむかい聳えたつ無人の塔。
それは哀しみに囚われた戦士の身と魂をいだきいれる、安らかな檻でもある。少なくとも現在は。
その界の名を乙女は知っている……遠い記憶のうちに知悉している……深く。
もうひとつの、自身が還るべき地平として。
奇跡を祈り、数多の界をあやつる魂の置きどころとして。

――彼の地は〈晶月界〉。

乙女の采配をもってしなければ、何者が立ち入ることもありえない、貴い世界。

いや……資格をもつものは他にもいる。一定以上の高位の神官、そして司杖に導かれしもの。

これはどういうことなのか。界境の門が叫びあげる警鐘の意味は。光の泉を満たす不吉な濁りは。

「礼神官、アスヴァル……」

災禍を運びこむ意志がそこにある。誰が何を？　どのような狙いにおいて。

あの怜悧なアスヴァルが謀り、そして実行することといえば……？

「違う」

彼女は愕然と息を呑む。

アスヴァルによる企みではない。彼ひとりではできない。そうではない、別の力が……！

「駄目だっ!!」

一声、自分の叫んだ制止の言葉で、目がさめた。凍りついたように、まばたきさえできなかった。

アースカラーのあたたかいベッドのなかから、あきらは勢いよく身体をおこした。駄目だ。駄目だ。このままでは絶対に駄目だ。

どうして今まで、呑気な眠りに陥ってなどいられただろう！

「……いない……」

周囲に——家の内側に、この急を告げるべき相手の気配はない。貢がここを離れている理由は衛に聞いたとおりだ。あとの二人は？　司杖は？　——司杖はある、少し離れたところに！

失われていた精神の芯が、今の衝撃によって戻ってきたようだった。頭をあげても、もうぐらつきなどしない。はずみをつけて床におりたち、あきらはパジャマの上に羽織れるものを探した。貢のジャケットを勝手に使わせてもらえばいい。

「ごめんみっちゃん……ついでだからジーパンも借りる」

いきなり走り回ったら貢に叱られるのは必至だ。二重の意味で不在の末兄に謝りながら、一秒も無駄にしないスピードでジーンズと上着を着こみ、あきらはまっすぐ部屋を駆けだした。

走るのも惜しい階段をほとんどとびおりるかたちで通過し、淡い夜霧のかかる戸外へすべりでる。そういえば髪の毛が乱れたままだ。うっとうしい。ずっと寝ているだけだったから。あきらは唇を噛む。

ベッドの外は思った以上に寒いけれど……

殻の内が優しいのはあたりまえだ。
そんな風に包まれていても、結局なにも良い方向へ変わりはしないのだ。
間に合わないのだろうか？　止められないのか。どうしようもないのだろうか？
アスヴァルが標的におさめたのは。
それは。

ここでは、すべてが穏やかにおちついている……。
エクサールの力が砕いた塔の頂点は、もはや何事もなかったかのように、元のままに修復されていた。
不変であること。それがこの界のもつ特質であり、この界が存する意味でもある。
「ふうん。変な場所、だね」
ドーム状の透明な天井を眺めながら、クリストファー・ローディン・ジュニアは興味深げに呟いた。
彼自身の本来の世界から――〈炯月〉の界から――完全に切りはなされた、遠い異空の光景を前にして、その程度の反応ですませてしまえるクリストファー少年の精神は、礼神官アスヴァルの感性をもってしても奇妙なものとして捉えざるをえなかった。
己の属する物質世界から遊離することに、尋常な人間が、こうもたやすく順応できるはずは

ない。闇の深さも静寂の質も、皮膚に触れる空気の性格までが違うのだ。偏狭に閉ざされた固定世界の『重力』から離れた人間は、その根源的なズレに対して、まず真っ先に恐慌をおこしてもおかしくないのである。

「でもぼく、異世界っていったらもっと頭が痛い感じのところかと思ったけど違うみたいだね。これだったら世界の全部がゼロと一だけでくみたてられてるとか分子系列の密度が違うとかいうほうが怖くない？　ちょっと拍子抜けしちゃった……。まあ、奏太たちとぼくたちが似たような身体で生きてるってことは、互換性が高いレベルの世界だけつながってるってことなのかな」

「確かに、われわれが行き来するのは、そこに『接点』のある世界だけだ。接する点さえ生まれないようでは因果力の交換にも意味がないということだ」

「そうなの？　けっこう〈琅月界〉の人って自分たちにメリットがあるかどうかってことしか考えないで異世界間の開発してたみたいだね、つまり」

「もちろん、〈炯月界〉の執政者とて、触れもできず見ることもできない領土へ征服の手をのばそうとはしないはずだ。即物的であるのは人の本性と思うが？」

「まあね、普通の人たちの場合、五感に訴えないとわかんないってのがつまらないよね」

夢が足りないよね、とひとりごちてクリストファーはプラチナブロンドの前髪を指で追い払った。

この少年が語る内容のうち、どこまでが卓抜した叡智に導かれているのか、どこから先が一種の狂気に踏み入れているのか、礼神官アスヴァルにはいまだにつかめない。おそらく、つかもうとすること自体が誤りなのだろう。

「〈晶月界〉」への転移自体は、私にとって特に困難なものでもない。だが……」

一定しない方向へ光がはねかえりあう、紫に透ける床へ歩を踏みだし、アスヴァルは少年のことをふりかえる。白布につつまれた右腕を庇いながら。

「その先については、立案者である君の力にかかっている。君の感触は？」

「……うーん、干渉をうけいれないところだってのはなんとなくわかるよね」

ついと水晶の壁に人差し指をすべらせ、クリストファーが答えた。

「外側からの力は通過しない構造になってるのかな。これってクリスタルなの？　そっちでの名前は違うかもしれないけど」

「炯月界の物質におきかえることが、まず不可能だが……。聖的なもの、世界意志的なものの具現ではある。晶輝石とわれわれは呼んでいるが、本来は『石』とはいえないものだ」

「ふうん。なにしろ、こんなものが時を止めてくれるんだものね。望みさえすれば、いつまでも」

クリストファーはかすかに呆れたような言い方をする。

「くだらないよね。止めただけで終わったつもりになる人って、ぼくは嫌いだな。同じはずな

いじゃない？　ものごと、どうしようもないことかどうにかなることの二つに一つしかないんだから、目を閉じて見ないフリっていうのがいちばんたちが悪いよね。なんだか腹がたってきちゃった」

「それが君の正義心か」

「べつに。ちょっとばかばかしくなっちゃっただけなんだけど、まあいいや……せっかく作った計画だし……」

小さくあくびをしてから、クリストファーは気のないようすで楕円の床の中央まで足を運んだ。

もしもただの傍観者がここに存在したならば、幼さのかけらをのこす同年代の少年がふたり、邪気のないゲームの相談をしているとしか見るまい。この幻想的な舞台において。

しかし――

「外からの力が通じないなら、やりかたは簡単だよ。だってこのクリスタル自体が意志の具現なわけでしょ？　じゃあ仲介してもらおうよ」

少女のようにかわいらしく首をかしげ、クリストファーはあっさりとアスヴァルに対してそう提案した。

「こっちが何もしなくたって、むこうから出てこざるをえない気分にしてあげればいいんだよ。ウィンドマスター・イオをね」

II

「っ！」

そのとき、不意をついて後ろから上着の背中を力いっぱい摑みおろした相手に、炎使ガディスは驚かないわけにはいかなかった。不本意ながら。

「何を……」

しやがる、と最後までは続けられない。

見返ったとたんに、ガディスは数瞬分、反応を失ってしまった。

エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトンさえもが、その人物の唐突な登場には意表をつかれていたようだった。普通より格段に高まわるレベルで勘を磨いてある男ふたりが同時に隙をつかれるとは、よほどとんでもない勢いで現れたということか。それにしても。

「こんなところで何をしているのかっ、炎使ガディス!!」

地団駄をふみかねない、激しい感情をそのままぶつけたのは、濃褐色の髪をのばした少女。

「何をって、そりゃ煙草を……」

毒気をぬかれたなりゆきで、ぼそりとガディスは要らぬことを答えている。

「煙草くらいもっとうちの近くの自販機でもコンビニでも買えるっ!!　わざわざこんな遠出し

て探させるのはそっちの責任っ!!」

「そいつはすまねえがな、俺の趣味に合わねーんだ、このてめえんちの近所に見つからないラクダ印のハッパじゃねえとな！」

ちょっと待て、これは誰だ？

ひきずられるように言い返しておいてから、ガディスはまばたきをひとつした。

「それはあなたの趣味だ、ディレイ・ローザにはどんな煙草だって関係ない!! こんなとこで、こんなところで道草くってる場合じゃ、こんなことしてる場合じゃっ……!!」

仁王立ちになってガディスを怒鳴りつけているうちに、彼女のなかでは、言わねばならないことがぐるぐると混乱してくる。おい、いいから待てよ少し、と彼女だけでなく自分自身にも言い聞かせつつ、ガディスはエドウィン・アーサーにはつけいる余地を与えぬよう半身に構えておいて、彼女の——来生あきらの肩を片腕でつかまえた。

「いいか、俺が今から質問をふたつだけするぜ。まずはそいつを聞かせてくれ。……ひとつめだ、なんで俺を追ってきた？」

「皆のなかでは、あなたがいちばん近いところにいたから」

息を乱しながら、あきらは簡潔に答える。

ガディスは舌打ちをした。ライアがいないということだ！ あの野郎、いったいどういうつもりで……。

「ふたつめだ。俺に何を知らせにきた?」
きっ、とあきらのまなざしがエドウィン・アーサーの姿をとらえたのが、そのガディスの二番目の問いと同時だった。
瞳の向かう先を移すことなく、ガディスに対して、かすれる声を押しだす。
「謀りごとが……」
「何?」
「礼神官アスヴァルと誰かが手を組んだ……風使イオを動かそうとしている! やめさせなくちゃ!! 晶月界のなかにいる!! こちらがわの世界の超能力者!!」
「――――」
ガディスが口をつぐんだ。
ぎらりと烈しい光を、ヴァーミリオンの双眸によぎらせて。
とびかかる寸前の肉食獣のような、それは剣呑な沈黙だった。
彼とエクサールの少女のふたりを眺め、エドウィン・アーサーは動じようともせずに炎使ガディスからの言い分を待ち受けた。
「……そういうつもりかい」
牙を剝いて襲いかかるかわりに彼が実行したのは、乾いた笑いを吐き出すことだった。
「俺が使えねえとなったらアスヴァルと、ってあたりは納得できないでもないぜ。おもしろそ

うだからな。お利口だ。実にな」

「後戻りできない道とも、私は思わないのだが。君の出方によっては」

平然と、エドウィン・アーサーはそれに答えてみせる。さらに挑戦的な提案によって。

「たとえばここで君が彼女ごと、こちらの監督下におさまるとすれば……」

「言葉ってやつは便利なもんだな、『監督下』とはな！　それでアスヴァルの野郎と鼻つきあわさせといて両成敗か、でなきゃ漁夫の利が狙いか」

いよいよ荒々しい調子で、ガディスは腹の底から相手の言いようを嘲笑った。

「てめえは守護者ってものをよく知らねえ。小僧に伝えとけ、今度ばかりは改心しねえと縁切りだ、いいな!?」

「損な伝言役は御免こうむりたいが、君の考えはだいたいわかったというところだ」

そう応じて、エドウィン・アーサーはついと肩を動かし、中空の一点を見やった。霧の薄幕を破って、青い髪をもつ水使の少年が軽業師のような身のこなしでその場に参入するところだった。

「ガディス!!　いったいどういうつもりなんだ、そりゃ海の向こうでどんなお友達をつくろうとおまえの勝手だけど!!　何か酷い企みがあってそれをぼくらに伏せてたっていうんなら最低だっ!!」

水霧の網をはっていたユーマには、今までのガディスとエドウィン・アーサーのやりとりを

とらえることは可能なのだ。彼らがたたずむ水銀灯の光域のなかへとびこんでくるなり、そんな叱責の声をたたきつける。

「うるせえ。俺の幻滅と同時進行で、んなヒステリーな科白を持ってくるんじゃねえ」

空いているほうの掌を、炎使ガディスは襟元の鎖にじわりと近づけていた。

「余計腹が立って、何をするかわからねえ……」

「……」

一足飛びにあきらの傍らまで着地しつつ、ユーマもさすがにそこに殺気だったものを感じとる。ガディスの動向を静視するかまえで口をとざした。

少なくともガディスは卑劣な男ではない。ここで責任のがれのパフォーマンスとして怒りを演じるようなことはしない。

『エドウィン？』

少し意外そうなクリストファーの呼び声が、エドウィン・アーサーの意識にすべりこんだのもそのときだった。

『おやおや、お早いお戻りでしたね』

『さがしちゃったよエドウィン、なんでそんな変なところにいるの？　ウォークマンばりばりに怒らせちゃってるじゃない。ぼくが行ってみたほうがいいのかな？』

『いえ……それは危険ですね』

ここでクリストファー少年をファイアマスター・ガディスと対面させるのは、エドウィン・アーサーにとっては計画外だ。

『ファイアマスターをますます二律背反の境地に追いこみそうな気がいたしますよ。そうなった場合、苦悩するより爆発するほうが早そうなタイプですし』

『わかっててプレッシャーかけたの？　エドウィンってけっこうひどいことするね』

『目に余る放縦というものは、私にもなかなか許しがたいものですからね』

『やだな、エドウィンまでウォークマンのこと怒ってたらぼくが困っちゃうよ。足元すくう相手のこと間違えてない？　仕方ないなあ、ぼくがルートひらいてひっぱりよせるからこっちまで移動しておいでよ。せっかく日本で一番のホテルにスイート用意してくれてるんだよね？　ぼくさっさとチェックインしちゃいたいんだけど。お土産もあるし』

やれやれと肩をすくめるような風情で、クリストファーはエドウィン・アーサーをたしなめるメッセージを送ってくる。やや表情を硬くしながら、エドウィン・アーサーはその彼の声を受け入れた。

『ああ、そうですね……申し訳ありません、私が先走ってしまったようです』

『べつにそんなに恐縮しなくてもいいよ。エドウィンがそういうまじめな人なのもぼくは知ってるしね。それよりせっかくこっちが面白いことになってるんだからエドウィンも一緒に見物しようよ。奏太って手抜きしないから楽しいよ？』

クリストファーが目の前のイベントを愉しんでいる最中だったために、楽観的なスタンスをとっていたのは、エドウィン・アーサーにとっては幸運というべきだった。クリストファーがどの程度ファイアマスター・ガディスに優先的な価値をおいているかは、なかなかきわどいところでエドウィン・アーサーにも一概に読みきれないのだ。

『承知いたしましたよ、クリス様』

その一連のクリストファーとエドウィン・アーサーの感応は、ごく短い間におこなわれ、炎使ガディスがディレイ・ローザを発動させるまでにはいたらなかった。エドウィン・アーサーは一時降伏の意をしめすように両手の指をひらいてみせ、ガディスに対して語りかけた。

「なるほど、エクサール・ディシスの感知力は素晴らしいが、どうやら君たちがこれから動こうとするには、気づくのが遅かったようだ。私も矢面に立てるほどの大器ではないので、まずは失礼する。ファイアマスター・ガディス、ともかく君があまり不毛な道を選択しないことを私は祈っている。せっかくあの方に気に入られているのだから、その立場を無駄にしないことだ」

「てめえが自分で小僧との間を裂いといて、よく言いやがる……」

「誤解はありがたくないな。私は君に関して、そうまで子供じみた小細工はしていない」

冷ややかに告げるなり、エドウィン・アーサーの姿は吸いこまれるようにそこから消えていた。ガディスは噛みあわせた奥歯をぎしりと鳴らした。

エドウィン・アーサー自身の能力には、こんな瞬間的な移動を可能にするほどのものはない。クリストファー・ローディン・ジュニアが、どこからか彼に力を添えて呼び寄せたと見るしかなかった。

「気づくのが遅かった――そう言った？」

厳しい顔つきであきらが呟く。

その彼女の肩を腕全体で包み護るようにしながら、ガディスは軽くかぶりを振った。

「わからねえ。奴の言うことだ、ハッタリかもしれねえ」

「……ガース！」

はっと瞳を大きくみひらき、あきらはガディスの胸元を勢いよく握り拳でたたいた。

「司杖でたしかめる！　早く！」

ガディスとユーマは思わず一瞬、そこで目と目を見あわせている。

記憶が戻っているわけでもあるまいに、この来生あきらのエクサールとしてのふるまいようは……。

過去を失っても残る本能はあるということなのか？　生まれついての巫女とはそういうものか。奥底に眠らせたものが瞬発的に喚起されるというようなことか。

だとしても……

これはいったい誰なのだ？

少なくともガディスの知るディシスではない。だが決してレアでもない。
胸の内にひろがる疑問を、ユーマに伝えようとはガディスはしなかった。切迫したあきらの言いように押されたというのもある。
「たしかに俺がご指名いただいたガースの守人ってやつだ。頭の回転が鈍っちまってるとしか思えねーな、俺も」
自嘲ぎみに答え、上着の懐にひそませた司杖に指を触れる。
聖光石の輝きをはなつ、黄金色の短刀に。
琅月界崩壊の際において、この司杖をガディスに託したのはエクサール・ディシス本人だ。
痛切な悔恨とともに甦る彼女の言葉を、炎使ガディスは何度くりかえし夢に聴いただろう……。しっかりと大切な司杖をつかみだしながらガディスはひとり、眼前にいるエクサールの乙女から視線を落とした。
叶えようがなかった誓いのことも、彼女はもはや忘れているのか。あるいはそれすらやはり形を変え、侵しがたく彼女の心の中核にのこされているのか。
『伝えてください』
……願われたとて。
たとえ命じられたとて、うけいれることはできなかった。

ディシス。

『確かに私たちの愛は在ったのだと』

礼神官アスヴァルに。滅びに堕ちる琅月界からアスヴァルを救ったうえで、その言葉をアスヴァルに伝えるために生きろというのなら、それは守護師団の誇りをもつ者にとってあまりにも……

いや、全身全霊をかけエクサール・ディシスを愛する者にとって。

あまりにも、残酷だ。

「……ああ……!!」

両手のなかにきらめく短刀をとった瞬間に、すでにあきらの唇からは力ない悲鳴がこぼれていた。

駄目だ……!

視えてしまったのだ。もう、それだけで。

「あきら!? どういうことなんだ、晶月界で何が起きたっていうんだ!?」

ユーマが必死に呼びかけているのはわかったが、どんな言葉で彼に現実を告げていいのか、あきらには選ぶことなどできない。

司杖を鞘から抜きもせずアスファルトの地面に押さえつけ、あきら自身その短刀に意志をこ

めるように足元にうずくまり、震える声で叫ぶことくらいしか。できない。
「やめて……!!　やめて、やめて、アスヴァル……!!」

III

ゆらり……と波が生じた。
静寂のみをうけいれる、時の流れぬ場所に。
まるで、それまで微動すらせずにいた碧水の表面へ、心ない礫が投げ入れられたようだった。
「無残だな」
低く、無感情に放たれた一言。
揺るぎの源は、その声の主にある。
風の震え……
いや、すでにここに風はない。
薄い硝子に似た透明な壁に周囲をへだてられ、ごく微弱な光だけがさしこむ、なにもない世界。がらんどうの硝子箱の、そのすきとおった壁の内を覗きみる位置に、冷然たる態度で彼はたたずみ、そして呟く。

「生ける墓標と化したか。〈風使〉イオ」

使命である、戦士としての役目までも棄てて――。

壁に囲われた空間の中央で、片膝をいだき地に座していた影が、つと彼の声にこたえて顔を上げた。

金褐色の双眸が、歓迎されぬ来訪者の姿をとらえる。

漆黒の髪が白皙の面をなかば覆い、闇を体現するがごとき弔装衣をまとう青年の姿。鋭利な知性と罪深い謀略とを身のうちに秘めた、礼神官アスヴァルの――本来の、琅月界に在るときのままの姿を。

「……」

相手の正体を認めてももはや驚くことも激することもなく、そこから眼差しをそむけながら、風を失くした〈風使〉はぽつりと応じただけだった。

「ここは……貴様を迎えるような、ところでは……ないはずだ」

仇敵であるアスヴァルに限ったことではなく。

あらゆるもの、あらゆる想念の介入を拒む壁が、彼の前にははりめぐらされている。

風使イオの精神に『無』を与えるために。

永遠につづく静穏のために。

「究極の自閉というわけか」

アスヴァルは暗い表情に、嘲りの笑みを刻む。
「君らしい選択だ。ライエノーツとしての則をはずれることもできず、だがその信念にのっとって裏切者を粛正することもできぬのだから」
そう……闇に染まり、悪鬼と化す覚悟もないのだ。
いくら愛や誠実があろうとて。
そのような甘さ、脆弱さはアスヴァルの目に許容できたものではない。
出入りする口もなく、ぴたりと閉ざされた硝子箱の光景。これ自体が、現在の風使イオの意識世界そのものだ。己を封じ、すべてから切りはなすことでしか——回避することでしか現実に立ち向かえない者のやりかただ。
そんなことでディシスを得られるのならば、自分も初めからそうしている。
「臆病者め」
厳しい非難の言をアスヴァルから告げられても、だが、風使イオの内面でそれが強く作用することは決してなかった。
「知っている……」
顔色を変えようともせずに、彼はそう唇を動かした。
とうにわかっている。
今さら指摘されるまでもなく、自明のこととして。

そして臆病な自分を救いつづけていた者たちが誰なのかも。

……誰を責めることもしたくない。紛れもない幸福を、感じていられた時間のために。

「俺が目障りならば、いくらでも罵って気を晴らせばいい……。ただ、俺にとって大切なものたちを……貴様に汚される筋合は、ない。俺に何を求めても、得られるものもない。無駄なことだ」

器用な弁舌からは程遠いが意志の重みに満ちた言葉を、イオはゆっくりと静寂の上に並べた。アスヴァルは透明壁の外側で両腕をくみあわせてそれを聞き、やがてふっと謎めいた光をその暗紫の瞳に浮かべてみせた。

「無駄なことかどうかは、君がこれから思い知るだろう。少なくとも私は、哀れな風使ひとりを罵倒した程度で救われる男ではない」

「……」

そのアスヴァルの言いようは、本来、〈晶月界〉の理をわきまえぬ愚かな者のつよがりとして聞かれるべき種類のものだった。黙したまま、イオはアスヴァルの真意に対して彼をつらぬき読みとるような一瞥を向けた。

アスヴァルが礼神官としての地位をはるかにこえて有能な男であることに、間違いはない。だが、いかにぬきんでた力を有していようと、たとえ彼の手にエクサール・レアの司杖が得られていようと……

「晶月の宮が用意した檻を、うちやぶることは巫女にすら不可能。そう言いたいわけか」

風使からの返答を待たず、皮肉な口調でアスヴァルは呟いた。

「いかにも、君の実体とわれわれとの間をさえぎる晶輝石をとりのぞくことなど無理な相談だ。ましてや力ずくで破壊し、内に踏みこむことなど……望むべくもない。ここで君とともにおとなしく封印される心算でもないかぎりはな」

われわれ……？

アスヴァルが用いた複数形の表現が、何を意味していたのか、察知するすべはイオにはなかった。その瞬間にはまだ。

「！」

それはアスヴァルが胸元にくみあわせていた両腕をほどき、もちあげた左の掌で、互いをへだてる透明壁の表面に触れたとき――

どこか遠い異界の涯へ感情を置きすてているようだった風使イオの美しい貌に、予期せぬ緊張の色が初めて走ったのが、そのときのことだった。

硝子が融解する。

アスヴァルの掌を中心として。

はりつめた硬質な壁が、いともたやすく陽炎のゆらめきへと化してゆく。

「驚いていただけたなら、何よりだ」

壁面を溶かした穴が大きさをひろげ、彼の全身を通過させるまでに成長するのを礼神官アスヴァルは酷薄な意図とともに見守った。

ここは風使イオの意識世界。

必要なものは現実を動かす力ではない。他者の精神内部に割りこみ、操作する、巨大な意志の存在こそが意味をもつのだ。

異能力者クリストファー・ローディン・ジュニアによる……

精神の侵略が。

「アスヴァル……！」

信じがたい事実に瞳をみひらき、かすれた声をイオは喉の奥から押し出した。

「礼神官アスヴァル、貴様は……」

闇に堕ちるのみでは足りず、魔王と手を結びでもしたというのか……!!

最悪の危機が目前にあらわれたことを、今にしてイオは本能で悟っていた。これはすでにアスヴァルひとりの力で可能になるようなものではない。もっと異質な、さらに超越した……なにものかの介入が……！

ここに在るアスヴァルの意識は、その莫大な後ろ盾に支えられ、イオが知ることのない第三者の意志を中継するものでしかないのだ。

「なぜ恐れる？　風使イオ」

アスヴァルが問いかける。
「私は君を解放するために、ここへ来た。君も少しは従順になるといい。君自身の心に」
そして一歩、彼はめざす風使の姿にむけて踏みだす。アスヴァルの歩みを妨げる壁はもはや効力を失い、透明な影をふるわせるだけだった。
敏速にその場から身を遠ざけようとして、不可視の枷に足をとられたことにイオは気づく。動けない。使鍵ザードも今の彼をもはや護りはしない。
迫っているものが自らの死や消滅であるなら、それを恐れる思いはイオの内にはない。滅びることは怖くない。だが。
アスヴァルの狙いは別のものだ。イオは体温を失い蒼白になった拳を、凍りついたように止まっている自分の足に打ちつけた。悔恨の叫びが全身を駆けあがってゆく。
どうして自分はここにいるのか、なぜ先に自害の途を選んでおかなかったのか!!　たとえライエスとしての道を外れても。
「ライア……」
ふと、彼の属したライエノーツの首席の名を、祈るような思いでイオは呼んでいる。
そうだ、光使ライア。偽るよりも先に、絶望させるよりも先に――なぜその手で、自分のことを殺しておかなかったのか。
「今になっても、君がまだその名を呼べるとは意外だな」

悠然と風使イオの間近まで歩みより、その地に釘づけにされた彼の姿を眺めやって、アスヴァルは眉をひそめながら次の一言を吐きすてた。

「憐れな男だ」

「早く殺せ……」

地に膝をついたまま、挑みかかる表情を勢いよく上向かせ、イオはそうアスヴァルを促す。

「企みなど不要だ、その手で俺を殺せばいい……!! アスヴァル!!」

「断る。ライエノーツを離れた守護者の生命を奪ったところで、私にとっては価値をもたない」

にべもなくアスヴァルは漆黒の髪をゆらした。

冷ややかに。

「君のような男は、己の信念に殉じるのがふさわしい。手助けをしてやろう……」

さしのべた左腕の指先が、ぴたりとイオの胸元で止まった。

それを払いのける一挙動さえ、イオにはもう許されない。完全に身体の——すなわち精神の——自由を封じられたのだ。なお拒絶の意志を宿して彼は目前の敵に対峙した。

「こんなことをしても……貴様の野望が遂げられることはない」

「どうかな。それは君が決めることだ。君のなかにある憎悪と暗黒……この胸のなかに君が忌み隠す、本来の君の性がな!」



静けさを保っていたアスヴァルの言葉が、あきらかに残忍な空気を孕んだのが、その瞬間だった。

「アスヴァル……!!」

鋭いイオの叫びは、半ばで衝撃にかきけされた。凄絶な苦痛が彼の声を奪い、激しい戦慄が彼の身のすみずみまでを支配した。

イオの胸元につきつけた自らの左手を、アスヴァルが直接、そのまま彼の体内へと捩りいれたのだ。ずぶり、と五本の指が抵抗をうけることもなく風使の胸に沈みこんだ。

「ここだ、風使イオ。君がここに秘めたものを……」

小刻みな震えを走らせる風使の美貌のうえに、かがみこむように暗紫の瞳を近づけ、ごくひそやかにアスヴァルは囁いた。

「ときはなつだけだ……自由に」

「……ア、スヴァ……」

やめろと動いたイオの唇は、だがそれ以上の言辞を音声化することはなかった。さらに深く、アスヴァルが罪に汚れた掌を彼の内部へつきいれてゆく。その精神の奥底へ。

「幸福だろう。君は優秀な守護者だ。ライエノーツの名に恥じることのない最期を、これで君は得ることができる」

虚ろに見開かれた金褐色の双眸は、歪み遠ざかるアスヴァルの姿を昏く映しだしたきり、そ

れらの役目を放棄した。なにもかもが……失えない魂さえもが、たよりなく羽ばたき去っていくようだった。

駄目だ。せめてひとつだけ、手放してはならぬものが。あの少女の存在だけ。

彼女への……忠誠だけは。

「……!!」

暴虐な嵐に思考を断ちきられ、抑えがたい呻きを彼は発した。激震が全身をつらぬいた。意識がとざされる直前に、ゆっくりとアスヴァルが口にした呟きが、イオへ届いた最後の言葉になった。

「手に入れたまえ。……真の、安息だ」

IV

この国の首都圏で最もクォリティを保証されている高級ホテルのインペリアル・スイートに腰をおちつけたクリストファー・ローディン・ジュニアは、さすがに少し疲れたようすで、豪奢な応接セットの片隅に身体をおさめていた。両足の靴を長椅子の下に脱ぎすて、弾力のありあまるクッションに背中を預けて何事か考えつづけている。出来のよすぎる人形が、ぱつんとソファのうえに飾られているような、それは奇妙に生命感に欠ける光景だった。

スイートルームにそなえつけられているミニ・キッチンで彼のために熱いミルクティーを作るのが、エドウィン・アーサーの、ここにたどりついて最初の仕事だった。

「東京も、水の味がずいぶん悪くなっているものだ……」

とりよせたミネラルウォーターのボトルを掌のなかで半回転させながら、エドウィン・アーサーはそうひとりごちる。昔はもう少し、ましなほうだったと思うのだが……。

ふと、ポットをとる手を止めて彼はクリストファーの気配へと耳をすます。

静かすぎる。

「クリス様?」

一度、声に出して呼びかけておいてから、エドウィン・アーサーは素早く意識を切り換えた。

『クリストファー様!』

「……えっ、何?」

わずかなズレを挟んで、ふわりとクリストファーがその首をめぐらせた。

「どうかしたの、エドウィン?」

自分の思考が本来の身体を離れ、どれほど遥かな地平まで飛び去っているのか……自覚というものをもっていないのだ。この少年は。

「そろそろお寝みになってしまってもよろしいのですよ、クリス様は。後のことは、もうどうとでもなりますからね」

「いやだな、そんなの。そしたら例によってエドウィンがいちばん面白いところ持ってっちゃうんだよね？　その、どうとでもなっちゃうとこが実は今回の目玉なんだし」

やんわりと休息を勧めたエドウィン・アーサーに、クリストファーは小さな肩をすくめてみせた。

「それにまたライエノーツの人たちが街なかで大騒ぎすると、いいかげん『カンナギ』だって黙ってないよね。それはエドウィンに迷惑だし、ぼくもカンナギに邪魔されたくないし。もう少しは奏太のことフォローしてあげなくちゃ」

「……なるほど。いたしかたありませんね」

全面的な賛成はできないのだが、やむをえずエドウィン・アーサーは従順にひきさがる。必死になって大反対を唱えるほどの状況でもない。今はまだ、確かに。

「ねえエドウィン、お茶は後回しにしてもいいよ。ちょっとここに来てぼくの頭の中身、覗いてくれる？」

「は？　ええ、承知いたしました」

電熱式コンロのスイッチをオフにして、エドウィン・アーサーは足早にキッチンから離れた。

「レベルをね、少し強くして視てほしいんだ……。エドウィンが大変かな？」

「といいますと、地下二階くらいですか？」

「地下三階くらいまで行っちゃっていいよ。うまく入りこめたらだけど」

「……かなり難しいかもしれませんね」

クリストファーと向かいあう椅子に腰をおろし、やや厳しい面持ちになってエドウィン・アーサーは呟く。その表情を上目づかいに眺めて、クリストファーも相手の気分が伝染したように眉をしかめた。

「だめ？　そうか、だめかな……」

「いえ、とんでもない！　何事もやるだけやってみるのが二百年前から私のポリシーですからね」

この少年に残念そうな顔をされてしまうと、エドウィン・アーサーとしてはノーの一語を口にするわけにいかない。場を明るくするように両手をひらき、そう胸を張ってひきうけざるをえなかった。

「エドウィンってもしかして、うまくぼくに乗せられてるって思わない？」

自分の膝に頬杖をつきながらクリストファーはまじめにそんなことを問いかける。

「さあ、どうでしょう……。そもそも私はクリス様にすっかりイカレちゃっていますので」

「ほんとにエドウィンって自分の人生、狂わせまくってるよね。ぼくのせいなのは別にいいけど、ぼくが死んじゃったりしたらきちんと身の振りかた考えないとまずいよ？」

「お互いに若い身空で、そんな味気のないことを考えるものじゃありませんよ」

クリストファーの目前に掌を立ててその話題を遮るようにし、エドウィン・アーサーはさら

りと答える。

冗談でなく、この少年は若さと未来には事欠かないのだから。

前途をさまたげるものなど……認めない。

「ともかくクリス様の『地下三階』を視てみましょう。よろしいですか？」

「うん。エドウィンのところからで大丈夫？」

「……少し、手をお借りします」

エドウィン・アーサーの声に応じて、クリストファーは片腕を無造作にさしのべた。その手を自分の掌でうけとめ、少年の意識の深層へとエドウィン・アーサーは感覚を一気にジャンプさせた。

医師に聴診器をあてられている最中のような、神妙な顔つきでクリストファーは相手のことをおとなしく見守った。

数十秒間の沈黙が、なにごともなく過ぎ去った。

「……！」

不意に、意識を集中するエドウィン・アーサーの瞳が強く見開かれた。ずしりと重い緊張感が彼の背筋を走りぬけたようだった。

冷たい汗が額に浮いてくる。滅多なことでは内面の苦痛をおもてに出そうとしない彼が、奥歯をきつくかみしめてその精神におしよせる過負荷に抵抗しているようすに、クリストファー

はかすかに首をかしげるようにしてエドウィン・アーサーを眺めやった。

ひらかれた表層意識の部分に接触するのは、それほど困難なことではない。だが、本人にさえ不明確な、混沌に満ちた深層の世界へ没入していくのは、それとはくらべものにならないスリリングな作業だった。特にクリストファーほどに優れた能力者には、意識の奥底を保護しようとするはたらきがおのずと発動する。クリストファー自身が意図せずとも、だ。

それからまだしばらくは、エドウィン・アーサーをじっと観察したままクリストファーはあえて行動をおこさずにいた。

「！」

電撃に似た痺れが、少年の手と触れあわせたエドウィン・アーサーの指先から脳の中枢までをつらぬいた。

「そこまでいいよ、エドウィン」

冷静さを失わない声で、クリストファーがすばりと互いの感応を断ちきったのが、そのときだった。短い痙攣を生じた片腕をクリストファーの手からひきはなし、その掌の震えをおさえつけるように顔の半分を覆って、エドウィン・アーサーは深い吐息をついた。

「……参りました」

「あのね、あんまり本気で無茶されるとぼくも責任を感じちゃうよ。今エドウィンが壊れちゃったら大変だよ？」

「いえ、私も『壊れ』たりするわけにはいきませんよ。人生に未練が多すぎますからね」

クリストファーに対して気の利いた答えを返す余裕は、さすがに出てこない。頬を流れおちる汗を拭い、エドウィン・アーサーはまっすぐに顔を上げた。

「たしかに、クリス様のなかで何かが不安定な要素になっていますね。ちょうど、手つかずになっている予感といいますか……それによって未来が左右されるというような……」

「やっぱりそうだよね？　何なのかな？　まだどこかに開けてないカードがあるよね。ぼく誰かに騙されてるのかな……」

はっきりとした認識ではないのだ。あくまでも意識のずっと奥まったところに、ゆらめき漂う予感にすぎない。クリストファーも釈然としていない風情で、独白のようにそう呟いた。

「クリス様を騙すなんて、天を天とも思わない不埒な輩でしかありませんね。ばっきばきにやっつけてしまわなければ」

「うんうん。こてんぱんのげしげしにね。それにしても変だなあ、ぼくの勘が鈍くなってるのかな？」

「それは考えにくい話ですが……」

エドウィン・アーサーの感じとるかぎりにおいて、クリストファーの能力が落ちているということはありえない。むしろ以前より尖鋭化しているくらいだ。異世界人たちとのコンタクトに刺激をうけているのか……。

「ウォークマンやっぱり凄く怒ってるかな」

唐突に、前の科白とはつながらない一言をクリストファーがぽつんとこぼした。

「……ファイアマスター、ですか？」

エドウィン・アーサーは複雑に声をとぎれさせる。そこで彼がそちらへ話題を運ぶとは思えなかったのだ。

「うん。ぼく、エクサールの千里眼をちょっと馬鹿にしてたからね。彼女ってキレると能力が飛躍するみたいだから気をつけなくちゃ……。甘かったなあ、うまくバレないように仕組んだと思ったんだけど」

「では彼にもう一度くらいはチャンスを与えてみましょうか？　ファイアマスターも、クリス様を裏切っていいとは考えていないようですから」

少し気落ちして見えるクリストファーに、エドウィン・アーサーはそう提案してみせた。

まあ、やむをえないだろう……。

この際、クリストファーがかっかりしてしまうことにくらべれば。

「だよね。なしくずしにはしたくないしね。ってことはつまり、ライトマスター・ライアがいよいよ邪魔かなあ。あーあ」

早くケリをつけなくちゃ、と真顔で少年が呟いたところに、ふと、扉のノブを動かす音が響いた。

二間つづきになっている広いリビングスペースの奥、ダブルサイズの寝室のドアが、内側からゆらりとひらかれたのだ。

クリストファーに向けていたのとはずいぶん質の異なる、鋭角的な表情をエドウィン・アーサーはそちらへ転じる。一方でクリストファーのほうは、充分に予測していたことのようにのんびりと背後をふりむいた。

「どう？　もう動かせそう？」

問いかける。あらわれた、彼の友人に。

右腕を白い包帯で固定したままの葉月奏太は、笑みをのぞかせようともせず、冷ややかに自分の傍らをさししめすしぐさで事実を彼らへ伝えた。

そこには――

「駄目だ、どこ捜してももう抜け殻だ……」

黄金の輝きをはなつ司杖を胸に抱きしめ、あきらは乾いた声で呟いた。

晶月界には、もう何も――誰の存在も、のこされてはいない。あるのは残像だけ。礼神官アスヴァルの穿った深い傷だけだ。

そして次に何がおきるのか、既に、理解するのはたやすいことだった。

「……あきら？」

気遣わしげに水使ユーマが呼びかける。舗道に座りこんだ彼女に向けて。

ユーマに答えなければならない。何が動いているのか、その真実を。だがそれよりも先に、じりじりと胸の底から湧きあがってくる新しい感情をあきらは見つけている。

絶望ではない。

哀しみではない。

ひとり現界に遣わされた、誇りあるエクサールとして――

「！」

ざっ、と勢いをつけてあきらは身を起こし、ふりむきざま、手近にいた炎使ガディスの胸元に握り拳をつきつけた。

「炎使ガディス！　こんなとこでもたもたしてる場合じゃない、ここは本陣にはならない！家に戻って態勢をととのえるのが先決！」

「おい……」

「あなたはライアを呼びなさい、ディレイ・ローザで、今すぐ！」

有無を言わせている暇もない。

「みっちゃんはあきらと一緒に家に帰って、それから結界の監視をつづける役目がある。敵はきっと早いうちに仕掛けてくる。あきらに企みがバレたから、こっちが反撃に出る前に！」

「敵？」

ユーマが反問した。きつく唇を結んで、あきらは頷いた。
……そうだ、もっと早く知っていてよかったことだ。
戦わなければ。
眠りを棄て、立ち向かわなければ。

「思ったより元気そうだね」
葉月奏太と並ぶ位置にまで近づき、クリストファー・ローディン・ジュニアはそこに立つ金褐色の髪の若者を仰ぎ見る。
わくわくする気分を隠そうともせずに。
「ぼくのことがわかる？　ウィンドマスター・イオ」
「……」
深い憂いを残した双眸をゆらりと動かしクリストファーの姿をとらえた風使は、言葉を発することを自体が苦痛のようにしばらく沈黙した後、短い単語で相手のことをあらわした。
「……凶星、だ……。すべてを、曲げてゆく」
「ふうん、そうなの？　詩人だね」
クリストファーはきれいに微笑しただけだった。

まさになにもかもを自らの偉大な力で動かそうとしている彼に、その風使イオの指摘はむしろ意に適うものだったのかもしれなかった。

「必要な暗示は与えた。どう使う？」

葉月奏太――礼神官アスヴァルが、静かに彼の意向を問う。

「彼らはこちらの動きに、既に感づいているようだが」

「それはやっぱり、期待させて肩すかしじゃ可哀想だよね」

彼なりの誠実な発想にもとづいて、クリストファーは邪気のない答えかたをした。

「とにかく元は本人たちが蒔いた種なんだし、さっさと愉しませてあげようよ」

第四章　終焉への誘い

I

自ら望んで晶月界の檻に身を閉ざした者を、再び外へと呼び戻すことは決してできない。
水晶の壁を砕き、その内側へ他者が踏みこむことも。
ゆえに……

「冗談じゃない……」
愕然と、水使ユーマは唇を震わせた。
晶月界の特質を鵜呑みにして、疑いをもたなすぎずにいたのかもしれない。
敵がそれを逆手にとるとも思わずに。
自省の念は、いつでも事実に遅れてくるのだ。後悔も怒りも、何の役にもたたなくなってから。
「そいつは勿論、嘘でも冗談でもなさそうだぜ。アスヴァルにはそんなこと平気でできちまう

はずだ。ガースに上乗せして、後ろ盾にそれだけの力があればな」

喫茶店『海』の店内に大股で歩み入りながら、炎使ガディスはことさらに突き放した言い方をする。生半可に甘い慰めの言葉などここで無意味であることを知っているのだ。

クリストファー・ローディン・ジュニアの発想は、無理を道理として通すやりかたではない。道理のなかの隙をうまくついてくるのだ。そんな肝心なことに気づかずにいた自分自身が、ガディスにとっても今は忌まわしいものだった。

力ずくで晶月界の壁を破るのではなく――

風使イオの精神に干渉し、その心の傷を広げることによって、イオが自発的に壁の外へ歩み出るようにと彼らは仕組んだのである。

たしかに、クリストファーがそれで手を汚すことはなく、礼神官アスヴァルが己の身を危険に晒すこともない。どんな結果になろうと、いずれにしても同士討ちは大きなダメージをこちらに残すものだ。彼らは守護師団が身内の叛逆に四苦八苦するありさまを特等席から観賞して、ただ楽しめばいい。

元はといえば風使イオをそんな境地に陥れたのも、こちらがわの――あくまで身内の、問題なのだ。クリストファーは自分のやったことに決して疚しさなど感じないだろう……。むしろ、風使イオの魂を救う手伝いをしたと自負していてもいいくらいだ。あれはそういう、奇跡的なまでに邪気をもたない少年なのだ。

そして光使ライアはどこにもいない。使鍵ルナクの存在が見つからない。とらえられぬほど遠くにいるのか、あるいはその気配が封じられているのか……。

「今の風使には使鍵がねえ。風を使うことができない以上、奴を殺っちまうのは簡単だ。こっちが情に負けさえしないかぎりはな。連中の狙いも、どうせそのへんだ……」

いらだつ気分をおさえて煙草をくわえながら、ガディスは低く呟く。

「どう見たって、奴は囮だ。自分で仕掛けてくる余裕が、まだアスヴァルにはないってだけの話だ。まともに相手してやって、こっちの戦力を減らすほうがヤバいぜ」

「わかってる……！　ああ、それくらいわかってるさ！　イオがザードを手放していったのは、いざってときにぼくらに殺されるためだってことだよ、そんなのとっくにわかってたことだ!!　だったらぼくがあのときに殺してやればよかったのか!?　こんなことになる前にっ!!」

「せんちゃんは救ける。他にどんな答えもあっちゃだめだ」

カウンターを片手で叩いて激昂するユーマに、奥のテーブルから短く断言する声があった。あきらだ。

テーブルの傍らへ位置をずらした椅子に横座りに腰かけ、椅子の背にひじをのせた姿勢で――流れおちる髪の間から射抜くような目をあげ、ふたりに告げる。

「そういうふうに、誰かがこちらに刃を向けてくるなら、もう降りかかる火の粉なんて言わない」

過去にしがみつく亡霊と——礼神官アスヴァルを糾弾するだけではすまされない。
襲いくる現実の企みを、悪夢と言い換えることはできない。
被害者であることは美しく、そしてたやすいことだ。けれど今、必要なのは涙でも降伏でもない。
どんな謀りごとにも。
「正面から戦う。他のことはできない」
「……」
煙草に火をつける指も寸前で止めてしまったまま、ガディスは彼女のことを厳しい顔つきで見つめかえしていた。
できるのか。それが、本当に？
かすかな逡巡ののちに結局ライターごと煙草をポケットに逆戻りさせ、唇をかみしめてガディスは奥にいるあきらの目前まで足を運んだ。
ゆっくりとその場にひざまずき、あきらと目の高さをあわせてから、囁くように問いかける。
「敵はアスヴァルだ。いいんだな、それで？」
「……間違った情熱は……」
あきらの瞳がまっすぐに炎使の問いをうけとめ、そして答える。

「彼自身さえも、滅びに運んでいく……今、新しい影がアスヴァルを呑みこんだのも、その必然。滅びは伝播する……。やめさせないと……今度こそ、終わりを妨げないと」

「……アスヴァルに加担することが、あの小僧にとっても滅びへの道になってるってことか」

「興味本位に、世界の理をうごかしてはだめだ。そういう関わりかたは、よくない……いつか炯月界に拒まれることになる」

冷静に、身体の内側から浮きあがってくる言葉にあきらは従った。ガディスは彼女からはずした視線を床へと落とし、錆色の前髪のなかに五本の指を荒々しくつっこんだ。

「……畜生が……」

わかっちゃいねえ、と吐きすてる。クリストファー少年の最も近くにいる男のことだ。エドウィン・アーサー・カンナギ・クレイトン。どうして自分の主人を破滅の方角へひきずっていることに気づかないのか？

「いや……いちばんわかってねえのは俺だ、エクサール・ディシス。俺が連中を導いてきちまった……」

「それはあなたが楽になるためだ。あなた自身が『終わり』に惹かれたから」

ガディスの懺悔を優しくうけいれることはせず、むしろ鋭いほどの語調であきらはそう指摘する。

「そしてあなたの罪は、あなたが『過去』に惹かれているように偽ったこと。本当にあなたが

求めていたものは、それとは別に、この現在にあったもののはず」

叱責、ではない。

炎使ガディスにとって、今は紛れもない真実だけが癒しになるからだ。

「……そのとおりだ」

苦い表情に、わずかな笑みを刻んでガディスが呟いた。

炎使ガディスの信条はなりゆきにまかせること。それは実際には、自分に素直でいることとは違う。逆だ。自分の心に正直に動けたためしなどガディスにはないのだ。だからこそ……なりゆきにこそ己の本心があらわれるのだ。昔から。

そして現在までのなりゆきを見るかぎり、自分が何を望んでいたのかなど、もう明白なことだった。

「クリストファー・ローディン・ジュニアって小僧には……『こっちの世界の超能力者』をやってる坊主には、恩義がある。俺を拾って食わしてくれた分の恩がな。それだけじゃなく俺はけっこうあのガキのことが好きらしいのさ」

あの少年の、どこか一部が空虚に削りとられているような、不完全な人格は、目を離しがたい危うさでガディスをひきつけている。

エドウィン・アーサーだけを罵るわけにはいかない。しょせんは同類だ。自らの甘えが招いたことでもあるのだ……。

「安請け合いして、俺が琅月界のしがらみ全部をかたづけてやるなんぞと言っちまった。その俺の動きようが、向こうにはさぞ期待外れだったんだろうさ。小僧をアスヴァルにかかわらせたのには俺にも責任がある。ケジメはつけねえとな」

前髪にからませた指の関節を額につよく押しつけ、ガディスはそう告白する。震えるほどきつく握られた彼の指を見つめると、あきらは短く次の問いを発した。

「どうやって？」

「あのガキが曲がった道に進もうとしてるんなら、首つかまえて引き戻してやるのが俺の落とし前のつけかたってものだ。違うか？」

「違わない。それでいいと思う」

真顔で答え、あきらは椅子から立ちあがる。

「あなたに信頼されるエクサールでいられなかったのはあきらの責任。〈還らざる者〉ガディスは、なにものにもとらわれないからこそ真実を見抜くことになってる。その正しさを自分で疑うようなことはいけない」

すべての人間が発する重力から自由でなければ……

あやまちを鋭く裁いてみせる瞳をもつものでなければ、炎使ガディスの名は相応しくないということだ。

「立ちなさい、炎使ガディス」

命を発したあきらのことを一瞬、意図をはかるように仰ぎ見て、それからガディスは顔つきを改めながらその長身をまっすぐにのばした。

カウンターの傍らで、ふたりのやりとりを水使ユーマは無言で見守っていた。彼の知っている来生あきらという人格から、ここにいるあきらはまるで別の人間になってしまったように見える。

だが、それはエクサール・ディシスのもっている嫋やかさ、線の細い優美さとは、あいいれぬ種類の言動に思えるのだ。そしてそれは勿論、エクサール・レアのもつ天真爛漫さ、朗らかな無邪気さのなかから出てくるような性質のものでもない。

もっと悲壮な、さらに剛いものだ。

「これはあなたが……」

立ちあがったガディスに対して、それまで大切に握りしめていた黄金の短刀をあきらは静かに差しだした。

「炎使ガディス、あなたが護るべきもの。あなたはすでに守人として司杖に選ばれている」

「俺が？」

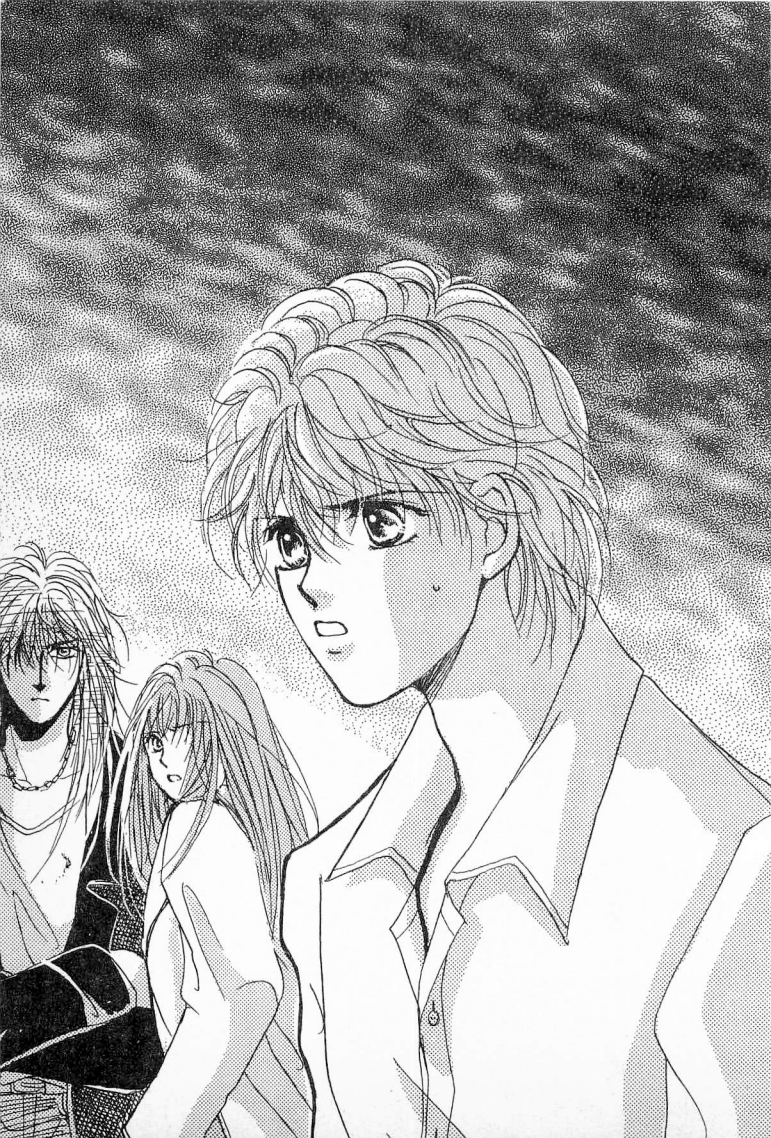
ガディスが反問する。あきらは頷いた。

「あなたはさだめられたガースの番人。果たしてもらわなければ、その役目を……」

「……」

彼女の掌の内で輝く司杖をじっと見おろして、数秒の間、ガディスは沈黙した。
かつて琅月界の最期においてこの同じガースを託されたときと、今度のあきらの依頼は意味あいが違う。
あらゆる敵からガースを守りぬくことは当然。そのうえで常に彼女の近くに在り、あきらの要請に応じていつでもそれを手渡せる立場にいることが求められる。
央界神殿はもはや失われ、司杖を管理する場はどこにもない。誰かが役目を負わねばならない……誰かが。
それはしかし、守護師団の首席ライアのものであっても不思議ではない。
「頼みます。ガディス」
重ねてあきらが言った。
ヴァーミリオンの両眼をガディスは一度とざし、再びひらいた。
「わかった……そいつは俺が預かる。俺の名前と生命にかけて、護る」
略式の言辞ではあったが、守護者の肩書きに恥じぬだけの真摯な誓いを口にすると、ガディスは馴染んだ司杖を彼女の手からうけとった。
ふっ、とあきらが自分の左手を見つめたのが、その直後だった。
左手の中指。輝く、銀の指輪。
「ディレイ・ザード……」

風使のために存在する使鍵の、象徴。
使い手以外には何も伝えぬはずのザードが、今……。
「！」
あきらは素早く水使ユーマのほうを見返る。
「みっちゃん、東側!?」
「少しだけ待ってくれ、ミンスがとらえて……」
青い髪を揺らし、ユーマは遥か彼方に耳をすますようにして、口をつぐむ。
街を埋めつくした夜霧による、探知の網が……その領域に踏みこむものを判別し、ユーマのなかへ膨大な量の情報を送りこんでくる。
だが、情報のすべてを確かめる必要は彼にはなかった。
ぞくりと背筋をかけのぼった悪寒に、思わず自分の左肩を右の掌でユーマは押さえつけていた。
これは——この痛みは——
この、深く残酷な傷口から鮮血を溢れさせているような、癒されぬ精神は。
『聞こえているか……水使ユーマ』
街の東端で。
流れゆく夜霧につつまれ、その意に従うことのない冷風に吹きつけられながら、彼はそう呼



びかけていた。

ユーマの視界が暗黒に染まった。絶望の闇だ。ああ、応えてやらなければ。他人とつながりあうことの苦手な、不器用な彼が……自ら水使ユーマを相手に選び、声を送ってきているのだ。

応えてやらなければ。

崩れおちそうな眩暈のなかで、声にならない声をユーマは発していた。

「イオ……!!」

それは、建設途中の多目的ビルを囲いこむ簡易フェンスの内側。

先日の騒動の影響がまだあるのか、施工業者の立ち入る気配はなく、点在する照明装置は電源を切られたままだ。

誰かの置き忘れた懐中電燈がスイッチの入った状態で地にころがり、真新しいコンクリート壁の表面に白色の円を描きだしている。閑散とした建設現場を浮きあがらせる光の源は、そのちっぽけな懐中電燈ひとつきりだった。

もっとも……感覚を磨きぬかれた戦闘者にとっては、その灯りひとつが真昼の陽光と同程度の意味をもつだろう。

特に、ほかでもない『光』を統べるものにとなら。

「アスヴァルの……」
感情のこもりきらない、空虚に響く低い声で、風使イオは用意された言葉を夜霧の果てへと届かせる。
光の円環から、わずかに逸れた薄闇のなかに佇み。
凍てつく冷気には不似合いな軽装で。
「……礼神官アスヴァルのもつ司杖の作用によって、ここから、炯月界と接する異空間への扉をひらく……そこで待つ」

異界への扉!?
喫茶店『海』の内部で、ユーマは間違いなく風使イオの声を聞きとった。
「向こうに有利なところまで、誘い入れるつもりかっ……」
前回のように街全体をまきこむ騒ぎを、礼神官アスヴァルは——あるいはその背後にある者が——望んでいないということだ。
だがその行き先が伏せられているのは、大きな問題だった。晶月界のように、こちらにとって馴染みのふかい場所ならともかく……。
「くだらねえ。アスヴァルに外からとじこめられて終わりだ」
ガディスが吐きすてる。

「そんなことはない。エクサールの仕事が界を操ることなら、こっちだけが不利ってことにはならない」

すかさずあきらが反論を口にした。ぎらりと殺気立った表情をよぎらせ、ガディスは厳しい声を放ち返した。

「違う!! 理屈合戦しようってんじゃねーんだ、俺は!! 確かに界を操作する力でいったらエクサールが最強だ、アスヴァルなんざただの門前の小僧ってやつだ、格が違いすぎる!! だがな、そんなことは向こうだって知ってんのさ!! そのうえで仕掛けてきてるってことには、意味があんのさ。あからさまに罠だってわかってるところに、エクサール・ディシスともあろうもんがのこのこ出向いて行ってもいいってことにはならねえ!!」

「イオが呼んだのは、ぼくだ。ぼくが行く」

ふたりの間に割って入るように、ユーマがふりむいてそう告げた。ガディスは舌打ちをする。

「やめとけ。行ってどうなる?」

「イオをあのままにしておけない……! 精神を破壊されかけてる!! あんな心のまま放っておいたら……!!」

本当に狂ってしまう。時をおかずに。

「今だったらまだ助けられるかもしれないんだ、何か——何か方法さえあれば!!」

「だからその方法もわかりもしねえうちに、てめえひとり突っこんでいって何になるかって訊いてるんだぜ、俺はな!!　そんなにあの軟弱野郎に仲間殺しをさせてやりたいってのか、ええ!?」

「ぼくはっ……!!」

昂った思いがユーマの言葉を半ばで途絶えさせた。碧色の双眸に溢れかかった涙を、頭をひとつ振って無理やり払い去り、毅然としたまなざしを持ちあげてガディスを見る。

「ぼくがイオを信じちゃいけないのか……!　イオだって誇り高い守護者だ、絶対に最後の砦までは売り渡さないはずだ!」

「もちろんてめえが奴に何を期待しようとてめえの勝手だ。だがな……」

顔をしかめ、ガディスは腕をのばしてユーマの襟元をひきつかんだ。

抑えた調子の声音で、ゆっくりと言い聞かせる。

「万が一、奴にてめえが殺されるようなことになってみろ。そのときこそ、あいつは自分を狂わせる。取り返しはつかなくなる。風使イオはそういう奴だ。少なくとも、奴がまだ誇り高いライエスなら、だ」

「……!」

ユーマは茫然と言葉を失ってしまう。やや自己嫌悪を感じながらガディスは彼から腕をはなした。この手の役回りは性にあわないのだ。制止をかけられるのならともかく、かける側にま

わらねばならないとは……。

そもそも最大の元凶は光使ライアがここにいないことであって――。

はっ、とガディスが息を呑んだのが、その次の瞬間だった。

すべりこむように現れた存在が、そのときになってはじめて使鍵ローザの波動を震わせたのだ。

炎を統べるディレイ・ローザが……とらえるのは。

響きあう関係の。

「野郎っ……！」

ガディスはいまいましさに満ちた叫びを漏らしている。そしてガディスと同じ認識を、霧に託した探知の網によってユーマもつかみとっていた。

水使ユーマへ声を送った、直後のことだった。

「……」

一瞬、吹きぬける風の音を聴くように遠い瞳をすると、やがて彼はゆらりと面をあげた。首をめぐらせる必要さえもなかった。

対峙する位置に。すぐ、目前に――

イオの記憶に深くきざまれた、黄金の髪と琥珀の瞳をもつものの姿が、今、その身を現実の

なかへとあらわしていた。
巨大すぎる憂いは、苦しみの領域をつきぬけ、かすかな笑みさえをもイオの唇に浮かべさせる。ひどく穏やかに、彼はその盟友の名を呼んだ。
「……ライア」

II

「あのくそど阿呆がっ!!」
ガディスは手近の壁に握り拳をたたきつけ、怒りの言葉を吐きだした。どうするつもりだ……いったいどうできるつもりだというのだ、今さらになって？
風使の魂を癒すすべなど……
彼が生きるための指針、風使イオの愛するエクサールが失われたときに、すべて終わっている。
「どうしようもありはしねーんだ、ライア……!! 余計なこと考えてんじゃねえ、戻ってこい!!」
前触れなど与えられはしなかった。光使ライアがそれまでどこに身を置いていたのかも、ど

のようにこの場所をとらえたのかも、いずれにせよイオにとってはさしたる問題ではなかった。

イオとむかいあうライアの手中に、武器にあたるものは見出されない。

ただ、その身にまとわれた不可視の空気……ゆずられぬ強靱な意図は、戦いに臨む守護者のものだ。深い静謐のなかからも、慣れ親しんだイオの瞳がそれを読みとることはたやすいことだった。

待ちのぞんでいたものかもしれない。

それこそが。

「礼神官アスヴァルに、ひとつだけ——感謝しよう」

ぽつりと、ライアが口をひらいた。

「もう一度おまえに会えたことを」

望むべくもなかったことだ。再会など。風使イオが、晶月界を眠りの地に選んだそのときには。

「それは違う……ライア」

イオは静かにかぶりを振る。

「……おまえは……俺を、殺していくべきだった。あのときに」

生きる意味を奪うだけでなく。

容赦のない、真の決別をつきつけるべきだったのだ。ライエノーツの首席であるならば。
光使ライアは無言のまま、わずかに琥珀色の両眼を細める。ひとつの理屈においては、イオの言葉は正しい。だが……
安寧に惹かれる心に、どれほどの真実が見えているだろう。
死は、永劫の別離。その本当の意味が。
「あきらを悲しませることになる」
短く、そんな返答を与える。今度は、イオが沈黙に支配される番だった。
胸の内側にいくつもの言葉をしまいこんだような、万感に引き裂かれるような沈黙に。
「……イオ、おまえを動かすものは……」
もっとも重要な問いを、つづけてライアは彼へと投げかけた。
「憎しみなのか。望むものは俺の生命なのか」
「違う」
迷いすら見せずに、イオは一言でそれを否定する。
「違う……俺が望むものは……」
不意に襲いかかった激しい痛みが、イオの言葉を一度とぎれさせた。じりじりとやけつく胸元を右の掌でおさえつけ、苦しげな呼吸の下から彼は声をひきずりだした。
「……俺の望みは、ただひとつ……」

胸郭すべてが苦痛の悲鳴をあげつづけている。
まるで濃厚な酸を飲みくだしたようだ。灼ける。侵蝕される。溶かされ、蒸発していってしまう……。
のこるのは心臓をかたどった空洞だけだ。
イオは瞳をとざす。現在はその一瞬の闇だけが救いになる。
そうだ、望むものはひとつきり。
「安息を……」
「……」
ライアの貌に鋭い表情がふとよぎった。ざわりと、はりつめた冷気がその黄金の髪を揺るがし、互いの間を流れ去った。
守護師団の一員としての、今のイオの答えは特殊な意味をもつ。
それは以前に炎使ガディスが挑発の意味でイオに仕掛けた論法と、まったく同質のものだ。
「すべてからの解放か……」
ゆっくりと、ライアは確認を試みる。
「なにもかもを終わらせる……それが望みか」
「そうだ」
イオが頷いた。

「他には……もう、眠りにつくすべが……ない」

ない、という強迫観念が、礼神官アスヴァルのほどこした操作の結果なのか。

風使イオはどこまでも誠実に、己を律しつづける守護者なのだ。そしてどれほどの苦しみが彼をさいなもうと、守護師団の一員に自害はゆるされない。――同じ世に、エクサールの乙女が存在するかぎり。

「……わかった」

呟きとともに、ライアは自らの右腕をもちあげた。

その額に姿を浮きあがらせてくる銀の頭環を、素早くひきぬく。瞬時に環のかたちは失われ、すらりとのびる長剣が彼の掌のうちに現れた。ディレイ・ルナクの化身である。

剣の輝きを目に止めたイオに、しかし動じる気配はまるでなかった。むしろ相手のことを気遣うように、彼は沈痛な顔をあげるとライアにむけて語りかけた。

「ライア、おまえに俺を妨げることはできない。おまえも忘れてはいないだろう――俺の名を」

光使に授けられた〈守護者〉ライアの名が、その背後にひそかな〈裏切者〉の暗示を秘めているように。

〈姿なき者〉イオの名に付随する、もうひとつの意味は……

暗殺者。

たとえ使鍵を手放していようと、素手ひとつによっても彼は充分な殺戮者になり得るのだ。
「どこからでも、俺が標的を逃すことはない……。とどめられると思うなら追ってくればいい」
ざ、とイオの足元で砂利が鳴った。
ライアとむかいあう位置から方向を転じ、おちついた足取りでイオはコンクリートの壁へと歩みを進めた。懐中電燈の光に白々と照らしだされた壁面の、間近まで。
その動きを見守ったライアが、やがてかすかに瞳を見開いた。
壁の寸前で、するりとイオの姿は異空間のなかへ溶けこんだ。
そこが入口に——ひらかれた扉になっているのか。
「ガディス」
低く、空中にむけてライアは声を発した。対をなす使鍵のはたらきが、炎使ガディスへその声を届けるだろう。
「先に行く。あきらを護ってくれ」

「おい!! ちょっと待ちやがれ、この……裏切者がっ!!」
喫茶店『海』の店内でガディスは思いきり咆哮していた。お約束の独断専行ときたものだ。
こちらの都合も思惑もおかまいなしで。

「とりあえず……ありがたいといえばありがたいよ」
乾ききった声で、力ない呟きをユーマはこぼした。とにかく、状況はもう動きだしてしまっているのだ。
「ライアが自分勝手に先行するのはいつものことだからね。そうでなかったら、かえってぼくらのほうの調子がおかしくなる」
「そいつは呑気なことでたいへん結構だぜ、誰が貧乏クジひいてんのか考えなければな！」
いらいらとガディスは錆色の赤毛を掌でかきまわした。どうしてこう、たてつづけに不本意な役回りばかりがめぐってくるのか。
「ガディス！　えーちゃんが行く前に伝えて、あきらが追っかけていくからって！」
唐突に、あきらの一言が背後からガディスの耳を直撃した。かっと頭に血をのぼらせてガディスはかみつくようにそちらをふりむいた。
「俺がさっきから……!!」
「だから訊いて。それでもいいのかって」
怒鳴りつけるガディスの声を厳しく遮り、あきらがさらに言いつのった。ガディスは喉元で科白をつまらせるかたちになる。
「ちっ」
結局、舌打ちと同時に彼は腕をのばしてあきらの片手をとった。

「面倒だ、俺が中継する。話したいことはそっちで話してくれ」

炎使の使鍵ローザを介して直接すべりこんでくるエクサールの声に、光使ライアは異界への『扉』にむかう足を止め、夜闇のなかを仰ぎ見た。

尋ねる、あきらの声。

……追ってもいいのか、と。

いや、もう気持ちは決まっているのだ。現在の風使イオの精神を覗き得たならば、彼女がそれを黙視していられるはずがない。そのような、慈愛と行動力をかねそなえた乙女であれと教育したのは自分たちだ。四年の歳月をかけて。

だが、本当に問われているのは事の是非ではない。少なくとも、ライア自身の意識のなかでは、その問いかけは別の意味あいを有していた。

「俺の覚悟を聞きたいのか、あきら」

謎めいた反問を、ライアは口にする。

「何を手にして、何を失うかという話だ。全部を得ることはできないと……いつでも、天秤の間でゆれうごくだけだ。けれど、俺はエゴイストだからね……」

ひどく観念的な独白ののちに、彼は一瞬、琥珀の双眸をとざした。

それは祈り。

既に失われた存在への。
そして再び前途を見据えたとき、光使ライアはさらなる賭けを選びとっている。
いっそう危険な、欲深い手札、だ。
「……あきら、イオを追うんだ。あの魂を救えるのはあきらだけだ。ただし……決してひとりで走ってはだめだ。何があってもガディスとユーマの傍から離れるな。いいね？」

III

「本当だ、君の言ったとおりになったね」
部屋じゅうを埋めているパソコンラックのうちの一台にむかいあい、キーボードをおしのけたデスクに頬杖をつきながら、穏やかな調子でその青年は呟いた。
二十九歳も終わり間際、という微妙な年齢にある男性を『青年』と表現してもさしつかえなければ、だが。
八畳程度の、どこにでもあるマンションの一室に各種のコンピュータをごっそりととりそろえ、その中央でマシンの作動音に身をひたしている彼は、血統的にはごく純粋な日本人である。しかしその容姿には、全体に色素というものが不足している印象があった。褪せた茶色の前髪に、蠟のような白い膚。歳相応に見られない童顔だけがアジア的に生まれついているのだ

と、本人は自慢と諦めを半々にとりまぜた言い方をする。
「ライエノーツ全員にあちらの世界に行かれてしまうと、ぼくらからは動向を読めなくなるな……ここまできたら、放っといてもいいものかな」
椅子の背もたれに体重をかけて、後方にいる少女に彼は問いかける。
ちょうど彼の視線のあたる先には、見事な夜景をみおろす大きな窓がある。
特に、その景観のかたすみに浮かぶトウキョウ・タワーは、彼がここに居をかまえた理由のほとんどを占めている。いかにもこの都市の中枢部にいる、というミーハーな錯覚があって——もちろん錯覚は自覚的に楽しまねばならない——それが心地好いのだ。
「まだクリストファー・ローディン・ジュニアの出方がわからないのよ」
冷静な、おとなびた少女の声が返った。
「手を放すには早いかもしれないわ」
十七歳くらい、だろうか。
革製のミニスカートの腰を窓枠に預けるようにして、両腕をくみあわせている。
肩まで長くのばした髪の色は、濃い褐色。
「デューン。あそこから、クリストファーの影響力を断つにはどうしたらいいのかしら」
「ぼくだったら迷わずにエドウィン・アーサーの足元をつくけどね」
ふわりと人の悪い笑みをのぞかせ、デューンと呼ばれた青年は簡単に答えてみせる。

「残念ながら、光使ライアが『カンナギ』につながるルートをつかむことは不可能だ。不可能であることにぼくが加担するわけにもいかないな……。どう折り合いをつけるつもりなのかな、彼は」

「でも彼に何の手も打てなかったとは思えないわ。そのための時間もあったはずだもの」

「逆のほうから見れば、あの状況で手を打っていたのは多分ライアだけだってことは考えられるね」

「とにかくクリストファーは止めなくちゃいけないのよ」

厳しい面持ちで、断定的な一言を少女は発した。

真夜中の大都会――闇のなか、粉々になった宝石のようにひろがる光彩を、背後にしたがえて。

「ふむ……じゃあ、クリストファーの周辺をざっと洗ってみようか」

青年は肩をすくめ、彼のメイン・コンピュータにつながる操作器（マウス）をデスクの上に軽くすべらせた。

アクセス・キーワード――DUNE（デューン）。

巨大なネットワークのなかへ潜航していく。

『あのさあ一砂（カズサ）、こんな面倒なことしないでクリストファー・ローディン・ジュニアがいるホテルの電気系統をブレイク・ダウンさせちゃおうよ。それが早いよ』

マシンの内側から、舌足らずな子供の思念が浮きあがって青年の脳へと届く。
『だめだめ。一発でこっちがつかまっちゃうさ』
『ちぇえぇーっ』
『君子危うきに近寄らずっていうんだよ。お利口さんはおいしいところだけを取るってことだ、一砂みたいにね』
父親らしい、包容力にあふれた態度で彼はその子にしっかりと言い聞かせると、調査続行の命令を与えておいて自分はそこからひきかえした。
「うちのアキラは喧嘩っぱやくて躾が大変だよ。名前のせいかな」
「デューンからの遺伝じゃなかったの？」
「こんなにひよわなぼくが血気に溢れていたって、それでどうなるっていうんだい？」
皮肉っぽく笑って、彼――篠崎一砂は、窓際の少女に反問する。
「だからじゃない？　願望の産物」
「平気な顔で酷いことを言う子だな、君も」
「それは、きっと他人事じゃないからね」
くみあわせた両腕に力をこめて、彼女は瞑い窓の外を眺めやった。
「なるほど。いちばん血気にはやりがちなのは君のほうだからね。忘れてたよ」
これはしたり、と一砂は冗談めかしてひとりごちたが、色の薄い両眼は笑っていない。

「わかってはいるだろうが、君が動くのだけは勘弁してもらわないとね」
「わかってるわ」
「大丈夫、絶対にうまくいくさ。ぼくがかかわっている以上はだ……」
いたずらっぽく、彼女にむけて彼はあざやかなウィンクを投げてよこした。
「うまくいかせるのがぼくの才能だよ。違うかい、彰？」
「……そうね」
両腕で自分の身体を抱くようにしながら、その少女ははりつめた表情をわずかにゆるめて呟く。
ある人物に、ひどく似ている——微笑とともに。
「知っているわ、デューン」

IV

こうなってしまうと、正論をならべているほうが馬鹿馬鹿しいというのが炎使ガディスのたどりついた境地だった。
「わかったから乗れ!!　さっさと!!」
喫茶店『海』を出たところで発見した四百ccの単車をこれ幸いと私物化し、遠慮もせずに

あきらを怒鳴りつける。

誰の所有物かなど知ったことではない。キーがなくてもエンジンは動かせる。ディレイ・ローザにつまらない仕事をさせれば、だ。

「！」

余計なことは尋ねずに、あきらは動物的な素早さでその後部の荷台にとびのっている。なかばヤケになっている炎使の気分にこたえるように、カワサキのマーキングが入ったバイクはあらあらしいエンジンの唸りとともに車体を震わせた。

「バイク泥棒には一応目をつぶるけど、ガディス！　誰を乗せてるのかくらい考えて走ってくれよ！　言っとくけどこっちの国での決まりは左側通行だからね！」

たいへん現実的な忠告を投げかけながら、彼らのカワサキより一足先にユーマは目的地めがけ自力でダッシュしていく。

「そうかい、そいつはありがとよ」

実際、道のどちらがわを通行するべきかなどガディスの頭にはちらりとも浮かんではいなかったのだ。どっと勢いにまかせて車体を一気にスタートさせると、すさまじい速度で彼は夜道を突っ走りはじめた。

「ガディス！」

吹きぬける強風にさからって、あきらが声をはりあげた。

「いちばん正しいのは本当はあなただってわかってる。ごめんなさい」
「俺は自分が良識家だなんて思っちゃいねーんだがな……」
苦々しくガディスは呟く。
「つまりは、俺はしょせんライエノーツの首席になりはしねえし、なれと言われてもまっぴら御免だってことさ」
風使イオをきれいに粛正して、それで終わりにできる組織なら……
まだ楽だっただろうか？　ガディスは無言で自分自身に問いかける。
問題は、そこが要するに、自分にとって居心地のいいものであったかどうか、だ……。
表通りに車が少ないのをいいことに、ガディスは交差点の赤信号をかるがると突破した。
「後ろよく見といてくれよ、このへん警官だけはちょいと多くなってるからな!!」
「わ……かった！」
急なカーブで舌をかみそうになりながらあきらが答える。
妙な気分だ。ガディスは眉をしかめる。もともとエクサール・ディシスに対してどんな口を利いていたのか、いきなり思いだせなくなっているような。
「記憶は……」
「え？」
「昔の記憶はひとつもねえのか。どんなちっぽけなことでも、まるっきり？」

炎使ガディスの意図をはかるように、あきらはその背中を一瞬見あげた。
「……少しでもそんなものあったら、きっといろんなことがもっとうまくいってる。でも……あきらにはあきらの記憶しかない」
「いや……今更そいつを責めようって気はないんだがな、つまり……」
ガディスは自分の歯切れの悪い口ごもり方に、自分で苛立つ。何がひっかかるのだろう。
ここにいるのは誰だ？
そして自分は？
「逆なのさ。記憶をもっている俺たちのほうが、昔よりもずっと変わっていってる。記憶が断ちきられてるってことは、ディシスが昔のまま完全に保たれてるってことだ……」
来生あきらを、あくまで来生あきらとして考えれば。
「どういう意味？」
「さあな」
まともに答えずにおいて、ガディスは前輪の向きをぐいと傾けた。工事現場のフェンスの手前に大きくまわりこんで激しいスピードを殺し、車体は入口でぴたりと停止する。
とりあえず、アスヴァルの妄想に拍車をかける材料にはなるだろう。ディシスは決してアスヴァルを裏切りはしない。彼女の愛がうすれることはない。
凍結された感情は——変わらないものは、永久に滅ぶこともない。

だが……。

「でも昔の記憶とは別に、炎使ガディスのことはあきらも知っていた気がする」

あきらがぽつりと言った。ガディスは反射的に、不機嫌な表情をつくってふりむいている。

「おい、その手の慰めは要らないぜ……俺には」

「慰めじゃない。きっと、四人そろわないのが不自然だっただけだ。あの三人に誰かが足りないのは……えーちゃんたちがずっと誰かを待ってるのは、あきらもどこかで知ってたと思う。そういうこと」

「……」

ガディスがふと短く沈黙した。

ざっ、と地表にまかれた砂利を鳴らして身軽な影が間近に降りたったのが、そのときだった。ユーマだ。

「早いな」

「まあ、町内の抜け道ならカンペキだからね」

無駄口をたたこうとはせずにユーマはフェンスの内側を指し示す。

「界の扉ってやつがわかった。こっちの奥だ」

「上出来だ」

無断借用のバイクをそのまま放りだしておいて、ガディスはまっすぐ問題の壁へと足を向け

た。

それにつづいていくあきらのことをユーマは気遣わしげに見やったが、結局、そこでは何も彼女に告げはしなかった。

「こいつか」

時空が切り換えられる狭間の前に立ち、複雑な顔つきでガディスはひとりごちる。

何の変哲もないコンクリート壁の寸前に口をひらいた、ゆらぎの扉。

「ちっ……」

「ガディス？　怖いのか、もしかして？」

舌打ちをこぼすガディスに、背後からユーマがそんなことを尋ねた。ぎりっとガディスは奥歯を軋らせた。

「ったりめーだろ、俺は本当にイヤなんだ、行き先不明の地獄のカマに身投げするような真似はな!!」

「……ガディスを待ってるかもしれない」

あきらが隣で呟く。あん？　と不愉快なままガディスはそれを聞きとがめた。

「これを用意した誰かが。ガディスと話をするのを、待ってる。この内側で」

「……」

あの小僧か。

反問はせずに彼は唇をひきしめる。

向こうに、まだそのくらいの意志があるなら……最悪の結果は免れるか。ともかく。

期待しすぎてはいけないこともガディスはしっかり承知していたが、その先へ一歩を踏みだすことにあえてためらいはしなかった。

「よし、まとめて行くぜ。絶対に俺を離れるんじゃねえ。わかってるな?」

念を押しておいて——

境界の平面を、のりこえる。途端に、あてどなく深い地中に落下していく錯覚が彼らを襲った。

それが正しくは落下なのか上昇なのか、実際には判別がつかない。ただ……

遠く、遠く進んでゆく。断絶の奥へ。

第五章　叛罪の空域

I

ヴン……と上空で空気が鳴り響いたようだった。
電気的な雑音（ノイズ）に似た、振動。
はっとあきらは頭上をふりあおいだ。鈍い灰色が目に入った。鉛のような……。
そこに空はなかった。
閉じた、巨大な蓋（ふた）が天に覆（おお）いかぶさっている。
まわりを見渡してみる。何層にも重なった壁が視界のあちこちを遮（さえぎ）った。壁？　ゆらゆら揺れるそれは不透明な被膜のようにも見える。
全体に、ここには光が足りない。明るさがない。すべてがしらっとしたグレイ。モノクロームのフィルムのなか。
この界はもう生きていない……。直感が、あきらにそう知らせた。生命を内包していない、

古い昔に滅びた世界の残骸だ。
　足元に手をのばして地表に触れると、はかなげな弾力が感じられた。手触りは繊維のものに近い。うっかり強く押さえるとそのまま突き破ってしまいそうな、耐久性に欠ける地面だ。気をつけないと。
「……あきら！」
　数メートルの先から、声が届いた。
　味気のないグレイの世界に、あざやかな青――ウルトラマリンの色彩がよぎる。脆い足元に気をつかいながら、水使ユーマが走りよってくるところだった。
「ちょっと焦ったよ、まったく、いきなりのっけからはぐれてたらシャレにならないからね」
「だけどさ、みっちゃん……のっけからはぐれてる人もひとりくらいいない？」
「……本当だ」
　周囲をざっと見てとり、ユーマは厳しく顔をしかめた。
「でもすごく狭い界だ、ここは。むしろ離れ離れになるほうが難しいくらいだよ。多分、ガディスだってそのへんにのびてるかころがってるかするはずだ」
「だーれが伸びたり転がったりするかっ、ど阿呆がっ!!」
　ユーマの科白にかぶさるように、あらあらしい怒鳴り声が彼方から割りこんだ。当人の登場はないままで。

すかさずユーマはもう一度視線をあたりに走らせるが、あのよく目立つ炎使（ほのおつかい）の姿はどこにも見当たらなかった。

ふと、あきらは大気にひそむ震えの気配に耳をすませる。

ヴン、と帯電するノイズ。

世界全体がぐわりと鳴動した。

「！」

足元を不意にすくわれそうになったあきらの腕を、危ういタイミングでユーマがつかんだ。

「壁がっ……！」

あきらが叫ぶ。顔をあげたユーマは、まわりじゅうに突きたつ薄い壁の群れが、がたがたと位置を入れ替えるのを見た。

「こっちに来る!?」

かなり遠くにあったはずの壁が一枚、信じがたい勢いでこちらに迫ってくる。どういう仕組みになっているのか、その壁を支える地面自体が高速で動いているのだ。

「みっちゃん、あれも！」

反対側をあきらが指差した。

くっと息をためて、あきらを片腕に抱えたままユーマはふたつの壁の軌道上から素早く跳躍した。

がつん、と二枚の壁はその直後に正面から衝突して、そのままあわせて一枚の壁になってしまった。まるで、はじめからそうなることが定まっていたように。

はさまっていたら、ぺしゃんこどころではなかった気がする。

間近に眺めると壁の横幅が十メートル以上はあることがわかった。悪趣味だな、とユーマはげんなりして呟いた。

「こんな余力がこの界にあるってのは意外だけど……」

いやな顔をしながら、今の跳躍の勢いでずぶりとつっこんでしまった脚を地面からひきぬく。ユーマの片足のせいで地表に裂けた穴は、それきり修復されるわけでもなく、不気味に口をひらきつづけている。

穴の奥に垣間見えるものは、真の闇。

虚無の黒……か。

「界の力、じゃないかもしれないぜ」

突然、すぐそこから炎使ガディスの不機嫌な声が届いた。

あきらと顔を見あわせ、それからユーマは融合した二枚の壁の向こう側を覗きやった。

「よお」

悠然と壁によりかかって座った姿勢で、ガディスが右手をひらりと振ってみせた。
「ずいぶん優雅なところにいるもんだね」
「まあな」
自分の足で歩かなくても勝手に移動してくれるときたものだ。
「地獄耳だな。あんな遠くにいてぼくらの話につっこむ元気があるとはね」
「誰がガースを持ってるのか忘れちゃいねえだろうな、てめえは？」
ガディスはふてぶてしい調子で問いかえす。司杖の光に助けを得て、それだけ使鍵の感度も増しているのだ。
が、憎まれ口を返そうとして、ユーマはふと顔つきを鋭くひきしめた。
「――ガディス！　背中をやられてるのか、誰から攻撃をうけたんだ!?」
「さあな。まだここに名乗りでてきやがらない坊主さ、多分な」
行儀悪く座りこんだ姿勢は崩さずに、ガディスはふくみのある答えかたをする。その肩の裏側を染める朱の色は、彼の赤毛をうつした影ではないのだ。
「心配はしなくていいぜ。俺はガースの守人だ、どんなに決定的な怪我をしたって死ねやしないことになってる。ほっとけばこいつも勝手に治る」
「それにしたって……」
壁沿いにしゃがみこみ、素早く彼の傷を見てとってユーマはひどく眉をひそめた。

背骨を砕かれているのか!?

よく平気で喋っていられる……。

「これがイオの仕業じゃないなら、別の誰かもここに来ているってことになるのか?」

「そいつは決めつけられない。さっき言ったのはそのことだ。この界はどう見たって用済みの泡屑だ、界自体の力なんぞろくにねえはずだ。それが動くってことは……」

「外側から、誰かがここを操作している?」

とぎれたガディスの言葉をひきとって、あきらがそう確認した。

「だろうな」

ガディスは口元をゆがめ、短く同意する。

ゲーム盤のなかの出来事に手をくだす、超越者の存在か。

まるで神のように。

そしてファイアマスター・ガディスが——司杖を持っているかぎり——不死身であることを、あの少年は知っている。

「俺を殺そうとしたにしては詰めが甘すぎるぜ。つまりは俺の足をここで止めたいってことだろう。違うか、小僧?」

背筋から腰までをつらぬいた甚大な痛みのことはわざと認識の外に放りだした状態で、炎使ガディスはどこへともなく、そんな質問をなげかけた。

と――。

「うん、そういうことだよね。ウォークマンって土壇場で頭の回転が早いから好きだよ」

ふっ……と、灰色の世界に、宝玉の輝きがさしこんだかに見えたのが、そのときだった。

ガディスは無言で両眼を細める。曇りのない、上質なプラチナブロンドの光に眩しさを覚えたのだ。

動かない身を壁にもたせかける炎使ガディスの――いや、ソニー・ウォークマン・エクセルの前に姿を顕し、天使の愛らしさを有する独裁者は心配そうに首をかしげてみせた。

クリストファー・ローディン・ジュニア。

すべてを掌の上におさめる少年が。

「大丈夫？　ごめんね、痛いめに遭わせちゃって。ウォークマンを本気で足止めしようと思うとどうしても手荒な方法になっちゃうんだよね」

それに対して、ガディスはごくあっさりとした科白を返しただけだった。

嘘偽りのない、正直な気分での感想だ。

「まあな。へたな手抜きをされるよりはずっとマシってやつさ」

II

深傷を負ったガディスの隣に跪いたまま、クリストファー・ローディン・ジュニアと初めて相対した水使ユーマはしばらくの間、愕然と瞳を見開いていることしかできなかった。

これが風使イオを非道な謀略のうちに巻きこんだ元凶なのか……この邪気のかけらもない、ごく普通の少年が？

予測したものからはあまりに外れすぎる。

しかし、それがたとえどんな相手であろうと――

「そうか、おまえが……」

罪が消えることはない。贖われることはない！

イオを狂わせたことへの。

免罪は、どこにも。

「よくもっ……!!　よくも平気な顔でっ!!」

厳しい咎めの声を叩きつけたユーマに、クリストファーはまるで旧知の間柄のように遠慮のない笑みを向けた。

「こんな時でもけっこう冷静な人だね、ハイドロマスター・ユーマ。ぼくをここで攻撃したってどうにもならないよ。べつに、どうしてもって思うんだったら止めはしないけど、そのぶんの力が無駄になっちゃうだけだよ」

「いったいどういう……」

本能的な忌避感が、その一瞬だけでユーマの内面にはつよくわきあがった。
故郷をはなれ、なにもかもが違う異世界にたどりついてからも、こんなに凄まじく理解を拒むものに出会ったことはない。
何だ、ここにいるものは？
「どういう神経でいたらぼくらの前に平気で現れられるっていうんだ、ぼくらにとってどんなに酷いことを仕掛けたかわかっていないとでも言うのか!?」
「この小僧にそんなことわかれってほうが無理な話だ。理屈の通らない世界に生きていやがるからな」
傍らから、ガディスが低い呟きを割りこませた。
「それに攻撃しても無駄だってのは当たってる。ここにいるのは本人じゃねえ」
実体のない虚像――精神だけの存在だ。
「うん、まあそういうことなんだけど。でもね、ハイドロマスターもウォークマンもあんまり挑発的なこと言わないでくれる？　ぼくはいいけどエドウィンがまた怒っちゃうよ」
クリストファーはきまじめな面持ちでちらりと天を眺める。彼には彼なりに、その信奉者の憤激をなだめてやるという作業があるのだった。
「そんなにのんびりはしてられないんだ、ウィンドマスターが来る前にすまさないとね」
両腕を背中のほうで組みあわせ、クリストファーは真顔のままガディスのほうに向きなおっ

た。
「大体、ぼくみたいに舞台をセッティングする立場の人間が『現場』に出てくるのも変な話だし」
「やめといたほうがいいな、その考えは。てめえみたいな小僧が裏方を名乗るっていうほうが変な話だぜ」
「そうなの？　でもぼくは本当に黒幕なんだよ」
ガディスの指摘がひどく意外に聞こえたように、クリストファーは少しきょとんとしながらそう答える。
「喧嘩はちゃんと決まった試合場で、他人に迷惑をかけないようにやってくれたらいいってことだよ。ぼくはそれを用意してあげてるつもりなんだけど」
「だったらなんでアスヴァルと手を組む？　少なくともその時点で、てめえはただの審判役からは踏みだしちまってる」
「ぼくって奏太と『手を組んで』るの？」
ますます意外そうにクリストファーが問い返した。
ガディスは眉をひそめる。根本的なズレが、どうやらこのへんにありそうだった。
「どこが違う？　小僧のやったことはアスヴァルへの完璧なバックアップだ」
「……ふうん」

曖昧な表情でクリストファーは口元に掌をあてる。

「まあ、いいや。今は別に。そう思いたかったら、それでも話はつながるし……」

釈然とはしていないようすでひとりごちる。だがそんな言葉を口にしていながらも、彼はガディスの断定にやや傷ついているようにも見えた。何がクリストファーのなかで問題になっているのか、そのときガディスには想像すらできなかったが。

「それはそれとして、ぼくはウォークマンにはチャンスをあげようと思ったんだけど」

まだどこかうわのそらの口調で、クリストファーはぽつりと切りだした。

「なんだっけ、エドウィン？　……あ、そうか……だからウォークマンには裏方に戻ってくる権利があるって話を、しようとしてたんだけど」

だが、そこから先を彼はつづけない。

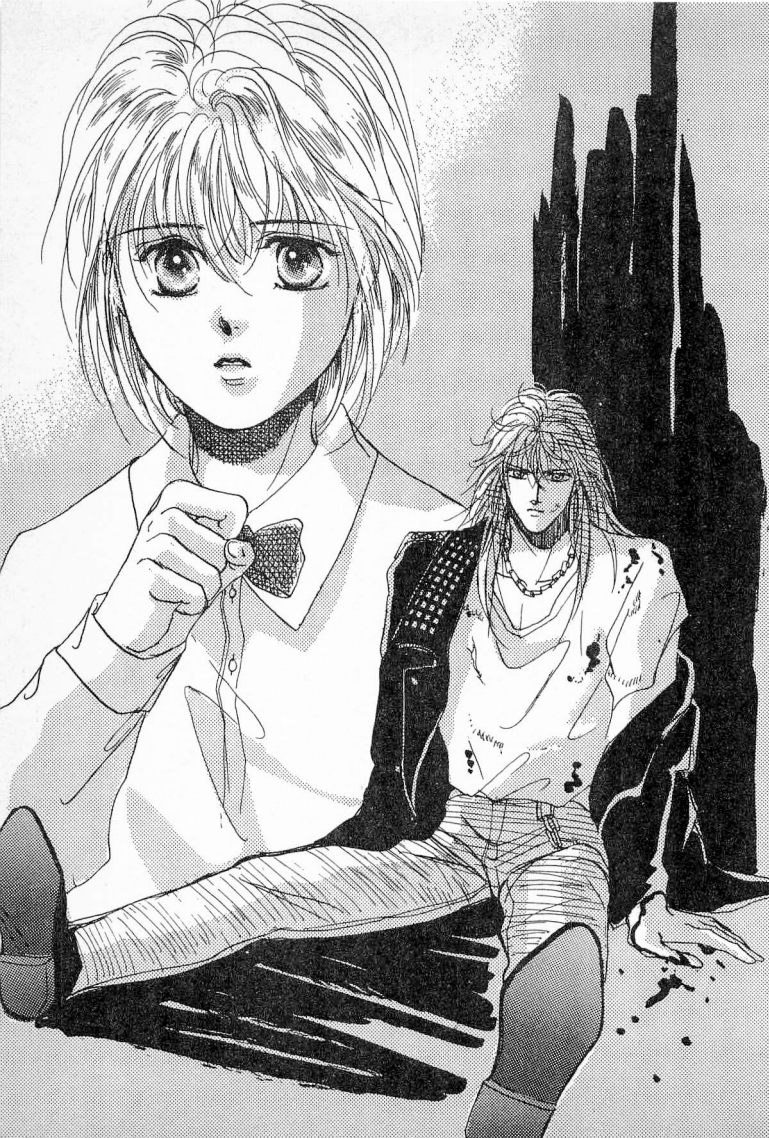
ソニー・W・エクセルが、何か奇妙な——用意されていたのとは違う意識をその胸の内側にかかえていることを、クリストファーは素早く感じとっているのだ。

怒り、でも、抵抗、でもなく。

後悔でも困惑でも欺瞞でも譲歩でも逃避でもないもの。

頭をさげて許しを乞う弱さも、頑な愚かさも、どちらもそぐわない。ためらいも、後ろめたさもそこにはない。

拒絶とも受容とも呼べない感情。



「どうしたの?」

クリストファーが不意に尋ねた。エメラルドの瞳を翳らせて。

「なんだかすごく変な気分になってるよガディス……今すぐ死ぬ人の心のなかを視てるみたいだよ?」

「なるほどな、おもしろい譬えをしやがる」

ガディスは唇をゆがめて苦笑する。

死にゆく者の精神などいくらでも覗いてきたはずの少年が言うのだ。だとしたら死に際の人間というやつは、ずいぶんと天晴れな境地に至っていることになる。

「だけど俺は別に、一秒後の破滅に頭からつっこもうとしてるわけじゃないぜ。俺がてめえに答えてやろうと思ったのは、こういうことだ」

のっそりとガディスは、投げだしていた脚を我が身のほうへ近づける。肩甲骨の間をみごとに狙い撃った深い傷からは、まだ鮮血が溢れつづけている。

ひきよせた一方の脚に力をこめて、ガディスは無理やり身体を壁際から起こした。

何をする気かとユーマが制止の言葉を喉元まで出しかける。だが、結局その声はとどめられざるをえなかった。

背骨を損傷した状態の人間がこんな風に動けるはずがないのだ……普通は。そこに意味があるとでも考えなければとてもついていけない。甘すぎるのか、自分は?

そしてガディスは少年の背丈にあわせた高さまで頭を持ちあげてみせた。片膝を地面につき、もう片方の膝に支えの腕を置いて。

「どうだ、小僧？　俺は〈前に進む奴（ウォークマン）〉で、そのうえ〈還らざる者（ガディス）〉だ。いくら本気で俺の動きを止めようったって無駄さ。てめえの予想なんざ俺には役に立たない。そんな気がしてこねえか？」

「ただ無茶な人だってことかな？」

クリストファーは首をかしげる。からかっているのではなく、この少年は至極（しごく）まじめなのだ。

それも嘘ではないだろう……とガディスは思わず笑ってしまう。つくづく退屈させない小僧だ。つきぬけすぎていて。

だから終わっている。人間としての、ごく自然な成長や、感情の深まりは。優しさのなかで培（つちか）われていくべきものは。

たとえば——かけがえのない、愛情のようなものは。

「おまえは良い子だ、心の中に闇ってものがかけらもありはしないからな。だが俺はおまえの腰巾着（こしぎんちゃく）と同じ道を選ぼうとは思わない」

ここにいる少年が幻像ではなく生身の存在であったなら、ガディスはその華奢（きゃしゃ）な姿を抱きしめてやっていたかもしれない。

「クリストファー、今から俺がおまえの敵だ。おまえのまわりにはうるさい蠅どもと、おまえの味方しかいない。だから俺がおまえにとっての最初の敵になる。どういう意味かわかるな？おまえたちの計画は俺が叩きつぶしてやるってことさ」

一瞬、クリストファーは眉をひそめたようだった。

通じない、異国の言葉を聞かされたように。

あきらかに彼の所有する語彙からはずれたものを、つきつけられたように。

「これまでの雑魚どもを追い払うのとはわけが違うぜ」

静かに、忍耐づよく教えさとす姿勢でガディスはそう念を押した。

そうだ……すべて遊戯と割りきるのなら、エドウィン・アーサー、あの男のほうが先に気づかねばならなかったのだ。

どんなゲームにも、難攻不落の強敵が必要であることを。

「真剣勝負だ。正面から戦え。いいな？」

「クリストファー様？」

豪奢なインペリアル・スイートのリビングルームで、エドウィン・アーサーは不吉な違和感に気づいていた。

クリストファー・ローディン・ジュニアは別世界へと思念を跳ばした状態で大きなソファの

上にぽつんと座っている。

馬鹿げた話だった。炎使ガディスの言葉をまともに受けとめるなど。あの男の運命はすでにこちらが掌握している。我が身の自由さえ許されぬ立場で何を言おうと、すべては虚しい遠吠えだ。

「クリス様、そのままファイアマスターをここへ引き揚げてしまいましょう、あれはクリス様のものにしてしまえばいいんです！　抵抗が心配ならもっと傷を深くしてからでも……！」

簡単なことだ。迷いを覚えるような局面ではないはずだ。

クリストファーには、指を一振りする程度の労力で足りる。それですべてが片付く。

だが……

ヴン、と、大気が鳴った。

また空間内の位置が入れ替わる合図だ。あきらは天を見上げ、そしてクリストファーにその瞳を戻した。

地面の座標を動かしているのはこの少年の力。タイルをずらして絵柄をそろえるパズルのように。

「……何だっけ？」

ふわっとクリストファーが呟いた。

「ぼくは何かをしようとしてたんだけど……」

遠くから彼を呼び戻す声がある。現実世界に——炯月界の側にいるエドウィン・アーサーのものだ。

「うん、わかってるよエドウィン、そうじゃなくて今のぼくの気分が……何だったのかってことなんだけど。……わからない？」

クリストファーの求める返答は得られない。どこからも。

目の前の少年の混乱ぶりに、ガディスは痛ましげに顔をしかめた。与えるショックが大きいことは初めから予測できていたのだが。

「わかってる、わかってるよ、ちょっと待っててよエドウィン、頭のなかがぐちゃぐちゃになっちゃうよ……」

その美しいプラチナブロンドの髪を片手でおさえてクリストファーは口早に叫んだ。透明な涙がこぼれおちていることには、自分では気づかない。

「ちゃんとうまくやるから……待っててよ、もう少し……！」

天に満ちていく。尖った磁気の唸り。

「気をつけたほうがいい」

エドウィン・アーサーの目前に、そんな一言とともに黒髪の少年の姿が不意にあらわれた。葉月奏太だ。界の扉をひらいていた現場から、瞬時にこのホテルの室内まで転移してきたようだった。

「不穏な動きだ。いったい何に気をとられている!?」

「！」

愕然と、エドウィン・アーサーは自らが陥っている状況にそこで初めて意識をさしむけた。なぜ見過ごしたのか。ひどい隙を作ったものだ！　勘にひっかかる凶意はすぐそこにある。部屋の外……ホテル本館のエレベーターから、インペリアル・スイートのメイン・ドアに達するまでの経路。

漂ってくるプレッシャーは……

「これは……」

エドウィン・アーサーの顔つきに新たな緊張が刻まれた。ただの刺客ではない。いつもの、日常茶飯事にまでなっている類の余計な暗殺者どもではなく。

もっと巨大な。

『さすがにその知覚力はたいしたものだ、アーサー・クレイトン』

待ちうけていたかのような心話が届いた。

『私はアジア第二支部の、諏訪・ウォーレン・一巳というものだ。顔を合わせるのは初めてだが、私の名くらいは貴兄も知っているのではないか』

そうか、そういうことか……!!

エドウィン・アーサーは上着の内から拳銃を――扱い慣れたオートマティック、シグ・ザウエルP226だ――ひきぬいている。余裕をもって立ち向かえるような相手ではない。特に今は！

「クリス様！」

強く呼びかけながらクリストファーを左腕で抱き寄せ、そのまま真っ暗な空をうつす大窓のところまで移動する。

「撤退か？」

醒めた口調で奏太が問う。

「そういえばあなたの〈転移〉能力の定員はどの程度でしたか、礼神官アスヴァル殿」

「期待しないほうがいいだろう」

ドアの向こうに迫った来訪者の正体を察知し、奏太もそこでやや気難しく眉を動かした。

「連中――能力者を揃えているのか。こちらの力を圧迫する術を使う……」

「いかにもそのとおり、ですよ」

苦々しくエドウィン・アーサーは呟く。

「あれが〈覗の属〉の特殊部隊というやつです」

どこでどう彼らがクリストファーの動きを嗅ぎつけたのかは、エドウィン・アーサー個人の想像の域をこえる話だ。だが、それまでの道筋がどういうものであろうと……

この、カンナギがこちらへ照準を定めてきたという事実は変わるまい。

「いよいよ私も正式にお払い箱になるわけか……」

カンナギという基盤に今さら依存する思いなどは皆無だが、問題はそこではない。厄介なのは、カンナギが組織をあげて全面的にクリストファーを妨げる側にまわることだ。エドウィン・アーサーはかすかに舌打ちをこぼしている。失策はしでかしていないはずだ。どうやって彼らは情報を得たというのか。

「クリストファー様！」

左腕に抱えた少年にむかって、さらに声をはりあげる。だがそこで何が起きているのかまったく感知する気配のないままに、クリストファーは魂のぬけた人形のように沈黙しているだけだった。

「何だって？」

その同じ瞬間に、彼らのいるホテルからそれほど遠く離れているわけでもないマンションの一室で、篠崎一砂という名の青年も意外そうな呟きを発していた。

「ウォーリーが動くなんてどうかしてるぞ……どうなっちゃったんだい、アキラ？」

『さあ？　一砂が教えてあげたんじゃなかったの？』

彼の息子からは、のんびりした質問が返った。

「まさか。ぼくがそんなことしてやる筋合いはないじゃないか」

特徴的な、色の薄い瞳を何度か瞬かせてから、一砂は机に置きっぱなしでとうに冷めきったコーヒーのカップをとりあげて中身を一気に飲み干した。息がつまってしまって、なんでもいいから喉に流しこむものが必要だったのだ。

「……やれやれ、驚いたな。でもこれは誓ってぼくの仕業じゃない。ということは……」

「さっきデューンが言ったわ、手を打っていられたのはライアだけだってことを」

鋭い調子で、彼の傍らに立つ少女がそう声をはさんだ。

「でもぼくはこうも言ったはずだよ。光使ライアが『カンナギ』につながるルートをつかむのは」

不可能。

そこまで言いかけて、彼ははたと唇を凍りつかせた。

「待った……〈光使〉ライアだって？」

『あっ！　一砂の言いたいことわかった！　確かめてくるね、今ひとっ飛びするからさ！』

ネットワークの内側にいる『アキラ』の反応は見事なスピードだった。そうだ、全地球上を

活躍の舞台とする〈覗の属〉が頻繁に利用する通信手段は、巨大なコンピュータ・ネットワークの集合体なのだから。

「どういうこと？」

少女――『彰』が尋ねる。

「うん、つまりね、カンナギの極秘ネットに侵入することも彼にはできたかもしれないと、ちょっと思い直したのさ」

もしも彼が、炎使ガディスとクリストファー・ローディン・ジュニアのつながりを――たとえばその国際通話の内容からでも――知りえたとして、そして手を尽くしてクリストファー少年の素性を探ろうとしたならば。

『一砂、やっぱりだ、カンナギの支部あてにクリストファーの室番号を流しこんでる跡があるよ！　差し出しは名なしのごんべさんで』

『わかった、上出来だね。でもあんまり物騒なところをいつまでも覗いてるんじゃないよ、早く帰っておいで』

よくやった、と息子には褒め言葉を忘れずにおいて、一砂は複雑な笑みを彰に向けた。

「これはぼくの才能のうちに含まれるのか、単に光使ライアの性格の悪さなのかどうかは何とも言えないな」

「だけどあの人がコンピュータ通信に精通していた程度じゃ、カンナギのネット破りなんてで

きないわ」

「違う、違う。もちろん正攻法で行っても無駄だよ。肝心なのは通信回線のほうさ。太平洋を横断してるケーブルが何なのか彰は知らなかったかい？」

少女はいぶかしげに沈黙する。篠崎一砂は椅子（いす）のうえに行儀悪く両足をもちあげて——それでも、そんなことが妙に貴族的（ノーブル）なしぐさに見えてしまうのがこの人物の個性なのだが——ため息まじりに正解を明かした。

「光ファイバー、だよ」

III

臨界が来る。

暗い、無表情なグレイの天を光使ライアは仰ぎ見る。はりつめた雷鳴の予兆が、この閉鎖された小宇宙をつらぬいてゆく。

「でかいやつが来るぜ、気をつけろ!!」

ガディスが鋭い声を放った。

とっさにあきらの腕をとり、ユーマは一足飛びにクリストファーの幻像から距離をひらいた。つうっと足元の地面に何本もの線が走ったのがそのときだった。
裂ける。
「大変だ……エドウィンが困ってる」
ゆらりと、ぎこちなく顔をもちあげてクリストファーが呟いた。
茫然とする気分からはまだ回復していない。夢遊病者のような、ひどく現実から遠ざかった独白だった。
「ちょっと待ってねエドウィン、もうひとつ入れ替えをしたら……それで終わりだから」
シャッフル？
間近にその声を聞きとり、ガディスはふと大きく両眼を瞠った。
要注意だ。目的のないことにクリストファーが力を揮うと思ってはならない。どれほどの精神的混乱のなかでも。
「クリストファ……！」
低いガディスの叫びと、ちょうど交差するタイミングでクリストファーの姿はその界の地表から消え失せた。ドッ!!　と前のめりの不気味な震動が、残された彼らのうえに激しく降りかかった。
「！　ガディス!!」

腕のなかにあきらを庇いながら、はっと息を呑んでユーマが呼びかけた。ひきはなされる……！

空間の秩序が一度に崩れるのがわかった。数歩ぶんの距離であったはずのガディスの位置が、一瞬のうちに声もろくに届かぬ彼方に移っている。目の錯覚をひきおこす騙し絵の効果のような、理屈にあわない変化だ。

「ちっ」

ガディスは舌打ちする。あきらが——エクサール・ディシスが遠ざけられる。それが狙いか。彼女から司杖を奪うことになる！

「ガースを!!　受け取っていけ、早く!!」

「！」

ユーマが素早く右の拳を振った。その手首に銀の腕輪が顕現する。ディレイ・ミンス。水を操る使鍵の姿。どこまで通用するかはわからないが、大気中の水分を流れの鞭に変えれば……

「駄目だよっ!!　みっちゃん駄目だっ!!」

不意にあきらの声が彼の動きを遮った。何!?　と、ユーマは自分の耳を疑った。

「なに言ってるんだ、今はガースだけでもっ……!!」

「違う!!　そんなことしたらガディスが!!」

あきらに言いきられて初めて、ユーマも重要なことに気づいた。

今のガディスから司杖をとりあげたら。彼の負っている深い傷は。
「ああ、もう……！　ぼくも大馬鹿だけどあきらも変なとこで馬鹿に気をまわすんだから!!」
腹立たしくユーマはそう怒鳴りつけたが、そこで無情に徹することも彼にはできないのだ。
「このっ……水浸し野郎ォッ!!　んなとこで迷ってる場合か、阿呆がっ!!」
ガディスが吠えた。まったくもってガディスが正しい。どう答えてやろうかとユーマは思案したが、それよりも次の大震動が襲ってくるほうが早かった。

『問答無用……とまで言う気はない』
最高級ホテルの一室にエドウィン・アーサーを追いつめた、〈覗の属〉よりの派遣者、諏訪・ウォーレン・一巳の下した通達はつくづく紳士的なものだった。
直に相対する以前から。
扉ごしに、語りかける思念で。
『だが貴兄らが明らかに本来の道から逸脱したところに在るのは、我々も軽視できぬということだ。無益な騒動は避けて、しかるべき場において釈明をしたまえ。それが唯一、貴兄に勧められる選択だ、クレイトン』
釈明、か。
詐欺師になりきって我が道がカンナギの理念から逸れていないことを力説してみせるのも、

それはそれでやり甲斐がありそうだが、自分がそんなに暇な立場でないことをエドウィン・アーサーは知っている。

諏訪といえば〈覗の属〉における最も尖鋭的な『実動隊』を率いるとされる男だ。うかつに手を触れるには、危険度の高すぎる相手だった。

「誰？」

突然、エドウィン・アーサーの耳元でぽつりと尋ねる声があった。

「何なの、そこにいる人？」

クリストファーだ。エドウィン・アーサーは巨大な力が巡ってきたのを感じとる。運命は自分たちを見放さなかったらしい。

「カンナギの〈将校〉と呼ばれる男ですよ」

「戦争が好きな人？　友達にはできないみたいだね」

「お友達にしたいんですか？」

「別に。何もわざわざ、だよね」

眠いところを叩き起こされたばかりのような、漠然とした不機嫌さでクリストファーは吐息をもらした。

「エドウィン、せっかく借りてもらった部屋だけど……」

その気分の延長のまま、少年は頭痛がのこる額に手をあてながら呟く。

エドウィン・アーサーにとっても、そして葉月奏太にとっても、この場合、なんら否やのない一言を。

「壊すよ」

深夜の都心に聳える豪壮なホテルの最上部、インペリアル・スイートの階層から、どっと爆風が闇空へつきぬけたのは、それから一秒もたたぬうちだった。

不思議と、そこには音というものが殆どありはしなかった。巨大な規模の爆発にかかわらずそれはひそかに、余人の目をかわそうとするような静けさを保ちつづけていた。

砕けた窓のガラスが微細な光となって、眠らぬ街のうえに舞い散った。きらきらと、呑みこまれていく。地上の光群のなかに。

「何かありやがったな、向こう側で……」

極度に波打つ大地に膝をついたまま、炎使ガディスはそうひとりごちた。エドウィン・アーサーの口うるさい介入の仕方と中途半端なクリストファーの消え方から見て、一度ここから手をひかざるをえない事情が『彼ら』には生じているようだった。

それはクリストファーの動揺に端を発していることなのか……あるいは、まったく別の要素が。

ヴ、ヴン、と唸りながら周囲の光景が何度か明滅した。座標が混乱している。めりめりと、すぐ間近に迫る天が破れ、傷ついた皮膚のようにめくれあがった。亀裂の奥には、虚無の闇がじわりと顔をのぞかせる。

「！」

視界が急に反転した。瞬間で、まわりのすべてのものが入れ替わった。

どこに跳んだのだ、自分は？　ガディスは瞳を見開く。地表に大きく口をひらいた暗黒が、落下の先に用意されていた。

「ガディス！」

誰かが呼びかける。

墜落の半ばで、ガディスは誤ることなくその声の位置を聞きわけた。

勘だけで距離をはかり腕をのばす。確かなタイミングで、力強い手が彼の片腕を摑みとった。

闇の縁に立つ——光使ライアの掌が。

激震の始まりと同様に、後の静寂もまた唐突にやってきた。しゅん……と、この狭い小世界全体から生気がぬけでていったようだった。

外部からの干渉が消えた……？

水使ユーマは、急に静まりかえった周囲の気配に、ゆっくりと首をめぐらせた。ふたつの壁に左右をふさがれた、細長い場所に彼らはたどりついていた。

巨大なひびわれが背後の地面には走っている。どこもかしこもぼろぼろに壊れかけている、という印象だった。

「界の操作は終わったみたいだ。なんだか、不自然な止まり方をしたけど……」

「アスヴァルがひきあげたかもしれない。ここと炯月界をつなぐ扉から」

いっそう灰色の暗さを増した天を見やってから、あきらが呟いた。

敵方に何かアクシデントがあったと考えるのは、間違ったことではないだろう。けれど彼らが目的を果たさなかったということと、それは必ずしも同義にはならない。最後の、最大の課題が残されている。そのためのお膳立てをクリストファーは決して忘れずにいったはずだった。

「きっと、そうだ……」

肉薄する。

姿なきもの。

「え？」

あきらの独白をユーマが聞きとがめた。

足音も、空気のゆらぎも——わずかな風も与えずに来る。

なつかしげな眼をして。
終焉(しゅうえん)を求めて来る。

一瞬ですべてが決するだろう。

IV

「これで八回だ」
空間の裂(さ)け目からガディスを救いあげたライアが、無表情に口にしたのはそんな科白(せりふ)だった。
「何がだ?」
「俺がおまえの生命を助けたのが、さ」
「嘘をつけ、こいつで五回めだ」
苦々しくガディスが反論する。助けられた直後とあっては、その勢いも弱くならざるをえない。
入り組んだ、薄い壁がまわりじゅうを取り囲む。複雑な迷路がつくりだされている。これがクリストファーの改造(シャッフル)の結果か。

「傷が、ずいぶんとひどいな」
「ちょっと乱暴な小僧の相手をしたのさ。俺様が後ろをとられるとは抜かった話だぜ」
「クリストファー・ローディン・ジュニアか」
ライアがその名を呟く。ちっ、とガディスは舌打ちした。
「やっぱり裏に手をまわしていやがったな、てめえ」
「軍事の原則くらい知っているだろう、ディ。戦争の第一歩は情報からだよ」
「ライエノーツの原則は、少なくともそれじゃねえな」
ガディスは憮然として吐き捨てるが、今はそんな話題でいつまでも喋っていられる時ではない。
ライアの口数も少ない。いつもならそこで更に鼻持ちならない発言が加わるのだが、今の彼は、真っ黒な大穴のへりからガディスがよろめき立ちあがるのを黙して見守っただけだった。
「……すまねえ、ライア、おまえに誤算がひとつある。俺のこの余計な怪我のせいでガースがこっちに来ちまってるのさ」
「そうか……」
ライアはやや眉をひそめる。
肝心のガースが彼女の手中にないとなると、不安はそれだけ高まるが。
「あきらが……必要だと思って自分でそうしたのなら、仕方がない。それに、こちらに利点も

ないわけじゃない。あきらの居所がわかりやすくなる」

「んなこと言ってる間に奴に後れをとったら、いくらこっちに利があったって全部おじゃんだ。畜生、あの大甘娘……」

ガディスはむかむかと腹を立てながら——何が最も腹立たしいかといったらもちろん自分なのだ——胸元を掌でおさえた。身体の裏側、背骨の中枢が現在進行形で修復されている。細胞のうごめく音まで聞こえてくるような、異様な感触だ。

命ずる言辞も何も要らない。司杖の番人と呼ばれるものならではの、自動的な現象。

……今までの四年間に、何度こいつのせいで死にそびれてきたものか。

「悪ィな、トロい身体でよ……。行くぜ」

ひきずりがちの足取りでガディスは、クリストファーの力が用意した厄介な迷路のなかへと歩を進めはじめる。

ガースによって強められる感覚が水の使鍵ミンスの波動と、そしてその主君の存在を彼に教える。先に行けとライアに言えないのはつらいところだが……

「小僧の魂胆はっきりしてる。俺とてめえをこっちのジャングルに隔離しておいて、奴のほうにチャンスを作ったはずだ」

あの『暗殺者』に。

傍らに並んだライアが、つと琥珀の双眼をあげてガディスを見た。

「……ディ。ひとつだけ確かな考えを言っておく。イオには、絶対にあきらを殺すことはできない。むしろ危険なのはイオ自身の生命のほうかもしれない」
「おい、その前によく自覚しておけよ。奴らの話になるとどこまでもお優しいお兄様になっちまうのが、てめえの悪い癖だ」
ガディスはわざと警戒心をおもてに出す。
甘い見通しには厳しい忠告でバランスをとらねばならない。後に本人が傷つく度合いを減らすためにもだ。
「そいつはてめえの後ろめたさから出てくる考えって場合もありそうだぜ。簡単な責任のすりかえだ。奴を欺いた分の罪悪感ってことさ」
だが、それだけ容赦のない論理をガディスが投げかけたのに対して、ライアはただ短く、首を横に振っただけだった。
「いや……違う」
動く必要はない。
理性的に、ユーマはそう判断していた。中心はここにある。この閉鎖世界に足を踏み入れている、すべての者がめざす先は。
移動することが、却って隙をつくることにもなりかねない。そもそも、逃げまわるためにこ

こへ来たのでもないのだ。

決着を――

救いを見出すためにこそ、自分たちはあの傷ついた風使の誘いに応じたのだから。

「みっちゃんは今、何を考えてる？」

あきらが不意に尋ねた。

右の手首に輝く腕輪に指で触れながら、ユーマは少し沈黙する。

「……イオには、誰も殺させないってことだよ」

あきらのことは勿論。

――誰も。

「本当は、あきらを護るためにぼくの生命も惜しくないって言いたいとこだけど、ぼくはそれもいやだ。イオの手が穢れるのは、イオの魂が闇に堕ちるのは絶対にいやだ！」

そうだ、自分たちはいつだって強欲なのだ。

ライエノーツがもつべき真の矜持とは、結局そういうところに顕わすものなのかもしれない。運命に、従順に寄り添いなどせずにいることが。愚かでも無謀でも、それでも本当に求める結果をつかみとる者であることが……。

「ぼくは現実主義だし常識家だしモラリストだからね、いつも物事そんなに望みどおりに動くと思ってちゃだめだなんてイオに説教する側の人間だけど……！　でもこれだけはぼくもゆず

りたくない。足掻きたいんだ」

「うん……」

あきらが頷いた。

「みっちゃんは間違ってないと思う」

その言葉は、ユーマには遠い、見知らぬ誰かが呟いたもののように聞こえる。遠く。

ふと、ユーマは彼女のことを素早くふりむいた。ようやく思い至ったのだ。ずっと胸の底にまとわりつく、気遣わしさの正体に。

「あきら……！　ひとつ訊きたいんだ、ここにいるあきらは誰なんだ？」

それはひどく唐突な問いかけだ。あきらが大きく、瞳をみひらいた。

「え？」

ここにいる、今の、来生あきらは。

言葉を探して一度唇をかみしめ、ユーマはさらに自分の違和感へと切りこんだ。

「眠りの世界に籠るんじゃなくて、戦うってことをあきらが決めたのはぼくも嬉しいんだ。だけど、その時点からだと思う。あきらの言ってることが、ぼくにはあきらの声で聞こえてこない気がするんだ。あきらはずっと、自分を消してエクサールになろうとしてるんじゃないか、ぼくらのために？　それとも、それがあきらにとって自然なことなのか？」

「――――」

「あきらは今、何を考えてる？　ぼくにはわからないよ。もちろんわからなくて当然なのかもしれないし！　わからないからってぼくも嫌にはならないけど！　でも心配なんだ。だってそれじゃ本末転倒じゃないか……」

何が本末転倒なのか、ユーマは語らない。けれど。

暗灰色の天の下に、あきらはしばらく言葉を失くしたまま立ち尽くしていた。彼女がアスヴァルの謀略を知って走りだしてから、そんな風にはっきりとあきらが途方に暮れたのは初めてだった。少なくとも、ユーマの瞳にうつる範囲では。

「……なあんだ、バレまくってたんだ、みっちゃんには……」

深く、身体の奥底から溜め息をついて、あきらがゆらりと頭を動かした。

「ちがうよね、みっちゃんの目をごまかそうってとこが大それてるよね。よくここまで続いたって感じだよね」

「あたりまえだよ。なにしろ、ぼくはあきらのお兄様だけじゃなく母親代わりだってできちゃうくらい懐が広いんだからね」

自分では、だからこそ損な立場にまわっているのだと思いもするのだが、ユーマは複雑な顔でそう駄目押しをくらわしておく。

「うん。とにかくハッタリは必要だと思ったんだ。じゃないと自分でもまだ勇気が足りないの

がわかってたから。どんな嘘を被っても戦わなくちゃいけないと、あきら本人に言いたかったから。……でも、もう要らないね」

男物のジーンズの腰に両手の指を添えて、ゆったりとした姿勢をとりもどしながらあきらが言った。潔い口調だった。

今、たちむかう相手はすでに礼神官アスヴァルではなく、守護師団の一員――風使イオ、なのだから。

繕ったエクサールらしさなど要らない。

でなければ、ひどく不実なことになってしまう……。

「みっちゃんに言ってもらってよかった。ぎりぎりで間に合ったって気がする」

あきらは左の掌を、そっとひろげる。中指にはまった指輪は、変わらぬ清らかな銀光を宿している。

大丈夫だ。

大丈夫。

ディレイ・ザードの囁きが、今は聴こえそうにも思える。

心優しい風の使鍵は自らを離れた使い手のことを、責めるどころか、いつまでも真摯に案じつづけている。それがわかるのだ。

ぴくり、とディレイ・ミンスが……緊張を感じとって、震えた。
ユーマは凍ったように口を閉ざす。時はもう、充分に満ちたのだ。無音の秒読みが彼らをとりまく。
残る二人の守護者がここにたどりついていれば、とも思うが、陣をかためる人数が多ければ多いほど、そのすべての人間の意識が逸れる一点を狙いすましてくるのが『彼』のやり方だ。隙を見出すまでの長い忍耐と、異様なまでの集中力によって。
そしてどう考えても安全であったはずの場所に、すべりこんでくる。姿なきままに。
仲間に依存する気分が生まれないだけ、今のほうがましだ。
「どうしたんだ、イオ……」
胸を占めた巨大な切なさに、思わずユーマはそうひとりごちている。
伝わるものがある。狂おしげな苦しみが。
今更そんなものに圧し潰されるおまえでもないはずだ。
ただひとつの故郷の滅びさえも、すでにのりこえてきたのだから。
新たな世界における新たな名前を、幸福な心でうけいれることができたのだから——おまえも。
一瞬で、それは来る。

「あきら！」

鋭い、呼び声が。

背後からあきらの耳にとびこんだ。誰なのか確かめるまでもない。光使ライアの放った警告。

「！」

あきらがふりかえる。死角――。

疾る影も残さずに、見るものの知覚をかいくぐり、目標への最短経路を彼は選んだ。あきらが見返ったとき、すでに風を体現するものはそこに在った。

美しい風使は。

触れあえる近さに。

ユーマの腕輪が装剣と化してそこへ介入しようとするのを、静止した時間のなかであきらの意識は捉える。ユーマは殺さずにイオの武器を奪うことを考えている。イオが凶器とするもの、それはイオ自身の戦闘力にほかならない。彼の腕を切り落とす術しかないのだ、ユーマには！

「駄目だっ！」

あきらは叫んでいる。それではユーマが罪を負ってしまう。イオもそれだけでは止まらない。光の使鍵と炎の使鍵がそこへさらに残酷なかたちでかかわるだろう。

そのとき――

「ディレイ・ザード!!」

すべての使鍵のなかで最も早く動かされたのは、風の使鍵だった。愕然と、ユーマがその目を瞠った。どうっと強靱な大気の渦があきらの身をとりかこみ、奔出する力に押されて周囲に円を広げた。

陣風の渦は風使イオの動きをわずかに妨げるが、彼を傷つけはしない。しかし金褐色の髪を激しい風の流れに委ねた瞬間、イオの内部にはまぎれもない驚愕が生じている。

彼にしか認識されない、衝撃、だ。

「ザード!」

竜巻の唸りを発する使鍵に向けて、あきらは声をはりあげる。

「もうザードは還っていい! せんちゃんを護りにいかなくちゃだめだ、早く!」

「あきらっ……!!」

ユーマが顔色を変える。イオにわざわざ使鍵を譲り渡す気なのか。

今のイオがザードを操ったら。本当にとりかえしのつかぬ惨事になる。手加減はしていられなくなる――殺すしかなくなるのだ。



「やめるんだ、無茶だ!!」
だがユーマがひきとめるより先に、ぶわっ、と熱のような、圧力のような、無形の霊気があきらから離れるのがわかった。
それは迷うことなくイオの身を包み、そして内奥へと浸透してゆく。
戻ってゆく。
「……ザード……!!」
イオの唇から、低い呻きに似たものが洩れた。
残り一歩分の距離もないほどに標的の間近までたどりついていながら、彼の足はそれ以上前へと進むことを不意に拒んだようだった。

——違う、違う……
使鍵が偽りを語ることはない。決して。
つよく魂から結びついた使い手に、ディレイ・ザードが伝えるのは。
真実、知り得たことだけだ。

「違う……!?」
震える声でイオは独白した。目前にあるすべてのものが、彼の意識の内では意味のないもの

と化した。

心臓が……

胸の核が、灼熱の痛みに襲われる。礼神官アスヴァルの侵入した傷だ。あの男はどのような暗示を授けたのだったか……。エクサール・ディシスの生命を標的として、妨げるものには死を与え、その果てに——だが最後に、エクサール・ディシスを手にかけることもならないと。本当に彼女を追いつめるところまで至ったなら、そこで自害する自由を許してやると……

ただそれだけの、残酷な意図にのみ支配された、条件を。

しかしこの現実に対する条件はアスヴァルも定めてなどいない。ない、はずだった。

それならば、灼け爛れた心臓の始末のつけかたも、もう自由にしてしまっていいのだろう……。

「俺は……俺は、今……」

苦痛に溢れた、浅い呼吸の下、イオは掌でその貌を覆いながら呟く。乱れた髪が金糸のように降りかかった。

「今、誰を殺そうとしたのか……!!」

「!?　——イオ!!」

吐きだした叫びにつづけてイオが彼の左手に銀の光をまとわせたのを、ユーマはひどい危機感とともに呼びとめた。その左手に帰還した指輪がかたちを変え、破壊力を宿した指鞘となり

——そして。

貫く。イオ自身の心臓を。

V

ビシッ！　と、激しい炎の矢が、イオの左拳を——まさに、使鍵ザードを宿す聖光石の指鞘だけを——狙い撃ったのが、そのときだった。寸前で的を逸されたかたちで、イオの左腕が宙にはねあげられた。

はっとイオが瞳を見開く間に、その腕に身体ごとしがみついて動きを封じた者がいる。あきらだ。

「ばか!!　せんちゃんのばかばかばか、おおばかものおおっ!!」

「——」

問答無用の勢いで怒鳴りつけられる。激情というよりは、あからさまな激怒だ。身も世もないありさまで、あきらは心から怒りくるっている。

振りはらうことは、さすがにイオにはできない。馬鹿はあきらのほうだ、とユーマは叱る声すら失ってしまう。たった今まで暗殺の標的になっていた人間がやることではない。

「ちょっと待ちやがれ、この軟弱野郎が……」

突発的なあきらの行動にやや頭を痛めながら、大ぶりな銀の弓をぐるりと指先でまわしてガディスが呟いた。

一回転もしないうちに銀弓は元の鎖の姿へと戻っている。炎の使鍵ローザの、もうひとつの形態だ。

その傍らには、制止の役をガディスに譲り、無言のままライアが佇んでいる。守護師団の総員が、ここでようやくひとつの場に合したということだ。エクサールの乙女のもとに。

「大騒ぎはこのへんで終わりだ。てめえも、ここまできて往生際をまちがえるんじゃねえ」

ガディスはどこか気乗りのしない様子で不機嫌にイオの前まで足を運び、そんな科白を口にする。あきらに左腕を占拠されたきりの状態で、イオは一度ガディスと瞳を合わせる。

明確にせねばならないことが……いや、すでにおぼろげになりつつあることが、互いの間に存在する。ガディスにはそれがわかりかけている。

「……どうした。なんだって自分を殺そうなんて思いつきに突っ走ったんだ、言ってみろ」

「……」

イオは即答しない。

大きすぎる意味が、そこにはあるからだ。

「アスヴァルは……初めから、エクサールを失うわけにはいかない男だ……。自分を止める以外に……俺が、安息を得るすべは残されていないと……」

「いや、違うぜ。てめえの言うことも嘘じゃないだろうさ。けど足りねえ。さっきのおまえの驚き方はそれっぽっちの理屈から出てくるもんには思えねえのさ、俺にはな」

そう途中でイオの言葉を遮り、ガディスはふと自分自身の発見を悔やむようにぎりっと奥歯を噛みあわせた。

「……畜生が……頭がよすぎるぜ、俺ってやつは」

「何の話だって？」

不穏な空気を感じとり、ユーマも眉をひそめる。

「待てよ……畜生、待ちやがれ……」

乱暴な手つきで錆色の髪をぐしゃぐしゃとひっかきまわしてから、炎使ガディスは数秒間かけて呼吸を整える。無理やりに意識の熱をさますように。

やがて……。

「……ライア。てめえにはわかってたのか、こうなることが？　わかっていて俺をつきあわせてきたのか」

まっすぐに視線を足元の地面へ突き刺し、ひどく冷静な声でガディスが尋ねた。

ライア？

あきらはその顔をあげて光使ライアの姿をとらえる。

最後の、全部の鍵を持っているのは。

風使イオも、水使ユーマも、それぞれの瞳を彼へと向けた。余計な言葉をさしはさむ余地は、今のガディスの問いにはない。

「ああ、そうだ。わかっていたことだ」

そして、すべては覚悟されていた……。ゆっくりと、光使ライアは静けさのなかに、今度こそ偽ることのない回答を紡ぎ出した。

「おまえが最後にはそれを知るだろうと、思っていた」

断罪から、永遠に逃れてゆけるとは、願いもしていない。

「それでもおまえ自身と、そして司杖の力が俺には必要だった。そのために……俺は、おまえをここまで連れてくるために、おまえを欺いた。ガディス」

真に欺かれたのは——風使イオではなく、水使ユーマでもなく……

確定していた事実を曲げたのは、司杖の守人ガディスがあきらの敵にまわるのを避けるため。

炎使ガディスを失わぬためだ。

その偽りを、ガディスに対するものだけでとどめおけずにいたことが光使ライアの誤算であり、風使イオにとっては運命の転回点であったのだ。

だがもはやそれも白日のもとに明かされねばならない。賭けはすでに、終わりを告げている。

「……ガディス」
「わかった。もう訊くことはねえ。全部わかっちまった、俺のつまらねえ勘違いさ」
ガディスは口早に言って頭を振ってみせる。ライアにそれ以上を語らせまいとしたのだ。
「いや、最後まで聴いてほしい。俺が言わなければならない、本当のことだ」
光使ライアの琥珀の双眸が震えるのを、あきらは見た。
正しい記憶をもつ者の。
それゆえの。
真の、哀しみ——。
「もう……ディシスはどこにもいない。俺が琅月界から連れだしたのは、間違いなくメサイエ・エクサール・レア。ディシスの愛した妹だ」

風の使鍵は、自らを動かしたエクサールの本質を決して見誤りはしなかった。そして風使に伝えたのだ。そこにいる乙女が、誰であるのかを。
「そんな……」
混乱した思いのままで、あきらはそう呟き、すぐ間近にいるイオの顔を見上げた。そんなことを。そんな風に、急にまた認識しなおせと言われても。
「……そうだ。使鍵は、自分を操る者を必ず、正しく見抜くはずだ。それが交信するに相応し

い使い手であるかを、その奥底のところまで読みとらなければならないからだ。でなければ誰も、どんな使鍵であろうと動かせはしない」

抑えた口調で、イオが答える。

人の本質を知ることにおいて、使鍵が惑わされることは絶対にありえないのだ……。

「じゃあ……それなら、なんでアスヴァルのことをあきらに訊いたりしたの、えーちゃんは？」

ライアへと視線を転じてあきらは尋ねた。

息が苦しくなる。アスヴァルの名前だけで、勝手に。この、自分自身にとらえられぬ心の正体は。

「アスヴァルってあきらの何？　あきらが思い違いをしているだけ？」

「いいや」

黄金の髪をかすかに揺らし、光使ライアはあきらからまなざしを外して……真実を告げる。

「あきらの想いは、エクサール・レアのものだ。礼神官アスヴァルに対して、君が抱いていた感情の記憶だ」

「……」

茫然と、あきらは次の言葉を失った。考えてもみなかった。

アスヴァルのことを……レアもまた愛していたというのだろうか？

彼はディシスだけを愛しているのに？

「レア、が……？」

乾いた声でライアに問い返したのは、ユーマだった。

「ぼくらは、そんな話は何も知らない……気づきもしていない」

「それは間違ったことじゃない。気づかなかったのはアスヴァルも同じだ。多分、ディシスにも、伝わってはいなかった。知っていたのは俺だけだ。……明かす気もなかった」

エクサール・ディシスとアスヴァルの、禁忌の恋が、ある意味で彼らライエノーツのなかでは公然としたものだっただけに。

その背後で、姉の幸福のために身をひいていたレアの真意など……見えずにいたのだ。誰にも。

「あの子がひとりでそんなことを考えてたんだったら……」

やりきれない後悔が残る。ユーマは額に指の関節をおしつけた。

「ぼくは守護者として失格だ。何の力にもなれなかった」

力になれなかった、と即座に思えるのはユーマの純粋さのあらわれだろう。イオの感慨はもう少し複雑だ。だが、寡黙な彼がここでその思いを語ることはなかった。

「てめえが失格なら俺は何だってんだ。腹が立つからやめろ」

ユーマのほうをふりむきもせず、苦々しげにガディスがそんな言葉を投げつけた。

燃えさかるような、朱赤の瞳を足元の地面へと釘づけにして。

明かされた事実に対して最も激しい反応を起こすのは、この炎使ガディスでなければならなかった。

忠実な、エクサール・ディシスの守護者、さらに彼女のガースを預かる者として。

「……」

彼が、そのまなざしを無機的な地表の上からひき剝がすまでには、永い、永い時間と沈黙が必要だった。ゆらり、と首を動かし、やがてガディスは離れて立つ光使ライアを正面から眺めやった。

なにごとも、そこでは告げず、ただガディスは無言で歩きだす。まっすぐに、一歩ずつ……ライアのいるところへ。

罪深い、〈裏切者〉の前へと。

裁きが下されることを、ライアは待ちうけているようにも見える。逆に、どんな行動にガディスが出ても屈せぬ覚悟を定めているようでもある。彼が自己本位な、そして我が身の責任にどこまでも執着する、ライエノーツの首席である以上は。

だが——。

そのときのガディスの選択をライアが予測していなかったことは、瞠られた瞳の表情で明らかだった。炎使ガディスは片腕で自分の肩に彼を抱き寄せ、その黄金の髪に頬をうずめて呟い

たのだ。

「おまえはよくやった……。俺の、負けだ」

「……」

ライアからの声はない。ガディスの言葉を認められずにいるのか。低く、言い聞かせるようにガディスは続けた。

「俺が地球の裏側でグレてる間も、おまえはエクサールの守護者でいることをやめなかった。ディシスをなくしたことに——俺たちが味わった絶望に、何も違いはなかったはずだ。おまえの哀しみをわかってやれたのは……あいつらじゃ足りねえ、本当は俺しかいなかったってことだ。だが俺は、おまえに俺を殺させて、それで楽になることしか考えちゃいなかったのさ」

絶望から逃れるため、与えられるだけの安息を求めたのは、風使イオの考えと何も変わらない。来生芳秋（きすぎよしあき）の言ったとおりだ。ガディスは今頃になってそんなことに思い至っている。

そして——ガディスはもう知ってしまっているのだ。結局は、来生あきらという少女の人格が生じている以上、そこにいるのがディシスでもレアでもないことを。

確かなものは、彼女がエクサールであるということだけだ。

ただ、それだけだ。

「お兄様をやってるおまえに、ディシスのために泣けたためしなんてあるのか、ライア？　俺は四年もの間、気づいちゃいなかった。そのために俺がいたんだとはな」

やわらかい金色の……光輝を象徴する者の髪に掌を触れさせて、ガディスが言う。
琥珀に透ける、光使ライアの瞳から、一筋の涙が今は流れおちている。それはガディスの肩へと零れ、さらに新たな涙が後につづいた。
「違うな」
ぽつりとライアが彼に答えた。
「少なくともこれは、ディシスのためじゃない。おまえのための涙だ」
「可愛げのねえ奴だな」
人の意見くらい素直にうけいれろというのだ。ガディスは憮然として呟く。
「ともかく賭けは、てめえの勝ちにしといてやるさ。ただしこいつはお情けってやつだぜ。図に乗りやがったらただじゃおかねえ。いいな?」

終章

礼神官アスヴァルがひらいた閉鎖世界への扉は、すでに塞がれている。だが司杖（ガース）と四つの使鍵、さらにエクサールの乙女（おとめ）がここには揃（そろ）っているのだ。炯月界（けいげつかい）へと帰還するのは、確実に可能なことだった。

「ただ、この界自体はもう保（も）たないだろうな」

ガディスが言う。クリストファーの無茶な改造のせいで、そもそも充分に壊れかかっているのだ。界をとびこえる力の発動には耐えきれないだろう。世界がひとつ、これでまた消え失せるのだ……。

「その前に……」

ゆっくりと、イオが口をひらいた。

「ライア。剣（ルナク）を貸してくれないか」

不意な申し出に、請われたライアは一瞬、沈黙する。ユーマとあきらもそれぞれ、何を意図

しているのかとイオをふりむいたが、無口な風使が自分から理由を説明することはなかった。
「お役に立てば、だが」
頭環のかたちにおさまっていたディレイ・ルナクをひきぬき、一振りのしぐさで剣へと変化させる。あえて用途は問わずに、ライアはそれをイオへと手渡した。
「あっ……！」
あきらは目を瞠る。
扱いにくい長剣を、慎重に持ち直したと思うと――
ざらり、とかすかな音がした。無造作につかんだ自分の長い髪を……金褐色の美しい髪の毛を、イオは彼自身の手によってあっさりと切り落としていた。
風になびかせる姿がひどく綺麗な髪だったのに！　あきらは顔をしかめることしかできない。今から元に戻すわけにはいかない。
「やだよっ……せんちゃん、勿体ないよ……」
「いいんだ。ここに、捨てていく」
静かな瞳のまま、イオはぽつりと、そう答えただけだった。
一度、守護師団を離れた以上は、守護者としては一度死んだも同じことだ。新たに生まれ変わるための、それはささやかな自戒の儀式なのだ。……すべてが、そこに赦されることはないとしても。

「好きにさせといてやればいい。ケジメが必要なのさ、俺たちみたいな連中にはな」
肩をすくめながら、そのあきらの背中にガディスが声をかけた。一方で、ユーマは力なく溜め息をついている。
「まあね……これでひらめの性格ももう少しすっきりしてくれるんだったら有難いよ、ぼくにも」
「どうしてみんな真面目に勿体がらないかな、もうっ……！」
「俺の悲しげな顔は計算に入らないのか、あきら？」
地団駄を踏むあきらに、ライアが不本意そうに問いかける。
「だめっ。ルナク貸した張本人はもう最初っから除外!!」
「ああ、そうか、今度から鋏は自分で持ち歩いてくれということらしいな、閃」
「今度じゃないっ!!」
「一応……あきら、念のために言っておくが、俺の髪の毛は、もう二度とのびない性質のものでもないんだが……」
「だ、だから……っ」
きまじめに口をはさんだイオの科白にあきらが挫けかかったところに、やれやれとしかいえない顔つきでユーマが割りこんだ。
「さあ道草くってないで帰るよ、お姫様。親父様が待ちぼうけだよ、いいかげんにしないと」

＊　＊　＊

「ふうん、やっぱりカンナギにバレちゃったんだね。まあ、それはそれでいいよね。どっちみち、いつかは相手にしなきゃならなかったわけだし」

都内の最高級ホテルでおきた爆発に世間が騒いでいる頃、そしらぬ素振りで別のホテルのスイートルームに拠点を移したクリストファー・ローディン・ジュニアは、あくまでマイペースな発言を保っていた。

「エドウィンはちょっと頭痛が増えちゃうだろうけど。大丈夫？」

「勿論です。むしろ、向こうの内情を多少は摑んでいるという利点もありますしね」

エドウィン・アーサーは胸を張ってみせる。クリストファーさえ好調をキープしていれば、こちらが恐れねばならぬものなどひとつもないのだ。

礼神官アスヴァルという、使い勝手のいい小道具も現在は手中にあるのだし……。

「ボストンの屋敷をなんとかしなければいけませんね」

「うん。このお茶を飲んだら、ぼくがちょっと行ってくるね」

散歩に出るような気安さでクリストファーが言う。ケーキもまだございますよ、とエドウィン・アーサーはキッチンに立つ。

「……ああ、そうか……そうかも」
頬杖をついて、クリストファーはふと小さな独り言をもらした。
「どうかなさいましたか？」
「うん、べつにたいしたことじゃないんだ」
宙に視線を浮かべながら、この世界最大の権力をもつ少年はつまらなそうな答え方をした。
「さっきね、ウォークマンと話してたときに、ぼくがものすごく変な、わけのわからない気分になったんだけど……。今、あれって、大笑いの気分だったのかなと思って。どうやらぼくはあそこで笑いたかったみたいなんだよね……でもどうしてそんなこと思ったのかな。そのへんはもう忘れちゃったよ」

＊　＊　＊

クリストファーが瞬間的に太平洋を横断するため姿を消したのちに、エドウィン・アーサーはホテルのロビーに設置された国際通話用の公衆電話から、ある人物を呼びだした。
コール先はニューヨーク……こちらは明け方でも、むこうはまだ前日の午後だ。
『代わりましたわ、私よ。何の御用？』
貞淑を装った、女の声が出る。

「ヴィクトリア様ですね」
エドウィン・アーサーは一言、そう確認する。
クリストファー・ローディン・ジュニアの、実の母親の名前である。
『ええ、そうですわ』
「貴重なお時間をいただきまして恐縮です」
慇懃に言ってから――エドウィン・アーサーは聖書にある一節を短く暗唱した。
「へりくだる者は、これを見て喜べ。神を求める者よ、あなたがたの心を生きかえらせよ」
『え、えっ!?』
電話の相手が、不意に悲鳴をあげるのが聞こえた。それで充分だ。エドウィン・アーサーは受話器をフックに戻した。
今のキーワードを聴いた彼女は、潜在意識にすりこんである通り、護身用の拳銃できれいに自分の頭を撃ちぬくだろう。
クリストファーにつまらぬ刺客をつきまとわせていた元凶のひとりがあの母親であることを、エドウィン・アーサーはとうの昔に承知していた。今まではあえて手をくだすだけの理由がないため、キーワードを与えるのみで放置しておいたのだが……。
「今後、まともにあなたがたの相手をしている暇は、私たちのほうにはなくなりそうなのですよ」

冷ややかに、海のむこうの死者へと告げて、エドウィン・アーサーは踵を返す。クリストファーのためにかたづけねばならない事柄が、彼には他にもいやというほど残されているのだった。

――つづく――

【用語解説】

琅月界……球形の閉鎖世界。月斎の地と呼ばれる。多元世界のなかで、もっとも高位に存在し、非常に恵み栄えた。

炯月界……物質と精神の世界。現代の地球社会そのもの。

晶月界……永遠と無限の世界。さまざまな世界の狭間に存在し、高位の神官か、エクサールでなければ立ち入れない。界境とも呼ばれる。

エクサール（界使）……異次元世界への扉をひらき、その二つの世界のあいだに流れるエネルギーを制御する乙女。他の界から因果力をとりこむことで、「奇跡」をおこすことができる。突然変異的に生まれ、不老にして長寿。

エール（因果力）……世界・存在を成立させるためのエネルギー。

エイダ（在気）……存在・人物が発する固有の波動。

ライエノーツ（守護師団）……エクサールを悪用せんとする者から彼女を護衛し、教育し、最も身近な相談相手としても仕える、特殊能力をもった戦闘集団。

ライエス（守護者）……ライエノーツの一員。優れた頭脳、強靱な身体、高潔なる精神、精老から伝授されたディレイ（使鍵）、これらのうちいずれが欠けてもライエスとは呼ばれない。ライエスとなるのは、多くの候補者のうち、厳しい選抜をのりこえて条件を満たした者だけである。直属するエクサールがその座にあるかぎり、彼らも不老である。彼女が世を去り、次代のエクサールが生まれ、ディレイが他の者に譲り渡された時点で、死が訪れる。

ディレイ（使鍵）……自然界と交信する資格のひとつ。ライエスが特殊能力を発揮するための必須条件。象徴として、銀の聖光石に宿っている。

〈付〉　ディレイ・ルナク……光を司る使鍵。頭鎧、あるいは長剣と化す。
　　ディレイ・ザード……風を司る使鍵。指輪、あるいは指鞘と化す。
　　ディレイ・ミンス……水を司る使鍵。飾腕輪、あるいは装剣と化す。
　　ディレイ・ローザ……炎を司る使鍵。鎖、あるいは弓と化す。

精老……生命も肉体ももたぬ、不死の存在。自然のうちに宿る。

神官……精老およびエクサールと交渉をもち、その恵みを人間社会に活用する存在。特に、大神官、主神官、礼神官の地位を高位三官とする。

央界神殿……琅月界の天の中央にある大神殿。ライエノーツの拠点でもある。

ガース（司杖）……黄金色の聖光石でつくられた短刀。エクサールの能力に指向性を与え、増幅する。エクサール以外の者が持っても強力な力を与える。

あとがき

さて、あとがきです！

しかし……じ、実はあとがきなどを書くのはあんまりにも久しぶりなんで、もう書き方忘れちゃってるよ。ええと……皆さんお元気ですか（なんだそれは）。

久々にお会いできた方も、初めてお会いする方も（三巻からいきなり読んでくださる人って、いるのかな？　いることにしておこう……人間、どこが出会いになるかなんてわからないもんね）この物語のなかでしばしの間、御一緒することができてとっても幸せです！

一九九五年最初の新刊、ようやく、やっと、いよいよのエクサール三巻をお届けします。

（これが九四年最後の新刊だと大変きりがよかったのだが……ってのは言わないお約束）

凄いよ。

二巻から、なんと二年七カ月ぶり!!

一九九二年七月以来だよ!!

世の中なめくさってないか若木未生。いや、もうずーっと続きのことが気になって気になって仕方なかった話をこうして無事に書けたので、今は本当に嬉しいです。相変わらず完結への道は遠そうだが（笑）。でもいいのだ。だって面白いじゃん!!（ああ……もお、こいつは）

それにしてもお待たせをしてしまいました。つくづくと。

本編をこれから読む方のために内容はバラしませんが、とりあえず、今回のところまで話を進めないかぎりは、私も真の意味でのエクサールを書いたという気がしないので、こんな状態のものを待ってくださってた方はさぞやイライラしたであろうと……。

ようやく、これで一息です。（でもまだ始まったばっかりってやつ？　そりわいつものことじゃよ……ごほごほ）

二年七カ月が無駄な空白ではなかったことを、今は祈っているのですが。

少なくとも二年前には、『これ』は書けなかったと思うよ。

自分の背丈より上の、ぎりぎり背伸びしないと届かないものに必死に手をのばしていたのが、二年もたつとそれが意外なくらい目の前に来てたりして、で、また別の目標が上に見えてきたりする。

職業作家なんだから、毎回ちゃんとした本を書かねばならんのは当然の前提だけど、それだけじゃなくて、ずっとずっと前に進んでいきたい……とゆーのが、昔も今もおいらの願いであ

ります。楽しいっすよ、もともとキャパが小さいから「おお、成長した！」と思っても（勘違いだったりもする）、あっとゆー間にまたぎりぎりになっちゃうのさ。自虐的？　くくく。

あーとーはー、こういう本が、×カ月もかけないでだな、×週間くらいでさらっと書けたら完璧なんだがね。はははははははは（……）。

で、二年七カ月ぶりの新刊ではあるわけですが、一応その間にもエクサールの外伝は雑誌コバルトのほうで少しばかり書いてたりしました。炎使ガディス君が主役の『あらかじめ失われた恋人』と、エドウィン・アーサー君のために書いた『翠玉の王』の二本が現在キープされております。いずれきちんと文庫におさめてやりたいけど、どういうかたちになるかな？　外伝集になるのか、次巻に併録とゆーことになるのか……。どっちにせよ、なるべく早めに出してやりたいものであります。

だがしかし、二巻で登場した連中を外伝で贔屓してたら、今回はさらにわらわらと新キャラが!!　どうするんだアスヴァル、頑張らないと、どんどこ影が薄くなってゆくぞ!!（いや、そんなこと言ってる場合じゃないんだが）

何が嬉しいって、ついに女の子が出た!!　ということですねいっ。ルウ・シルヴィアン嬢と名字不明の彰ちゃん。おお、二人もおるやんけ。やんややんや。せっかくの女の子たちは大事に書いてあげないとな。なにしろ希少価値だからな、この話では。

デューン一砂氏と諏訪ウォーリー氏は、今回は顔見せ程度ということで。はっ、顔は出てないんだな、ウォーリーさんは……。声見せ？

あきらちゃんとアキラくんと彰さんの名前がややこしいのは……すいませんとしか今は言えない……。そしてまたもや謎が謎を呼ぶのだった。懲りないな、若木。

もう、近頃は若木未生が本を出すたびに必ず、物凄くたくさんの、大切な人達にご迷惑をかけてばかりで、絶対に今度はそんなことにしたくなかったんですが……やっぱり大変なことになってしまいました。

本当に本当に申し訳ありませんでした。

結局、最後までこだわって書くという我が儘を通させていただいて、私は果てしなく非道な幸せ者です。

編集の皆様、印刷所の皆様、巻きこんでしまった各方面の皆様、そしてずっとエクサールの世界を大事に守ってくださっていた羽音こうき様!!　心の底から、反省して、感謝しています。どうもありがとうございました。こ……これからもよろしくお願いいたします。

（今回、私の修羅場に巻きこまれた方々は、ほんとに信じられないくらい大勢いらっしゃるのです……）

羽音さん、いろいろ励ましてもらってばかりで、ありがとう……。『バーヴェリアン四重奏』

（青磁ビブロス刊）、毎回、いつもどきどきして読んでおります。前から言ってるけど、わしは真透さんの熱烈なファンざんす……。でもどのキャラにも羽音さんの愛情が溢れているのがわかります。連載、頑張ってくださいね。

久しぶりの新刊だから、あとがきにも山ほど書くことがありそうだったんだが、なんだか、今は……感無量だし……いいや。（笑）

うっ。今、熱をはかってみたら九度二分もありやがる……。風邪ひき野郎のモーローとしたあとがきで失礼いたしやした。

九五年は、もっとさらに頑張って、いいものをたくさん書きたいです。（毎年思うんだ……）この本が出るのは二月。受験シーズンですね。頑張れば必ず百パーセント報われるって保証は神様にしかできないけど、何かにむかって頑張ろうとしている人、負けずに戦おうとしている人、若木もその仲間でありたいと思ってます。

一緒に進めたらいい……ね。

こーゆーこと書くのは照れくさくてだめなんだけど。

実際、何度もくじけかかって、もう絶対にアウトだとおもったこともあったけど、今はその自分の辿ってきた道を、それでよかったと言ってやれます。

心配しながらじっと見守ってくださってた、読者の皆様。私のようにとろい奴でも、皆さんのおかげで、なんとか書き続けられてます。きっとまだまだ波乱はあるんだが（笑）。よろしければ、どうか、これからもおつきあいくださいませ。

今回も……読んでくださって、本当にありがとうございます。いつもいつも感謝しています。

皆さんに励ましていただいた分、全部、無駄にしないように頑張りますね。

年頭の誓いでした。

ではまた。可及的すみやかに（笑）、再びお会いできれば幸いです。

若木未生

《追記》一巻のあとがきでお知らせした「若木未生黙認FCプラーミア」の連絡先が、今は新しくなってます。

〒一六八　東京都杉並区下高井戸一―四〇―八　杉並下高井戸郵便局留め「プラーミア」

詳しいことを知りたい方は、返信用封筒（八十円切手を貼って、宛名に御自分の住所、氏名

を書いたもの）を同封して、「案内書希望」と明記のうえ、この住所にお問いあわせください。

発足して三年、オフセットの会誌を毎月発行しているエネルギッシュなサークル様です。

（若木あてのお手紙は、今までどおりコバルト編集部気付で送ってくださいね）

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ッ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月2日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽と猫。最近はネスカフェ・マイルドタイムとNEC98マルチが孤独な仕事場の友である。趣味は引越し。(早く引越したいぞ！)コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『天冥の剣1～4』『エクサール騎士団1、2』『XAZSA Ver. 1～2』『グラスハート』『薔薇とダイナマイト』が、また単行本に『天使／来撃』がある。



エクサール騎士団3

COBALT-SERIES

1995年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1995　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-614040-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

私は巫女（エクサール）、多元界の因果力（エーテル）を制御する者――。異世界ファンタジー！

エクサール騎士団（ライエノーツ）12

若木未生
イラスト／羽音こうき



あきらは事故で両親を失い、来生家の養子になった。そこには彼女同様の立場の衛（えい）、閃（せん）、貢（みつぐ）がいて、四人兄妹として育つ。しかし、兄たちの真の姿は異界からの使者…あきらは守るべき巫女だという。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

熱いハード・ビート小説！

若木未生 〈グラスハート〉シリーズ

イラスト／橋本みつる

グラスハート

深夜、朱音のもとに奇妙な電話が。「大至急、あんたのドラムが欲しい」それは天才音楽家・藤谷からの誘いの電話で…！



ステージを終えた直後、尚と藤谷先生が絶交宣言!?理由が分からず、朱音と一至はボーゼン。そんな時、ようやくCDデビューの話が…。

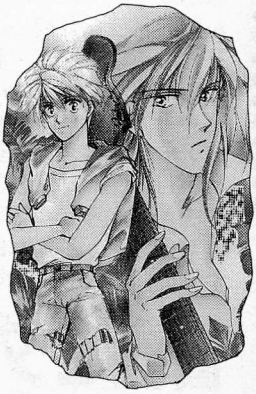
薔薇とダイナマイト

〈好評発売中〉 コバルト文庫

機械人間（マシノイド）ザザと少年たちの人気
シティサイバー・ファンタジー。

XAZSA（ザザ）
Ver.1 Ver.2

若木未生
イラスト／田村純子



夜の銀座の街角で、休業中のギタリスト・京平が偶然出会った少年ザザ。彼は、天才少女の優亜につくられた国家機密級（トップシークレット）の機械人間（マシノイド）だったのだ…！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

妖者に挑む少年たちの人気ファンタジー。

若木未生 〈ハイスクール・オーラバスター〉シリーズ

イラスト／杜 真琴

天使はうまく踊れない
高1生の亮介のまわりに、奇妙なヤツらが現われて。

セイレーンの聖母
十九郎が狙われた！　とてつもない妖力に忍は。

十字架の少女
亮介たちは、諒の妹・彩を迎えて軽井沢で合宿を。

迷える羊に愛の手を
転校先での諒は!?　シリーズ番外編。

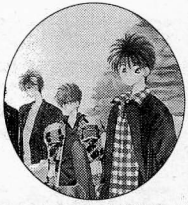
炎獄のディアーナ 〈前編〉〈後編〉
女の子を狙う"髪切り事件"が発生！

天冥の剣 1～4
"吸血鬼殺人"の背後に妖者が。



好評発売中 **単行本** 〈A5判・ハードカバー〉

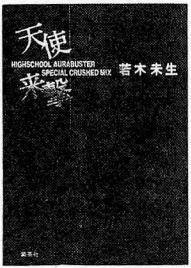
あのオーラバスターの最新作が、単行本でついに登場!!



若木未生

天使／来撃

HIGHSCHOOL AURABUSTER
SPECIAL CRUSHED MIX



第一部完結から一年、ついにオーラバスター最新作が登場。デビュー作や対談、エッセイなど、スペシャル企画満載の特別短編集！杜　真琴の描きおろしイラストつき。